



100th
KONAN WOMEN'S ACADEMY

甲南女子学園100周年記念誌

輝く力、輝かせる力。

甲南女子学園100周年記念誌





甲南女子学園
KONAN WOMEN'S ACADEMY





表紙・裏表紙写真

（建物）
左上：現在の中学校・高等学校
右上：戦前の高等女学校本館
左下：田中町に所在した短期大学校舎
右下：現在の大学
（人物）
右　：学園創立者　　安宅彌吉
左　：初代専任校長　表甚六

100th
KONAN WOMEN'S ACADEMY

甲南女子学園100周年記念誌

輝く力、輝かせる力。

輝く力、輝かせる力。
甲南女子学園一〇〇周年記念誌

目次

4 **ご挨拶**
学校法人甲南女子学園　理事長　中内仁
甲南女子大学　学長　森田勝昭
甲南女子中学校・高等学校　校長　岡田明
学校法人甲南女子学園　名誉理事長　松下正幸
甲南女子学園　清友会　会長　奈良山和子

14 **特別寄稿**
作家　佐藤愛子
東京都知事　小池百合子
作家　朝井まかて

20 **特別写真集**
学園の建築

46 **甲南女子学園のキャンパスと村野藤吾**
京都工芸繊維大学　名誉教授　石田潤一郎
名古屋市立大学　名誉教授　瀬口哲夫

56 **学園の歩み**

57 **第一章　創設から戦後の学園まで**
第一節　学園の創設
第二節　昭和初期の学園
第三節　戦時下の学園
第四節　戦後の学園

76 **第二章　中高の歩み**
第一節　中高校舎移転建設について
第二節　中高の発展
第三節　阪神・淡路大震災と中高
第四節　中高の改革
第五節　中高の新しい発展
第六節　中高の新校舎建築
第七節　中高の現在の歩み

122 **第三章　大学・短期大学の歩み**
第一節　大学の開設
第二節　大学の発展
第三節　短期大学部の発展
第四節　大学の改組
第五節　大学の新しい発展
第六節　未来に向かって

134 **安宅彌吉　その人**
第一節　安宅彌吉
第二節　安宅彌吉の遺産

146 **学園所蔵の文化財**
貴重書・絵画・特殊文庫コレクション

150 **清友会のあゆみ**

154 **歴代理事長・校長・学長**

156 **学園データ**
甲南女子学園役員一覧
生徒学生総数
校舎配置図

160 **歴史年表**

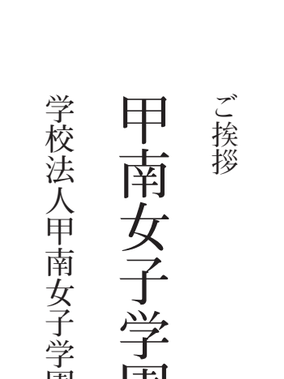
171 **オリンピックを彩った同窓生**

172 **編集後記**

ご挨拶

甲南女子学園一〇〇周年を迎えて

学校法人甲南女子学園　理事長　中内仁



甲南女子学園は二〇二〇年、創立一〇〇周年を迎えました。

前身である甲南高等女学校が一九二〇年四月に開校されてから一〇〇年。記念すべき年を迎えることが出来ましたのは、創立関係者はもとより、歴代理事、学長、校長、教職員、何より保護者・保証人の皆様や生徒・学生の皆さん、卒業生の皆さんの並々ならぬご尽力の賜物であり、深く敬意と感謝を表する次第です。

大正から、昭和、平成、そして令和の四つの時代を通じて、阪神大水害や神戸大空襲、阪神・淡路大震災といった災禍を乗り越え、この神戸の街と共に生き抜いてきたことを思うと感慨深いものがあります。

第一次世界大戦（〜一九一八年）を経て、国を挙げての中等・高等教育の充実が図られ、詰め込み型の知識に偏重した画一的な旧教育がみられた頃、甲南女子学園は、当時住吉村に在住した関西財界人の手で設立されました。

当時、日本経済を牽引し、世界を相手にビジネスを展開していた関西財界人たちは、自由主義に基づく世界的な新教育の流れを敏感に察知し、阪神間の豊かな文化的風土の中、個性を尊重した新教育を理念に掲げていました。

甲南女子学園の創立者である安宅彌吉は、その発言の中で

「凡そ人は己の為に生存するものに非ずして、亦他人の為にも生存するものならざるべからず。自分の其の一年の生存は私の為の生存に非ずして社会の為の生存とも為る」

として、甲南高等女学校をはじめとした阪神間の諸学校の経営や育英事業など後進の育成を通じて、社会に貢献しようとする思いを述べておられます。これは、人間は利己的ではなく、社会に貢献する存在であれ、という教訓が込められていると思います。

甲南女子学園が大きな誇りとするところは、建学の精神「まことの人間をつくる」、校訓「清く正しく優しく 強く」、教育方針「全人教育」「個性尊重」「自学創造」を、創立以来連綿として受け継ぎ、心豊かで気品ある甲南女性を多数輩出し続けることで地域や社会に貢献してきたことです。

一〇〇年の節目にあたり、改めて創立当時から継承された教育への思いを確認しつつ、時代の変化に対応した新しい試みを導入し続けていくことで、創設者の思いを実現していきたいと思います。

社会における女性の更なる活躍が期待される中、女子教育機関が果たすべき役割は今後一層大きなものがあり、甲南女子学園の使命も益々重要になっていくことと存じます。国際学部開設をはじめとした、社会の変化に対応した組織の発展や、登録有形文化財にも登録される伝統ある学び舎を大切にしつつ、高度に情報化した教育施設の充実など、様々な面で改革に取り組み続けていきたいと思います。また一〇〇年目のこの年に、新型コロナウイルスによる世界的な惨禍に直面し、人の往来が抑制された中でも、より良い教育体制を築いていく、という新たな課題にも前向きに取り組んで行きたいと考えています。

私学でなければ、甲南女子学園でなければできない特色をもって、画一教育と一線を引き、品位と個性を兼ね備え、社会に貢献できる「輝く力、輝かせる力」をもった甲南女性を育てることで、これからも地域・社会に貢献していきたいと考えています。

甲南女子学園を周囲から支えてくださる地域・社会の皆様からの一層のご指導ご鞭撻の下、時代の変化にあわせて進化し続け、皆様の期待に応える充実した学習機会・環境を提供していくことが何より肝要と考えております。

甲南女子学園の次の一〇〇年に向けて、今後も変わらぬご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

ご挨拶

創立一〇〇周年に想う

甲南女子大学　学長　森田勝昭

甲南女子学園は関西屈指の女性教育の拠点として歩み続け、二〇二〇年、創立一〇〇周年の記念すべき節目を迎えました。創立者安宅彌吉はじめ、歴代の理事長、校長、学長および教職員各位、品格と知性で社会に貢献してこられた五万を超える同窓生、校友、保護者、各方面からご協力くださった関係者各位の熱意と愛情に育まれ、輝かしい歴史を刻んでまいりました。この時期に学園に奉職する学長として、学園にご功労のあったすべての方々に深い感謝を捧げ、心よりの祝意を捧げるものです。



学園創立の一九二〇（大正九）年、初の世界大戦で荒廃した世界で、人間の尊厳への目覚めがありました。世界各地で新教育運動が展開され、教育の中心に人間、とりわけ女性が力強く登場した教育的転回の時代でした。学園創立に邁進された先達各位は、私学を私学たらしめる哲学や教育の魂を求めて、懸命な努力を重ねてこられました。建学の精神「まことの人間をつくる」は、この一世紀の滔々たる時間の流れの中で生み出された美しい教育哲学の結晶です。

歴代の理事長・校長・学長各位、そしてすべての教職員が、この建学の精神実現のために、人間教育、すなわち人格の陶冶を教育の根幹におき、校訓「清く正しく優しく強く」と、教育方針「全人教育」「個性尊重」「自学創造」を掲げ、教育実践の羅針盤として守り続けてきました。建学の精神は誇り高い伝統として、学園に集う人々に勇気や希望を与える道標であり、ときに仰ぎ見る北極星でもありました。

学園は建学の精神「まことの人間をつくる」に基づき、人間教育をひたすら追求してきました。未曾有の戦災とそれに続く混乱の時代がありました。希望に満ちた新たな社会建設と、それを推進する女性たちの力強い動きの時代、大水害や大震災などの自然災害に打ちのめされた時期もありました。その間、学園は一度たりとも建学の精神を忘れたことはなかったと思います。

世界は今、巨大な変化を経験しています。科学技術の急速な発展を基調にする新しい経済や環境思想の進展は、経済、社会、文化、人間のこころまでも変えつつあります。そして、数百年に一度ともいわれる変化のなかで、現代科学は、人間とは何か、という根本的な問いを私たちに突きつけています。

創立当時、日本はスペイン風邪の収束期を迎えていました。奇しくも今、学園は新型コロナウイルス禍の真っ只中にあります。その影響は科学技術による社会変化をさらに加速し、人間とは何かという問いも、ますます重みを増しています。この時代が、投げかける問いと課題は深く根源的です。しかしそれは人間本来の可能性とその評価をうながす希望の問いでもあります。社会も教育も変化する中であらためて、「まことの人間をつくる」が教育の中心課題となる時代が来ています。

科学時代のまことの人間とはなにか。

それは、人類が数千年かけて培ってきた人間の力、すなわち、意思、意欲、知恵、良心、勇気、共感、責任、倫理など、本来の人間力を身につけた人間、学園の先達たちが「魂の知的完成」と呼んだ新しい女性だと確信します。まさにそれは学園教育の永遠の課題「まことの人間をつくる」にほかなりません。

あらためて新しい一〇〇年紀に向かう甲南女子学園の未来を祝福したいと思います。

ご挨拶

一〇〇周年に想う

甲南女子中学校・高等学校　校長　岡田明



甲南女子学園は一九二〇（大正九）年に甲南高等女学校として発足し、今年創立一〇〇周年の記念すべき年を迎えました。

甲南女子中学校・高等学校は甲南女子大学開設（一九六四年）までは甲南女子学園の母体として、また以後は甲南女子学園の一員として今日に至ります。

いま一〇〇年の歴史に想いを巡らせると、歴代校長が数々の試練を乗り越えて現在の甲南女子中学校・高等学校を築き上げて来られたことがわかります。三代校長で初代専任校長の表甚六（一九二三年着任、在任二三年）は、「全人教育」「個性尊重」「自学創造」を唱え、校訓として「清く 正しく 優しく 強く」を制定されました。これらは現在も建学の精神、校訓として受け継がれています。また禅宗の座禅に基づく「聖座」は、今も全校生が集まる場や同窓会で行われています。さらに校歌・制服制定もこの時期で、甲南女子独自の校風を樹立されました。谷崎潤一郎の『細雪』にも描かれた阪神大水害（一九三八年）で土石流が校舎になだれ込むという甚大な被害に遭い、教職員生徒と一丸となって再建したものの、再び第二次世界大戦末期の神戸大空襲（一九四五年）により全校舎焼失という苦難が待っていました。本当に大変な時代を牽引されたと思います。戦後すぐに着任された四代校長池田多助は「学校は焼けたが甲南精神は焼けていない」と就任挨拶をされ、日本中が困窮し国・県の援助がないなか、同窓生・教職員・生徒・保護者の手で見事に校舎を再建されました。また、一九四七年の教育基本法公布に伴い甲南女子中学校の併設が、翌年には新制高校の設立が認められ名実ともに現在の甲南女子中学校・高等学校が始動しますが、この混乱の時代を強力なリーダーシップで切り抜けられ、さらに一九五五年の短期大学開学時には初代学長を兼務されました。一九五八年に就任された五代校長山本榮喜は、同じ敷地内に中学校・高等学校・短期大学が同居する不便を解消するため、発祥の地を離れ現在の地に移る決断をされました。

一九六八年四月教職員と生徒全員は旧校舎に別れを告げ新校舎に徒歩で出発したそうです。その後順調に推移していた学校を突然大地震が襲います（一九九五年）。生徒は全員無事で校舎にも大きな被害はなかったものの地域の避難場所となり大変なご苦労をされたと当時の一二代校長片山亨先生から後日直接お聞きしました。一四代校長大榎茂行は、甲南女子大一辺倒だった進路指導を見直し、将来多くの選択肢を持てるように現在の二コース制の実施を決められ、次の清水徇校長就任時にスタートしました。また清水校長は、巨匠村野藤吾氏設計の校舎から現在の校舎への建て替えを指揮されています。

一六代目の校長としてこの日を迎えることができましたことを大変名誉なことと思うと同時に重責を感じてきましたが、そこに突然降りかかってきたのが新型コロナウイルスの感染拡大です。緊急事態宣言の発出とそれに伴う長期の臨時休校は過去に類を見ないものですが、歴代校長がそれぞれの時代の難題を切り抜けられたように、生徒教職員の安心安全を第一に考えながら学園のさらなる発展を願っているところでございます。

甲南女子学園
一〇〇周年に想う

学校法人甲南女子学園　名誉理事長　松下正幸



甲南女子学園の創立一〇〇周年、誠におめでとうございます。

思い返せば二〇〇一（平成一三）年から二〇一四年まで一三年間の長きにわたって、縁あって理事長職を務めさせて頂きました。

母校の評議員や理事の経験を通じて私学経営は企業の経営とはずいぶん違うものだという程度の認識は持っていたとはいえ、私学経営には全くの素人同然の私が理事長という要職就任のご要請をお受けしたのは、妻や娘達がお世話になっている学校だからという今から思えば誠に単純な考えからでした。

その任について学園の状況を精査すると、過去の諸先輩方のご努力で多少の蓄積こそあるものの少子化や男女共学志向の強まる中で従来の延長線上の経営では学園の将来はないと思い至りました。学園経営を取り巻く環境、卒業生の方々の思い、保護者や保証人の方々のお考え、生徒や学生たちの思い、そして教職員の方々の状況を良く考え合わせた上で、改革の方針を定めご関係の皆様のご同意を得ることに注力致しました。

そして建学の精神を基本にしつつ、時代に相応しい教育内容、大学や社会に受け入れて頂ける知識や人格形成、資格志向の流れに沿った学部学科編成を早期に確立することを心掛けました。

幸いにもご関係の皆様のご理解とご支援、生徒、学生、教職員のご努力もあって、名門「甲南女子学園」の名前に恥じることのない実態を取り戻し、新たな歩みを始める基盤ができたのではないかと思っています。

学園経営の面では厳しい状況を切り抜ける過程で、教職員の皆様にはいろいろと苦言を呈したりご努力を強いたりと精神的に心苦しい時も多々ありましたが、苦難に立ち向かうために励まし合ったり成果が出た時に喜びを共にしたり心を一つにして協働できたのは、今から思えば楽しい思い出です。

生徒や学生達若い皆様と様々な行事を共にして、気持ちだけでも若さを味わえたのも良い思い出です。そして何よりも学園を巣立った卒業生が各分野で活躍しておられるのを見るのは、教育関係者としての至福の喜びです。

理事長退任後も任期の都合で理事として一年、評議員として二年継続しましたが、その間に後任の中内理事長が存分にその指導力を発揮されていられるのを目の当たりにして、安心するとともに任をお引き受け頂いたことに深く感謝をしております。

なお二〇一四年より理事長を長年務めたからとのことで名誉理事長の称号を頂いておりますのは誠にありがたいことで、心から感謝を申し上げますとともに大変光栄に存じております。

今後とも学園の将来の益々のご発展をお祈りいたします。

甲南女子学園とともに歩む

甲南女子学園　清友会　会長　奈良山和子



甲南女子学園が創立一〇〇周年を迎えられますことを心よりお祝い申し上げます。

また、この記念すべき年を同窓会であります甲南女子学園清友会の会長としてお祝いできますことを大変光栄に感じております。

私達の同窓会は一九二六（大正一五）年、卒業生三二名から同窓会設立の議が起こり、表校長先生が初代同窓会会長として就任し、五名の幹事によりスタートいたしました。その後、一九四八（昭和二三）年に同窓会名を「清友会」といたしました。設立当初より、同窓会は学校の諸行事に積極的に参加いたしました。同窓会活動は学園のご協力のもと、今日まで歩んできました。阪神大水害や阪神淡路大震災などの度重なる天災時には、同窓生が互いに助け合い乗り越えてまいりました。

学園のご協力により、私達は現在も円滑に同窓会活動を行っております。清友会総会、各支部の支部総会にご出席いただき、また清友会主催の行事にもご参加いただいております。同窓会も学園の行事に参加しており、些細なことでもご相談させていただける関係は、学園のご協力はもちろんですが、先輩方、同窓生が築いてきた信頼の賜物でもあります。その甲南らしい絆の強さを次の世代へと引き継げるよう努力してまいります。

今回、甲南女子学園創立一〇〇周年記念事業の一環として、同窓会館「清友園」を大改修していただくこととなり、二〇二〇（令和二）年九月に完成いたしました。ここに至るまで、学園、東畑建築事務所、大林組、その他関係業者と何度も打合せを重ねました。清友会は「甲南女子学園創立一〇〇周年記念特別委員会」を中心に設計から関わらせていただきました。私達の希望を丁寧に聞いていただき、「同窓生が快適に」を第一に考えてくださり、親交の場としての「清友園」が新しく完成いたしました。一一月一二日には厳かな竣工式を行っていただき、清友会にとって新たな一歩となりました。また、工事期間中は、大学内での清友会活動に大変なご協力をいただき、感謝申し上げます。

二〇二〇年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、活動が制限された時期もありましたが、学園のサポートのもと活動再開ができました。私達の活動の基盤が整いましたので、今後は同窓会の活動目的「卒業生等の親睦及び母校の発展に寄与する」にさらに力を入れていきたいと思います。また、清友会は二〇二六年に一〇〇周年を迎えます。記念行事等の準備を今後進めてまいります。

現在も総会や同窓会で卒業生が集う場所では、中高卒業生は体育大会の各団や応援合戦の思い出、大学卒業生は教授や寮生活の話、また阪急電車の高架をくぐるバスに踏ん張って乗っていた話をし、その時代に違和感なく戻れ、楽しく過ごした学び舎を思い出します。そして何年たっても歌える第一校歌は誇りであり、合い言葉のように言える「清く 正しく 優しく 強く」は、甲南女子生の基本となる言葉です。年代が違っても、第一校歌や「聖座」について語ることで、甲南女子で過ごした日々の素晴らしさに気づき、改めて感謝をするとともに、充実した学生生活は私達の財産となりました。今後も母校の甲南女子学園を誇りに思い、同時に、私達自身も誇れる同窓生でありたいと存じます。

私達の母校であります甲南女子学園のますますのご発展をお祈り申し上げます。

「特別寄稿」

淑女失格

作家　佐藤愛子（高女一七回）

私は甲南高等女学校の一七回生です。

入学したのは昭和一二年で、その年に日本と中国との戦争が始まりました。中国戦線は膠着したまま、私たちは昭和一六年に卒業し、その年の一二月にそれまで中国に味方していたアメリカとも戦争になりました。

私たちの女学生生活は戦時色に埋没していたといえるでしょう。けれども私たちは別だん、それを不満とは思わず、日本は勝つと信じて何も心配せずに女学校生活を楽しく過ごしていました。日本が負けることなどあろう筈がないと思っていましたし、何よりも甲南の校風の穏やかさに守られていたのだと今になってしみじみ思います。

その頃の甲南高女は「淑徳の涵養」を目的とする学校として知られていました。阪神地方の旧家や富裕層では子息のおヨメさんに「甲南出」という條件がついていたと聞いたことがあります。

しかし白状しますと私たち一七回生に限っていえば、およそ「淑徳」とはほど遠く、「甲南始まって以来の難物揃い」だと先生方を悩ませていた、と後になって知りました。勿論、私たちにその自覚はありませんでした。私たちはただ無邪気にのびのびと学校生活を楽しんでいるだけでした。

といっても大半のクラスメイトは素直に淑徳を身につけようと努力していたと思います。そのおとなしい淑徳派を霞ませてしまうような傍若無人な「ゴンタ派」が何人かいて数は少いけれど勢があるものだから、淑徳派は呑み込まれ、その中には影響を受ける人がいて少しは増殖したかもしれません。

私はそのゴンタ派の筆頭のようでした。「ようでした」というのは、へンない方かもしれませんが、つまり無自覚のうちに筆頭になっていたということです。ですから今、改めて甲南時代の思い出を…と求められると、忸怩たる思いがこみ上げて来て逃げ出したくなるのです。



しかしそうはいっても、今の時代から思うと、それほど取り立てて不良分子、反抗分子というようなものではなかったと思います。入学してまずクラスで最初に先生から叱られたのは私でした。それは黒板に落書きをしたためです。次に叱られたのは廊下をバタバタ走ったことでした。階段を二段トビで駆け上ったことでも叱られました。

叱られた時は誤ちを冒した者だけが呼び出されるのではなく、クラス全員がお説教されるという形でした。掃除当番の時にハタキと箒でチャンバラごっこをした時も、中間試験が明日から始まるというのに、クラス全員が居残りお説教をされるという悲惨なことになり、私はたまらず先生にいいました。

「チャンバラをしたのは私とYさんの二人ですから私たち二人が残ります。ほかの人は帰してあげて下さい」と。

しかし先生は「一人の誤ちはクラス全体の問題です」といわれ、私のいった余計な一言のためにお説教は更に長引き、夕暮迫る教室で私は泣く泣く皆に謝ったのでした。

それが甲南の「淑徳教育の叱り方」というものでした。私はよく叱られましたが、他の学校の人に聞くような、一人だけ別室に呼ばれて頭ごなしに怒鳴られたり、詰問されたり、何時間も立たされる、というような叱られ方をしたことは一度もありませんでした。詰問や断罪なしの静かなお説教です。私のよき（？）相棒だったYさんのお母さんが、保護者会での先生との懇談で、「先生、うちの娘は遠慮なしにバシバシ怒って下さい。」といわれたところ、先生は「私どもはどんなことがあっても生徒を淑女とみなして接することにしております」といわれたということでした。Yさんからその話を聞いて私はいうべき言葉がみつからず、「うーん、淑女かァ…」というしかないのでした。「別に淑女とみなしてもらわなくてもええのやけどねえ。」と虚勢を張りながら、いつしか、元気がなくなっているのでした。

その頃、甲南の校舎は焦茶色が褪せた木造の二階建てでした。それについて表校長がいわれたことがあります。

この校舎は一見、古くさいパッとしない木造です。皆さんは鉄筋コンクリートの、機能的でハイカラな校舎がいいと思っているかもしれませんが、私があえて木造を選んだのは太陽の恵みを吸って成長し、自然の力が満ちた素材です。やがて母となって子供を産み育てる女性は健全な心身でなければならない。成長期に身体が冷えてはいけないのです。

それを聞いたとき、私は深く感動しました。先生はそこまで深く細やかに生徒のことを考えて下さっていたのだ、という感動です。

それからおよそ八〇年ばかり経ちました。時代の価値観は全く変りました。鉄筋コンクリートは身体を冷やすからいけない、というような発想は、今は「ご愛嬌」というしかない現実の中に私たちはいます。今は表先生の教育への信念は通用し難いでしょう。それはわかっているけれど、私の表先生への尊敬は消えません。甲南の教育方針からハミ出ていた私なのにハミ出ながら私は甲南高等女学校卒業に誇りを持っているのです。

こうして思い出すままに書いていると、あの焦茶色のあたたかな木造校舎が浮き上がって来ます。校舎は三棟あり、その南側に校庭が広がっていました。校舎群と校庭には段差があって、境目に桜の木が並んでいます。毎年新入生が入ると満開の桜の下で歓迎観桜会が開かれるのでした。

桜の下に新入生の席が設けられ、三つ四つ和菓子の入った紙箱が配られます。新入生は行儀よくその中の三色団子を神妙に食べるのでした。校庭の中ほどに敷かれた花ゴザの上で、上級生の代表が日舞を舞い、それはまさに「淑徳の舞」ともいうべきたおやかな光景でした。

改めて考えると私の九六年の長い人生の中で、甲南での五年間は最高に幸福な日々でした。全く私はよく叱られる生徒でした。何回ものお説教の中には、他の人も同じようなことをしているのに、その人たちは叱られずに私だけ叱られるということもありました。

多分、私は叱り易い女の子だったのでしょう。いくら叱られても、私は学校が楽しいのでした。楽しいのでいくら叱られても「直す」ということがありませんでした。それが私を叱られ易くしていたのかもしれません。

卒業の日、私は大泣きをして別れを惜しみ、日が暮れてもクラスの大半は学校から去ろうとしませんでした。

後になって後輩から聞いたことですが、卒業式の翌日、「一番大泣きしていたのはあの佐藤だ」とある先生がいい、職員室にどっと笑い声が上った、ということです。

先生方はさぞかし肩の荷が下りて、晴々した思いだったことでしょう。

「あの佐藤」の「あの」とはどういう意味が籠っているのか。それは訊かなくても私にはわかっています。



「特別寄稿」

甲南女子学園 一〇〇年の計

東京都知事　小池百合子（高校二三回）

甲南女子学園創立一〇〇周年に際し、謹んでお慶びを申し上げます。

一世紀の長きにわたり、人を育み、人を鍛え、世代を超えて人の道を教えてくださった母校の先生方はじめ諸先輩方、そして現役の皆様に、心からの感謝と敬意の念を表します。

私は甲南女子中学の三年間を天井裏で鳩がコトコトと歩く音が聞こえる本山の木造校舎で学びました。校旗を先頭に全校生が行進しながら、現在の和光台に引っ越し、高校の三年間を過ごしました。

「考えられないことを、考えよ」・・・。

山本榮喜校長から教えていただいた、全校生で行う五分間の「聖座」の心得です。「考えられないから、考えられないのよ」「そんなの無理よね」など、山本先生の講話のあと、この言葉を巡ってクラスでは議論の花が咲いたものです。

そもそも禅の高僧、道元禅師の言葉とのこと。禅問答そのものでした。自席で静かに座って瞑想する「聖座」が現在でも行われているかは存じませんが、全校生がそろって静寂の中で過ごすのは実に気持ちのよいものでした。

その後、防衛大臣や東京都知事として国民や都民の命を守る重い責任を担うようになり、あらためて「考えられないことを考える」重要性を強く認識しました。たとえば四半世紀前に経験した阪神大震災は、まさに「考えられない」ことばかりでした。無残に倒れた阪神高速道路、燃えつきるまでなすすべもなかった長田区の住宅密集地域など、阪神地区を無残にも痛めつけた大震災の犠牲者の中には甲南の関係者も多数おられました。改めてお悔やみを申し上げます。

当時、宝塚や伊丹を中心に活動しておりました私は、「まさか」と思うことも、しっかり準備しなければならないと痛感したものです。災害の現場から多くを学びました。議員として、大臣として、そして現在は都知事として、災害対策に必要な法整備や、防災の観点からの無電柱化促進、液体ミルクの国内製造推進、避難所の環境整備、災害時のペット対策など、まずは「考えられること」を整えるべく、今もつとめております。

特に東京は首都直下地震が「三〇年間に七〇%の割合で起こる可能性」があるとされています。これは「考えられない」を越えて、「考えねばならない」の域に入ります。

近年は台風の激甚化や想定を越える風雨による災害が各地で大きな被害をもたらしています。首都東京でも「豪雨対策基本方針」を見直し、目標降雨を、区部で時間七五ミリ、多摩部で時間六五ミリと上方修正しました。対策強化流域・地区の指定、河川や下水道などの整備を重点的に進めています。加えてコロナ対策も喫緊の問題です。

時代の変遷も「考えられない」スピードで進んでいます。私達がセーラー服に身を包んでいた頃は携帯電話など、もちろんありませんでしたし、試験用紙や文集の作成はガリ版刷りでした。もはや博物館行きのしろものばかりです。

在学中には浴衣の「早縫い競争」が行われました。

「下手の長糸、上手の小糸」と教わりながら、前日に何本もの針に長短の糸を通して準備するなど、緊張して臨んだものです。自分で着物を着る自信はありませんが、本だたみができるのは甲南女子卒業生の証でしょう。

また、古式泳法の水泳訓練、和弓の寒稽古などもよい思い出です。熨斗と呼ばれる横泳ぎや早抜き手などの古式泳法を含む水泳訓練は、中学一、二年の必修だったと記憶しています。最上位・助手の資格確保を目標に、頑張りました。訓練の最終日に、皆がプールの一角での記念写真撮影に集まっているにもかかわらず、最後の種目をこなそうと必死に泳ぎ続けた私の姿を多くの同級生が覚えてくれているようです。

和弓の寒稽古は、早朝の練習後にいただく芋粥の魅力もありましたが、所作やコツを学んだことは意味がありました。二〇二〇年の東京大会関連のアーチェリーのイベントで至近距離ながらみごとに的を射止めることができたのですから。

ソフトボール部では、残念ながらあまり勝利を修めた記憶はありませんが、チームワークの大切さを学ばせていただきました。

和裁や和弓など、日本の伝統や心を学ぶ点で甲南女子の校風は得がたいものがあります。令和の時代となり、ＡＩなどの先端技術が日進月歩の変化を遂げつつあるからこそ、むしろ伝統が生きると思います。一〇〇年の歴史を生かすことが、これからの甲南女子のあるべき姿ではないでしょうか。

一方でグローバル化はますます進みます。在学中にはアメリカからの留学生を迎え、ともに学び、ともに遊んだこともよい思い出です。英語の先生は大阪弁で話すアメリカ人のスペンサー先生で、奥様は日本人。初めてのお子さんの名前をクラスの多数決で選びました。とても日本的な名前になったのですが、そのお子さんも今は五十がらみかと思えば、時の流れの速いこと。

所属していたＥＳＳでは「アポロ11号月面着陸」の英語劇を文化祭で披露しました。人類初の月面着陸の様子をＬＩＦＥ誌の映像を背景に、アームストロング船長とヒューストンの航空宇宙局（ＮＡＳＡ）管制塔との英語のやりとりに同時通訳をはさみ、臨場感を伝えようとさまざまな工夫を凝らしました。実際のＴＶ中継で同時通訳者の巧みな仕事ぶりにいたく刺激を受け、英語劇のプロデュースだけでなく、その後の私のアラブ留学につながりました。

コロナ禍を克服した上で、二〇二〇東京大会を機にわが国はより多くの外国人観光客を迎えることになります。ホストシティーである東京はこれまでの年間一四〇〇万人に加え、期間中を含め、さらに一〇〇〇万人が訪都するとされます。英語だけでなく、中国語やタイ語など、多言語の対応が求められます。それぞれの学びだけでなく、最新のテクノロジーを駆使して「おもてなし」を進めなければいけません。

令和の時代における「甲南女子の学び」は、さらにグローバルであってほしいと期待します。海外旅行や留学が決死の覚悟であった時代と違い、今は日本から海外へ、海外から日本へ、自由に行き来ができます。そんな中で、日本語オンリーでは入手できる情報量も、世界の動きを的確に判断できる力も格段に劣ります。ぜひとも国際人としての教育、使える外国語教育に力を入れていただきますよう、お願いいたします。

教育は「国家百年の計」と言われます。

『一年の計を考えるものは田を耕し、十年の計を考えるものは植林し、百年の計を考えるものは子弟の教育を優先する』という中国の言葉があります。教育の重要性をこれほど端的に表す言葉はないでしょう。

まさに甲南女子学園の一〇〇年の歴史と実績こそ、「百年の計」そのものです。

私が尊敬する第七代東京市長の後藤新平氏も多くの名言と実績を残しています。後藤新平氏は関東大震災後の大規模な帝都復興計画を立てた人物で、東京駅から皇居に向かう行幸通りなどの主な幹線道路は後藤氏の提案によるものです。また、日本にスカウト活動を根付かせた人でもあります。私は講演や挨拶などの様々な機会に後藤新平氏の名言を引用しています。

その中に、こんな言葉があります。

世をなしていくのは「一に人、二に人、三に人」だと。

教育は人間本意主義の基礎であります。

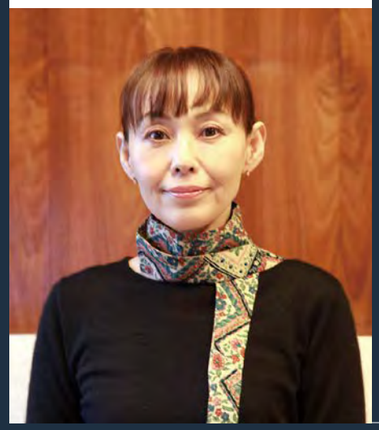
ましてや「人生百年時代」。多感な年頃の学びは一生ものです。

甲南女子学園は次の一〇〇年に向け、次世代を担う女性に「考えられないことを、考える」ことのできる人材を育成されると期待し、創立一〇〇周年の祝辞とさせていただきます。

「特別寄稿」

海を見晴るかす丘で

作家　朝井まかて（大学国文一七回）



坂道を上ったその先に、我が女子大学はあった。

門内に入ると、芝生の丘だ。「ハイヒールで芝を踏んづけちゃいかん」と、確か、体育担当の先生に注意されていたにもかかわらず、時々目を盗んでは芝生に坐った。いつも何人かの友人と一緒にいて、お喋りに夢中だった。

私たちは戦後に生まれ、幼少期が高度成長期、小学校の高学年で大阪万博が開かれ、日本の経済は右肩上がりを続けていた。私は一九七〇年末から一九八〇年初頭を、あの学園で過ごしたのである。

世はまさにバブル時代に突入する寸前で、甲南の丘もいかほど華やかで贅沢であったことか。しかも学生運動世代よりも若い世代であるから、屈託がない。その良し悪しはともかくとして、戦後日本がいったん実らせた果実を存分に味わった世代なのである。

さて、私たちはいったい何を話していたのだろう。

好きな映画や音楽やファッション、そして小説のこと。『愛と哀しみのボレロ』に心を震わせ、原宿に出現したらしい竹の子族とやらを鼻で笑い、来日したホール&オーツのコンサートで踊り狂い、私は長かった髪を切ってテクノ風のフアッションに突入した。

周囲の〝ナンジョ〟（当時、甲南女子大学の学生はそう呼ばれていた。今はどう呼ばれているのだろう）はコンサバティブなニュートラが大半であったので、品といったものから逸脱したあの服装は悪目立ちしていたかもしれない。しかしかの坂本龍一もまだメイクをしていた時代だ。女優はナスターシャ・キンスキーが美しかった。

日本がモスクワオリンピックへの不参加を決めて世が騒然となったこともあるが、私たちの日常は何も変わらなかった。

読書は幼い頃からの癖ともいうべきもので、ともかく雑食だ。通学ルートの途中、駅の構内に紀伊國屋書店の大阪本店があって、まずマンガ雑誌と週刊文春を買うのが習慣だった。和田誠さんのイラストが表紙に採用されたのがちょうどあの頃で、女子大生でも手に取りやすい洒落た佇まいがあった。

そして小説を買う。翻訳ものは常磐新平の訳が好きで、『夏服を着た女たち』を何度も繰り返し読んだ。チェーホフに夏目漱石、柳田國男、古典の現代語訳も貪り読んだ。谷崎潤一郎や円地文子訳の『源氏物語』も一気呵成ではなく、間に他の読書を挟みながら親しむ。この癖はいまだに抜けぬままで、今も常に数冊を併読している。

そんな何冊もの本、雑誌を抱えて、私は毎日、あの丘に上がった。教科書やノートもあったから相当な重さと嵩のはずだが、すいすいと歩いた。愛読していた向田邦子が直木賞を受賞したのもあの頃で、大学の食堂で興奮して友人と騒いだような気がする。そういえばあの食堂に入っていたのは精養軒だったか、グラタンが美味しかった。

学舎の配置は山の傾斜を活かした設計で、階段が多い。白く可憐な建物から建物へと下り、また上る。

屈託を知らぬ世代といえども、ささやかな、今から思えば他愛のない悩みもむろんあった。二〇歳前後の娘にとってそれは常に深刻で、人生の最重要事で、あれこれと悩むことで自己を撫で回していたのだろう。

けれど、〝私〟という存在がまだわからない娘たちの前にはいつもあの海が開けていて、丘も空も広かった。

何もかもが青々としていた。

当時の友人たちとは今もつきあいが続いていて、年に数度は集まっている。

誰も、「あの頃はよかった」などとは言わない。振り返って懐かしむほどの年齢ではないし、それぞれに懸命に生き通してきたのである。誰にも訊いたことがないけれど、たぶん全員が、「今の自分がいちばん好きだ」と答えるような気がする。だから会えば楽しいし、尊敬もできる。詳細を忘れているくらいが、ちょうど頃合いのよい想い出なのだ。

よく遊び、何が転んでも笑い、泣き、そして私は学ぶことを愉しんだ。

就職活動のためではない。卒業したら数年は花嫁修業をして、そのうちお見合いをして結婚する。そういう選択肢が当たり前に残っていた時代で、少なくとも私を含めた周囲の友人は就職を前提とする学生生活を送っていなかった。

犬養孝名誉教授の『万葉集』の授業では、先生の導きで歌の抑揚を学び、教室に集う皆で朗詠した。歌は読むのではなく詠むものであることを音で習い、ゆえに今も忘れ得ぬ旋律となっている。

井原西鶴の授業も面白くて、誰に命じられたわけでもないのに専門書を買い揃え、それらは書棚が変わろうが家を移ろうがずっと手許に残した。後に小説を書くようになった私は、『阿蘭陀西鶴』という作品をものしたことがある。執筆中、学生時代のこれらの書物を何度繙いたことだろう。ほぼ三〇年の月日が経っている。黴や埃まじりでクシャミに難儀したけれども、海と芝草の匂いがした。

好奇心の赴くまま、図書館でもいろいろな原書、学術書を読んだ。難解なことには、難解なりにつきあうがよい、そのうち突如として前が開くこともある。そんな実感を得たのも、学生時代だ。

三回生、四回生のゼミでは、大槻修教授におせ世話になった。もともと古典が好きであったので、『源氏物語』を専攻したのである。研究発表では第四帖の夕顔の巻を扱ったと記憶しているが、今となれば研究ともいえぬしろものだ。卒業論文は部分的に散逸した、あまり有名でない物語を題材にして散逸部分を推測、現代語訳を試みた。

ところが大槻教授の講評には、一太刀でやられた。

「あなたの論文は美文だが、発見がないね」

驚いた。独自の知見を見出して発表すること、それが論文であるということすら私は知らなかったのだ。

お粗末な限りであるが、教授の教えは私のその後の人生に強く刻み込まれることになった。

何をどう感じ、思考し、洞察を巡らせたか。

それを言葉だけで、その書き手にしか紡ぎ得ない文体でこの世に立ち昇らせるのが、小説だ。奇しくも、卒業後も「発見」に挑み続けることになった。

これぞ、〝将来に役立つ学問〟と言うべきだろうか。否、これはあくまでも結果であって、〝何かに役に立つ、立たぬ〟という目的をいったん猶予され、今、学ぶべきことを学び、究める機会を与えられたのが、私の通った大学であった。

学問の愉悦そのものを知った、幸福な学生生活だったと思う。

卒論の「発見」事件には、後日談がある。数年前、大槻教授がお手紙をくださった。ある文学賞を頂戴した際の新聞記事をご覧になったようで、出版社に問い合わせてくださった末の音信だ。私は本名と住所を公表していないので、出身が甲南女子大学であることと年齢だけから推して、先生はこう問いかけていた。

あなたはひょっとして、「〇〇の君」ではありませんか？

当時、大槻ゼミでは卒論で扱う物語の主人公の名で学生を呼ぶ、そんな微笑ましい習慣があった。教授は憶えてくださっていたのだ。不出来な女子学生のことを。

ほぼ四〇年もの時を経て、私を「発見」してくれた。

歴史小説を書いているので、四〇年、一〇〇年という時間の厚みは感覚として掌中にある。その時間の一粒一粒に人間の、学生や教師たちのドラマがある。

私の愚かで不真面目で、底抜けに明るかった青春もそこに含まれていた。

胸が一杯になった。

甲南女子学園一〇〇周年、おめでとうございます。

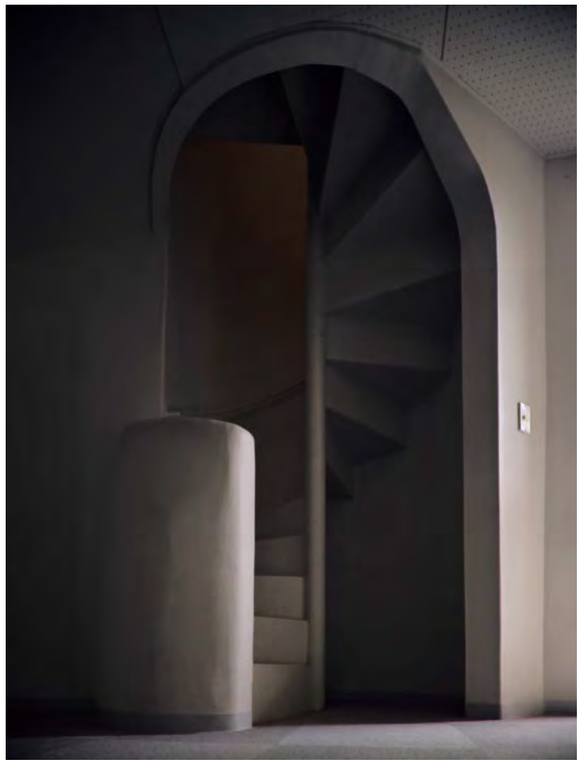
これからの一〇〇年をも、あの丘が、海が、空が見守ってくれますようにと祈ります。

束の間の、青々とした彼女たちを。

特別写真集

学園の建築

丘のうえ　白亜の調和





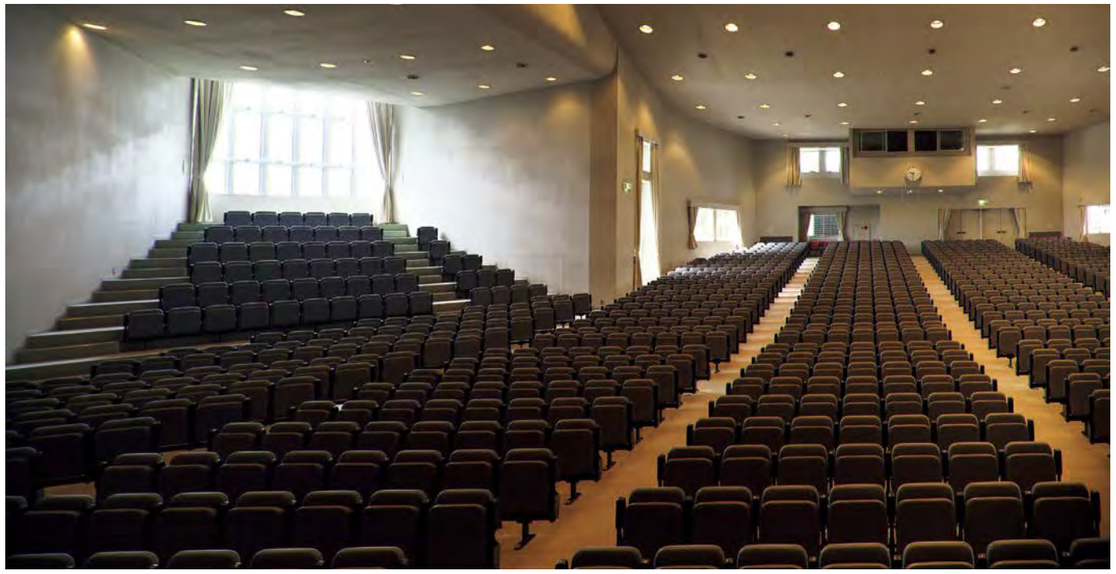













大　学























図書館

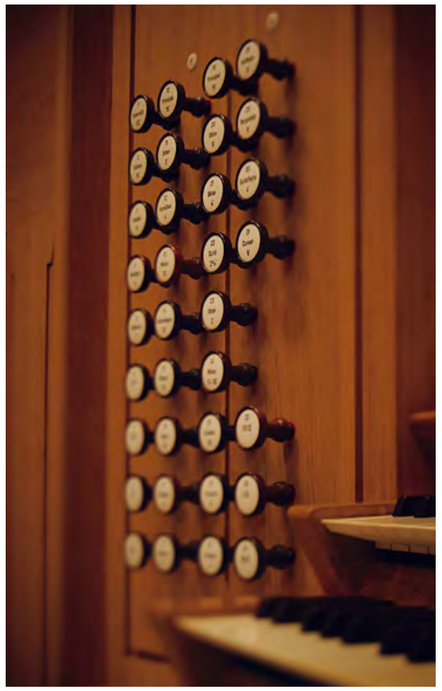

南
西

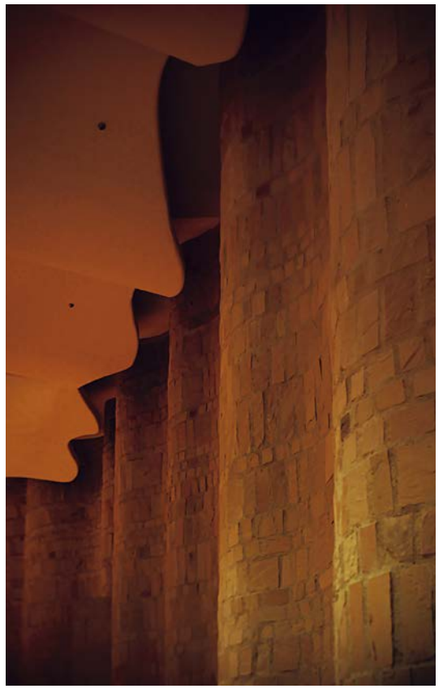




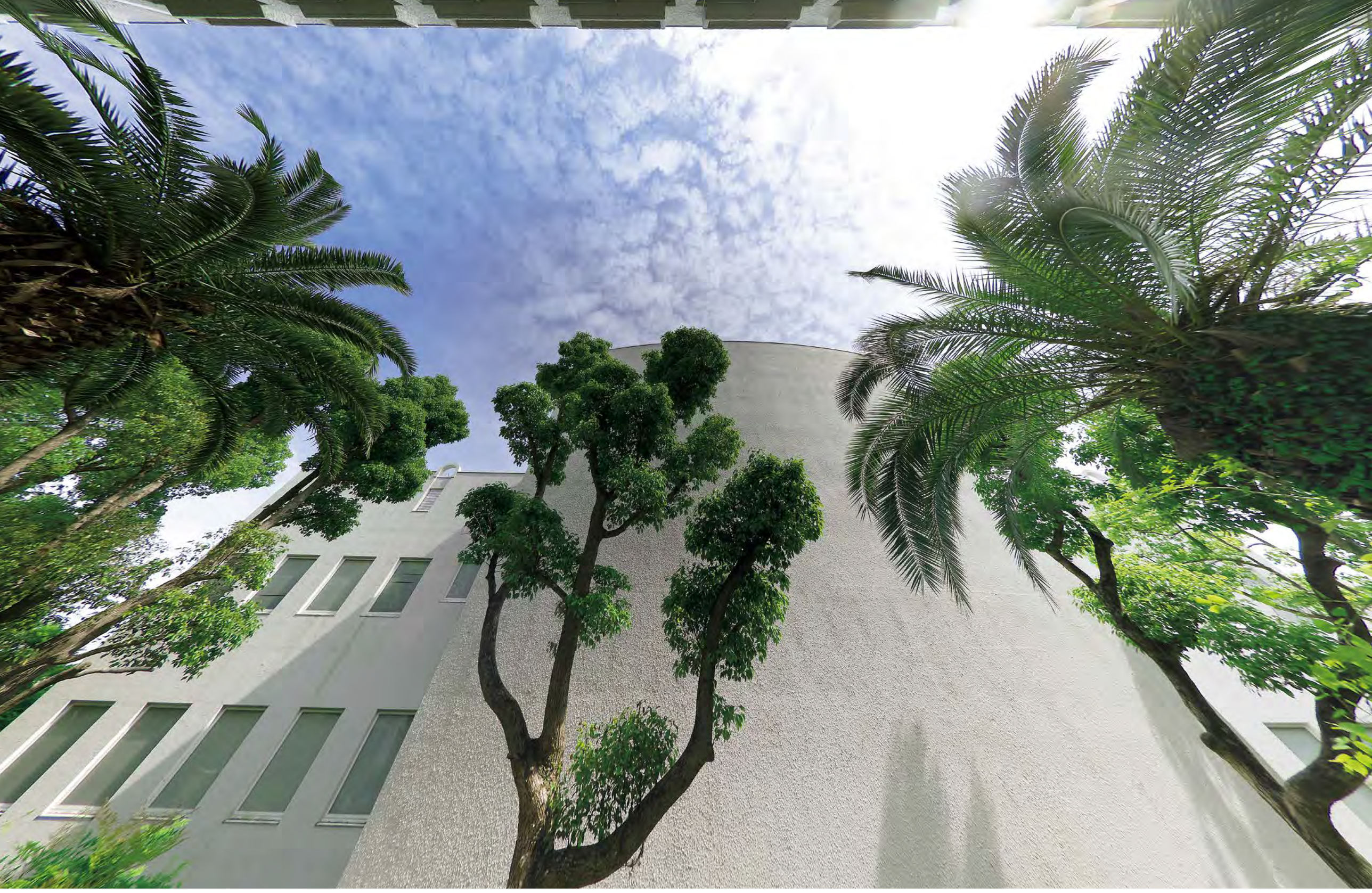


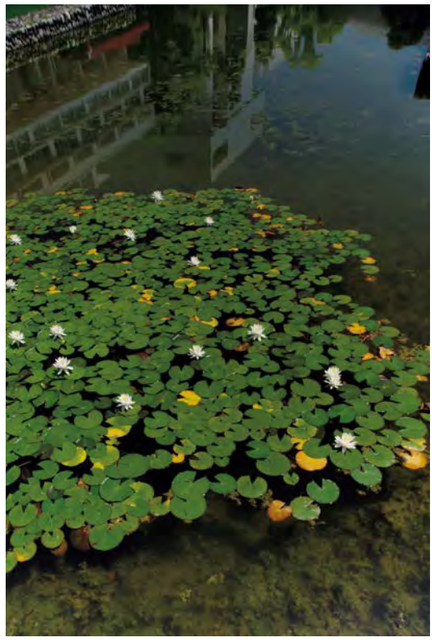
芦原講堂

















甲南女子学園のキャンパスと村野藤吾

一九六四（昭和三九）年に開学した甲南女子大学と、一九六八年に現在位置に移転してきた甲南女子中学校・高等学校は、校舎とその配置に至るまで、共に建築家・村野藤吾氏によって設計されました。

村野藤吾氏は戦前から戦後において、日本を代表する建築家として知られており、その作品は現在にも多く存在していますが、多くは単体の作品であり、甲南女子学園キャンパスのように、建築群として設計当時の姿を残している例は稀です。「教育にゆとりは必要でしょう」という村野藤吾氏の思いを大切に受け継ぎ、校舎群の維持・管理にあたってきましたが、甲南女子学園創立一〇〇周年を機に、学園の校舎群のうち国の文化財指定申請の資格となる築五〇年を経過した建物から順次、文化財指定申請を行うこととなりました。二〇一八（平成三〇）年には大学の管理棟・三号館・渡廊下、二〇一九年には中学校・高等学校の管理棟・特別棟・体育館・体育研究室・講堂・守衛室について申請を行い、無事登録有形文化財として登録されました。

それぞれの申請に際して、京都工芸繊維大学の名誉教授である石田潤一郎先生が所見として一筆を寄せてくださっています。ここに記録として、その一部を掲載させていただきます。



村野藤吾氏が示したキャンパス完成予想パース

甲南女子大学管理棟・三号館・渡廊下について

京都工芸繊維大学
名誉教授　石田潤一郎

沿革

一九六二（昭和三七）年に東洋紡本社で行われた建築委員会において、設計は村野・森建築事務所に依頼することを決定。代表の森忠一が、学園の理事者と営業上の付き合いがあった関係から、村野が設計を請け負ったといわれる。翌週にはクラブ関西で初会合を行なった。出席者は村野藤吾・森忠一、学園から阿部孝次郎理事長他建設委員数名が出席。冒頭に阿部理事長から甲南女子大学建設の目的と抱負について挨拶があり、村野・森両名が現場を視察することとなった。

村野藤吾はまず進入路からのアプローチを重視し、当時八mの道幅を一〇mに拡張するよう、隣接した土地の買収を指示した。現場中程に進むと、擁壁によるひな壇状の造成地を一見して、すべての取り壊しを求めた。一面をスロープ状にして芝を植え、その中に女子大に相応しい二階建ての校舎を建てる基本構想を述べた。山本榮喜学長は「一瞬の視察で設計の基本を決め、殆どその通りに実現したことは流石非凡の建築家」と述懐している。但し、周辺の土地買収など「その非凡の設計者に奉仕するために、種々苦労が増えた」とも振り返っている。

大学校舎の基本構想については、大学側から建物の種類、部屋数、それぞれの坪数等の詳細なものを提示していた。特に図書館では最低一〇万冊の書庫を、また学生会館は、先年学長がアメリカの大学二十数校を視察した経験からキャンパスの中心に建てるよう希望を述べた。

翌三八年二月に基本設計が完成する。設計の途上では、キャンパス西側の谷の影響で学生会館を数m東に寄せたこと、講堂が様々な要件を組み入れて大きくなったため、図書館と左右入れ替えたこと、一〇万冊の書庫を北側に設計してもらうはずが吹き抜けを設けたため、収納能力が七万冊に減じたことなど、計画通りにいかない部分もあった。また講堂は最初の設計では、「あたかも鳳凰が空に舞い上がるが如く」「実に芸術的で素晴らしい形」だったが、余りにも立派すぎていたので「甲南の清楚にして優美なる学風を表すため」といって形を変えてもらったという。

一九六三（昭和三八）年六月に起工し、一九六四（昭和三九）年四月に開学に至った。竣工は同年八月である。開学時には、管理棟と三号館（当初「文学館」）のほか、講堂、図書館、一号館（「家政館」）、学生会館の計六棟が村野藤吾の設計によって完成した。

山本榮喜学長は、みずからの感想として「六棟の建物がことごとく独自の個性をもち、窓枠一つにしてもユニークで、一つとして同じものがない。それでも六棟が一人の卓越した設計者の頭脳から生み出されたことが歴然とわかるように調和と統一を保っていた。…何という調和の美だろう。個性尊重を精神とする甲南女子大学にふさわしい」と述べている。

その後、短期大学部英語科新設に伴い二号館（一九七四／昭和四九年）、文学部人間関係学科新設に伴い五号館（一九七五／昭和五〇年）、猪崎記念体育館（一九七五／昭和五〇）、阿部記念図書館（一九七六／昭和五一年）、音楽教室として六号館（一九七七／昭和五二年）、旧図書館の取り壊しと四号館の建設（一九七九／昭和五四年）があり、短期大学部家政科に栄養士養成課程が設置されたことに伴い七号館（一九八四／昭和五九年）

を建設し、一九八八（昭和六三）年には芦原講堂が遺作として竣工した。また近接する中高キャンパスにも二棟の村野作品がある。

一九九一（平成三）年の第一学生会館（昭和三九年の学生会館の建て替え）以降は村野没後になるが、村野・森設計事務所が継続して関わることでキャンパスの全体デザインを崩さず、発展を続け、一九九二年の八号館、講堂の取り壊しと人間科学部新設のための九号館の建設（二〇〇一／平成一三年）、看護リハビリテーション学部新設のための一号館の建て直し（二〇〇七／平成一九年）、医療栄養学部新設のために新たに一〇号館の建築（二〇一七／平成二九年）が行われ、現在に至っている。

建物について

【管理棟】

管理棟は当初東西七四・八m、南北九・二mの規模で、中央三スパンは一、二階を吹き抜けとし、さらに外壁を持たない吹き放しとして北側への通路をとる。

立面構成は、南面については、一、二階は前面柱筋から壁面を後退させて、独立柱列を見せる。柱のスパンを四・四mと小さめに設定し、柱断面を長方形にして見付を細く見せるところに、柱列の意匠的効果についての村野藤吾の配慮を伺うことができる。三階は外壁面と柱筋を一致させ、さらに前面に幅一・八mのバルコニーをめぐらす。バルコニーには半透明の腰ガラスを入れ、軒の垂れ壁には枠を持った長方形の開口を並べて、立面のアクセントとする。東西両端の外部階段は長方形のパネルを組み合わせた構成主義的な意匠を見せる。

平面は竣工時には北側に片廊下を配し、南側に諸室を並べる形式であったが、一九八八（昭和六三）年に北側に一スパン増築して中廊下形式となった。建て替えに決しかけたとき、当時の鰺坂二夫学長が村野に失礼だと反対して、増築にとどめたと伝える。室内意匠は増築時のものが多いが、階段室は当初の姿をとどめる。

外壁仕上げは白色のモルタル掃き付け仕上げとする。

【三号館】

三号館は、管理棟と同じく、竣工時には東西七四・八m、南北九・二mの規模であった。南側からの渡廊下は地下一階に接続する。地下一階は南側外壁面を側柱筋から一・七m後退させて柱列を強調する。一階から三階までの南北外壁面は側柱筋と一致するが、一階は柱形を見せ、二、三階は同一面に納めて変化を付ける。また窓は、一階は柱間全幅を開口とするが、二、三階は窓間壁を配する。一階から三階までのすべての窓の上には長方形の枠を有する欄間状の高窓が配される。東面の外部階段は管理棟と同様に構成主義的な意匠を見せる。

平面は、管理棟同様、北側片廊下だったものを一九八六（昭和六一）年に北側に一スパン増築して中廊下形式となった。このとき、西側に三スパン分増築を行った。外壁仕上げは白色モルタルはねかけ仕上げである。

【渡廊下】

渡廊下は、管理棟から三号館へ至る、幅約二メートルの敷地の高低差に沿った階段であり、芝生をはさんで二本、五段ずつ九個設けられる。

「沿革」の項で触れたように、村野藤吾は擁壁による造成を避け、傾斜面上にそのまま建築を置こうとした。その構想を支える要素として、急勾配を軽やかに上らせる渡廊下は、管理棟と三号館をつなぐ外構として、意匠的にも機能的にもよく工夫されている。

仕上げはコンクリート洗い出し仕上げとしており、竣工当初、プラスチックの平滑な板を載せた屋根で覆っていたが、後年、鋼板の折板葺きに改められた。

村野藤吾は本学を手がける以前に、関西大学（一九五一／昭和二六年以降）と早稲田大学文学部（一九六〇／昭和三五年）の二つの大学施設を設計している。大学という用途・規模を異にする棟が立ち並ぶ施設において統一感を生む工夫については関西大学での経験が生きたことが想像され、またピロティによって学生の動線を処理する手法は早大文学部との共通性がうかがえる。また柱の出入りや長方形のフレームによって立面に奥行を与える手法は昭和三五年前後から村野作品にしばしば現れている。典型的には尼崎市庁舎（一九六二／昭和三七年）や名古屋都ホテル（一九六三／昭和三八年）などである。甲南女子大学はこれらの蓄積が六甲山麓の南斜面という良好な環境とクライアントの適切な要求とを得て、優美な成果となって実現したものといえる。

また、モルタルはねかけ仕上げは、関西大学特別講堂（一九六〇／昭和三五年）で採用されていたものの、部分的な使用にとどまっていた。甲南女子大学でそのテクスチュアの味わいを確認したことが、その後、宝塚カトリック教会（一九六六／昭和四一年）、ルーテル神学大学（一九六九／昭和四四年）、兵庫県立近代美術館（一九七〇／昭和四五年）といった重要な作品でのモルタルはねかけ仕上げの採用へとつながったと見られる。こうした点から甲南女子大学は村野作品において、ひとつの結節点であるということができる。



竣工当時：昭和 39 年当時のキャンパス全景写真

評価

甲南女子大学キャンパスは二〇年以上の期間にわたって、村野藤吾という近現代日本を代表する建築家が一貫した方針に沿って作り上げてきた。各施設は独自の外観意匠を持ち、長い年月の中で更新も進んでいるが、一方で、寸法、あるいは仕上げ材を揃えることで、緩やかな統一感を備える。それぞれの配置や増改築の手法にも配慮が施されていて、戦後に作られた大学キャンパスとしては傑出した造形となっている。

管理棟と三号館はその造形手法の根幹をなす建築物である。斜面地という特性を活かした配置計画、長大なファサードを引き締める行き届いた意匠的配慮、巧みな増築計画など、村野藤吾ならではの清新な設計が展開されており、登録有形文化財に登録するにまことにふさわしい作品である。また、傾斜地を活かしたキャンパスとして、そのまま建築を置こうとした村野藤吾のその構想を支える要素として、管理棟と三号館をつなぐ

渡廊下も、登録有形文化財に登録するにふさわしい作品である。

今日までの施設管理は、建築物の価値に十分配慮したものとなっているが、今後、一九七〇年代以降に建設された施設も含めたキャンパス全体の良好な質を維持向上させていくことが望まれる中、根幹をなす二棟および、渡廊下の文化財的価値を明確に示すことは大きな意味を有する。

甲南女子中学校・高等学校管理棟・特別棟・体育館・体育研究室・講堂・守衛室について

沿革

一九六六（昭和四一）年四月六日の理事会で建築設計監督は村野・森建築事務所に依頼することに決定した。六月二一日、クラブ関西に建築委員が集い、村野藤吾を招いて、理事長から正式に建築設計について依頼した。

中高校舎の設計を村野藤吾に依頼することについては教職員や同窓の中に「少し贅沢になりはしないか」と、若干心配する声もあったため、甲南伝統の清楚なる校舎のイメージを失わないことを第一にして、機能面には十分配慮して設計して貰うよう要望した。

校舎の数、校舎と運動場の配置といった重要な基本的構想は、教師が責任をもって考えるべき問題であり、また、村野・森建築事務所は中高程度の理科・家庭・美術・音楽などの実験実習教室の設計についての経験が少なく、そのため現場教師の意見や希望を多く取り入れる結果となった。昭和四二（一九六七）年二月八日には村野自身が淡路の洲本実業高校を視察している。

八月一〇日に本格的な設計が提示された。当時の山本校長は「見た瞬間、天才的な設計感覚を直感して私は感動した。土地と環境と建物の調和から生まれる美、これが村野建築が誇る独特の手法であると思った。特に教室棟と管理棟との結び方、玄関の位置とホールの取り方は何ともいえぬ構想である」と、その感想を述べている。

来たる情報文化の時代に備え、視聴覚教育の徹底を図るため、理科・家庭科・語学などの特別教室が膨大になったこと、並列二面のコートを教師が熱望したため、のちに土地の買い足しという苦労のもとになった体育館など、エピソードには尽きないが、建築においては、特に管理棟と講堂について、詳細が残されている。

管理棟はリクエストが多い割にスペースが足りず、現在のような二重廊下で、東庭に張り出し、内庭が出来、その東側の窓に宿直室以下四室を詰め込むことになった。玄関のホールは広々として、そこから職員用、生徒用の廊下が別々に流れ、その間に内庭が出来た。山本校長はこれらを「村野氏の芸術」「中高建築第一の見せ場」と賞賛した。講堂は、当初一三〇〇人の収容力と二階に音楽教室と映写室を基本条件として設計を依頼したところ、村野は「中高校舎の建築で教室の設計は大体きまりきったものであるから変った設計は出来ないが、講堂だけは私の夢を出したい」とかなりの情熱を燃やし、最初の設計は立体図も出来ていたが、山本校長曰く「あたかも鳳凰が空に舞い上がるが如く」で、「屋根の形も素晴らしく、全く芸術味が溢れていた」。二階にパーラーまでついて、建坪五百余坪、工費一億八千万の巨費にのぼる設計となっており、建設委員の想定を大きく超えていた。収容力は一二〇〇人、二階は映写室のみでパーラーは不要、音楽室は特別教室に移すという決定をし、結果四〇二坪工費一億円に削減した。当時の村野は「一度設計されたら容易に変更に応じられない人」と思われていたが、再考を求めたところ、この時はあっさりと学校の希望を容れて設計は変更された。それでも壁は傾斜し、屋根も構造が美的であったために施工も苦労だったし、工費も坪二五万の筈が結局三一万にはね上がってしまった。「中高程度でこんな立派な講堂を持っている学校は他にないだろう」と山本校長は感想を述べている。

講堂の設計でいま一つの変更は、その建物の向きである。最初は特別教室と並行して西から東にのびており、そのため正門から見て右側にある松三本を切倒す設計になっていた。この土地正面の松と広い運動場がとれる平地に惚れ込んで校地として選んだので、この三本の松を失うことは堪えられず、村野に現場視察を依頼した。

「建築美は輪奐の美とともに済す」という哲学の持主である村野は一目見て同感同意し、早速この三本の松の位置を測定して、現在の講堂の位置と構造になった。

結果、外部の三本の松を救って講堂に雅趣を加えたのみか、このため内部の構造も南面に突出窓を作り、この形に応じて西面も広く拡げたため、座席は三方面に開け、何ともいえぬゆとりと調和の美を生み出すことになった。

一九六八（昭和四三）年四月一〇日、大林組から引き渡しが行われ、その後一三日に定礎式を挙行。一五日には全校生徒が旧校地に別れを告げ、校旗を先頭に行進して新校舎に移った。山本校長は「設計の苦心は枚挙限りがないが、世界的な名設計家の設計に、機能的には現場の教師の希望や意見を十分に汲んで貰ったため、恐らく中高校舎としては、形と美と機能の三方面からみて、最高のものではないであろうか」と校舎建設の感想を述べている。

建物について

【管理棟】

管理棟は一九六八（昭和四三）年三月に竣工した。鉄筋コンクリート造、地上二階、地下一階で陸屋根とする。当初、東西約九七m、南北約三〇m（ここでは山側を北とする）のL字型平面をなした。一階中央部をピロティとして北方への車路を通し、ピロティ下東面に玄関を開く。一階南側に事務室・応接室・校長室を配し、東側には宿直室・用務員室等を置く。二階は職員室、休憩室を配し、西側には図書室を設ける。一九九〇（平成二）年一〇月に西側南側に増築を行った。

当初は管理棟北側に南北に長く高校棟、中学棟、特別教室棟を並べたが、これらは二〇一二（平成二四）年に特別教室棟の南半分を残して解体された。管理棟と上記三棟をつなぐために逆L字型に二層の回廊をめぐらせ、これは今も残る。

立面は、一階は壁位置を柱型から下げて、窓は凹字型とし、二階は柱型を見せず、窓は凸字型として、微妙な変化を付ける。外壁仕上げは他のほとんどの建物と同様に白色スタッコのガン吹き付けとする。

敷地の制約が大きい中、教職員と生徒とが共用の玄関から別々の動線をたどる平面計画は巧みであり、生徒が校舎へ向かうための回廊を活かした外構の快適さも特筆に値する。意匠的提案が難しい校舎にあって、こうした新機軸を打ち出せることは、村野藤吾の力量をよく示す。

【特別棟】

特別棟は、各教科の実験および実習用の特別教室を配する棟で、鉄筋コンクリート造、地上四階建てで陸屋根、一九六八（昭和四三）年三月

に完成した。

現在の規模は東西約一三m、南北約四〇mである。当初は三階建ての棟が北側に雁行して、さらに桁行き約六〇m延びていたが、二〇一二（平成二四）年に取り壊された。

一階は西側一スパン分を吹き放しの外廊下とし、東側に医務室、倉庫等を並べた。二～四階は東側に片廊下を配置し、西側に諸特別教室を並べる。西側の窓は中央部に水平庇を突き出す、いわゆる遮光庇の手法が採用されている。また四階の音楽教室二室は階高を高めて、陸屋根上に瓦棒鋼板葺きの傾斜屋根を突出させる。

同一形状の窓が並ぶ立面だが、遮光庇の上下で窓の横幅を変えて凸字型にし、両端の外階段のバルコニー腰壁を煉瓦積みとするなどの工夫で単調さを避けている。サッシュ割りにも細かな配慮が感じられ、充実した意匠となっている。



甲南女子中学校・高等学校エントランス

【体育館】

体育館は管理棟の西端北側に位置する。一九六八（昭和四三）年三月に完成した。鉄骨造二階建て、アルミニューム板瓦棒葺き、変形の八柱屋根で頂部に宝形造の越屋根を冠する。一階は中廊下で東西に二分し、西側に食堂、東側に卓球場などを配する。二階は一室の体育館とする。

構造は、矩形平面の四隅に二本ずつ対をなす鋼管柱を計八本立て、平面トラスを複合させた大梁を対角に架け渡す形式で約五二mのスパンを確保している。

一階外壁は側柱筋から後退させて、腰壁は煉瓦積みとする。二階外壁は波形石綿セメント板とガラスの水平連続窓とし、一階とは逆に柱の外側に外壁をめぐらして構造体を見せない。セメント板にはスタッコのガン吹き付けが施されて、他の仕上げと揃えられる。工場建築と変わらない材料を用いるが、仕上げの工夫や端部の納め方によって無味乾燥さを排除することに成功している。

【体育研究室】

体育館の南西隅に体育研究室が置かれる。体育館とは鋼板製の渡り廊下でつながれ、あいだには螺旋階段が設けられる。鉄骨造二階建てで、陸屋根。一階は四本の柱だけのピロティとし、二階は矩形の角二つを欠き取ったような凸字型平面とする。外装は体育館と同様に石綿セメント板スタッコ吹き付け及び水平連続窓とする。即物的な仕上げにも見えるが、二階南側の入隅や上すぼまりになるピロティ柱、薄い庇、細い螺旋階段などの要素によって、快適な軽快感を見る者に与える。

【講堂】

講堂は管理棟の南側の傾斜面に建つ。一九六八（昭和四三）年八月に完成した。鉄筋コンクリート造と鉄骨造の混構造とし、地上二階、地下一階である。平面の骨格は六角形だが、南側への台形の突出など大小の凹凸が加えられる。屋根は寄棟だが、平面の輪郭とはずらされた複雑な形状を呈する。葺き材は赤色の石綿セメント板とする。

北西端にエントランスホールを設け、西側に客席、東側に舞台を配置する。南側に台形に客席を突出させて左右対称を破る。天井は客席奥から舞台に向かっていったん緩やかに反り上がり、そこから下降する独特の形状をなす。天井にとどまらず、出隅の多くにアールをとり、色調もクリーム色で統一して分節を曖昧にした室内は清楚な中にも有機性を感じさせる。

一方、斜行する壁面、台形や三角形の窓、直角におさまらない屋根といった手法を駆使した外観は非常に奔放な印象を与える。また型枠の跡を残した打ち放しの外壁面にモルタルをはねかけた仕上げは、建物が斜面の上に建つだけに、いっそう荒々しい迫力を見せる。そこには後期ル・コルビュジエの影響とともに、R・シュタイナーの第二ゲーテアヌムなど表現主義建築の反映を見ることも可能だろう。

建築ジャーナリズムに発表したのは実質的には講堂だけである。このことから見て、村野藤吾が意匠面でもっとも力を入れたのは講堂であったと考えられる。晩年の村野藤吾は曲面を多用したり、直角を崩したりするような造形が目立ったが、当講堂は関西大学特別講堂（一九六二／昭和三七年）とともに、そうした傾向の先駆と位置づけられる。

【守衛室】

敷地南端と北西端とに守衛室が設けられる。南側守衛室はコンクリートブロック造及び木造の平屋建てで、石綿セメント板葺き宝形屋根とする。一九六八（昭和四三）年八月に完成した。約二七㎡の小規模施設だが、煉瓦積みの煙突を建ててアクセントにし、窓を出窓にして角を回り込ませる手法や、ブロック積みの壁体に煉瓦を二段だけ混ぜる処理、小窓に鎧戸を設ける工夫など、細部をおろそかにしない村野藤吾の流儀がはっきり現れている佳品である。

結びに

先に三棟が登録文化財となった甲南女子大学は幅広の傾斜面に沿って段状に立ち並ぶため、遠景としての明快な表現が追求されて、整然とし、彫りの深い立面となっている。これに対して、甲南女子中学校・高等学校では既存の植生を生かし起伏の多い地形に沿うべく、入り組んだ施設配置となっている。また機能上の要求もより複雑多様となった。このため、各棟の違いを際立たせつつ、互いをなじませる工夫がされている。そこでは外構との関係や近景としての見せ方が重視されて、大学の建築よりも多様で肌理の細かな配慮が施されてい

村野藤吾と甲南女子大学学舎

名古屋市立大学
名誉教授　瀬口哲夫

る。一見すると、大学と中高の建築は同工異曲のように映るかもしれないが、それぞれの立地や性格を踏まえた独自性を備えているといえる。

最後に、大学における理念教育の教材として教務部で編纂された『甲南女子大学読本』に掲載された、名古屋市立大学の名誉教授である瀬口哲夫先生（工学博士）のコラムを掲載させていただきます。これらを踏まえて、甲南女子学園の「村野建築」をご覧いただければ幸いです。

甲南女子大学学舎を設計した村野藤吾とは

甲南女子大学を設計した村野藤吾（一八九一～一九八四）は昭和期に活躍した日本を代表する建築家である。村野藤吾は、佐賀県唐津市生まれで、一九一八（大正七）年に早稲田大学建築科を卒業し、建築家・渡辺節が経営する建築事務所に入った。渡辺節の指導のもとで、様式建築の修業をし、日本綿業会館の設計を担当した。二〇〇三（平成一五）年、この建物は、国の重要文化財に指定された。

村野藤吾は、一九二九（昭和四）年に独立し、自らの建築事務所を開設。村野の初期作品としては、森五商店ビル（一九三一／昭和六年）、大阪パッション（一九三一／昭和六年）、加能合同銀行（一九三二／昭和七年、現在、北國銀行武蔵ヶ辻支店）、中島商店（一九三二／昭和七年）、そごう百貨店（一九三六／昭和一一年）、大庄村役場（一九三四／昭和九年、現在、尼崎市立大庄公民館、国登録有形文化財）などがある。それらは、ディスティール、ドイツ表現主義、ロシア構成主義、さらに、モダニズムなど多様なスタイルを駆使したものだった。当時の建築界では、明治期の西洋建築の様式を取り入れたことから脱却し、新しい様々な建築様式が登場しており、これらを反映したものだった。

村野藤吾は、様式建築の修業の中で、陰影の大切さ、線の美しさ、ものを見るきめの細かさなどを学んでおり、こうした経験を通し、独自の建築観と作風を確立した。特に、戦後の一時代を風靡した機能主義建築とは一線を画し、人間に対して建築が与える影響を優先し、必要なら装飾を厭わないというものであった。村野藤吾は、理論により教条的に設計を行わず、模型で考え、現場を重視するという姿勢を貫き、数多くの傑作を世に送り続けた。

現在、村野藤吾の設計した建築で、国の重要文化財に指定されているものが三つある。第一は、広島にある世界平和記念堂（一九五四／昭和二九年献堂）で、丹下健三設計の広島平和記念資料館（一九五五／昭和三〇年開館）とともに、戦後建築として、初めて国重要文化財に指定された。第二は、宇部市渡辺翁記念館（一九三七／昭和一二年）で、第三は、東京の日本橋高島屋（一九三三／昭和八年）である。村野は、一九五二年増築部を設計した。

甲南女子大学学舎の特徴／「丘の上の白亜の調和」

建築家・村野藤吾は、人間を重視した造形的な建築を多く造ったとされるが、甲南女子大学学舎もそのひとつであろう。学舎は、甲南女子大学の校風に合わせた清楚で凛とした建物となっている。さらに、大学の歴史的経過が校舎に宿るように粗いスタッコ仕上げとするだけでなく、学舎の開口部に凹凸をつけ、陰影のあるものとしている。特に管理棟は、二階分の高さの列柱を並べたピロティとし、陰影をより深いものとしている。

管理棟背後の学舎群は、陰影をやや薄くし、背後の山並みに連続するものとして表現されている。太陽の移動により、学舎群の陰影が刻々変化していくところが見所である。この特徴は、夜間のライトアップによりさらに際立たせられている。

学舎群の配置は、中央にループ道路を廻し、ループ道路の内側と外側に校舎を平行配置するという機能的なものとなっている。ループ道路の内側中央に、なだらかなスロープの中庭がある。中庭の両側には軽い感じの渡り廊下があり、緑の斜面と白く波打つ屋根のコントラストが心地良い気持ちにしてくれる。管理棟のピロティから、この中庭を見上げると、視線の先は、六甲山の山並みに繋がり、中庭の一番高い三号館前から降って行くと、中庭、前庭の池を介して、神戸の市街地と海へ繋がる。これは、キャンパスの南北の中心軸である。

甲南女子大学学舎の外観は、スタッコの粗面仕上げで、統一感があるが、学生会館は、ガラス張りの建築である。一九七四（昭和四九）年に増築され、現在、四階建てとなっている。学生が集まる建物から、キャンパスが一望できるとともに、神戸の町並みと海を見渡すことができる。美しい夜景も見ることができる。これにより、学生は、意識的であれ、無意識的であれ、六甲の中腹にある大学という印象を日々持つことができる。

大学の発展に伴って、新しい校舎が必要とされてきているが、当初の校舎群の調和を大切にしながら、新増築されている。一九七六（昭和五一）年、図書館が改築され、一九八八（昭和六三）年、芦原講堂が新築された。図書館は、シンプルな立方体と円柱で構成された、マッシブな形態をしているが、その重さを感じさせないように、最上階の立方体の壁の上端部に細いスリットを入れるなど、細かな工夫があちこちに見られる。図書館内部は、吹き抜け中央に閲覧室を置き、各階周囲を開放型の書庫とし、書物に囲まれた居心地の良い空間の中で、書物を読めるように設計されている。

芦原講堂は、図書館に隣接しているが、その大きさを感じさせないように抑制的な建物となっている。エントランスホールをそのまま進むと上階の客席に、階段を下りると下階の客席に至ることができる。講堂内部には、圧倒されるような空間が広がっている。インド産砂岩張りの壁は波打ち、緩い弧を描く舞台に対応するように、客席も緩い弧を描き、天井も石膏成型板を繰り返す波のように張っている。全体に波打った空間になっている講堂の舞台上に、半透明の海月（くらげ）のような照明器具が吊るされている。あたかも、汀（みぎわ）と海底を想像させる空間のようである。舞台正面には、デンマークのマルクッセン社製のパイプオルガンが置かれている。芦原講堂の曲面状の内部空間は、音を拡散させ、音響上優れた空間が実現されている。この講堂は、村野藤吾が最後に手掛けた建築作品でもある。

図書館と芦原講堂の完成により、甲南女子大学のキャンパスに東西の空間軸が付加された。甲南女子大学学舎群は、増改築の度に、設計の密度を上げ、キャンパス全体として、建築家・村野藤吾の枠が込められた優れた建物群で構成されているといっても過言ではない。

学園の歩み

第一章　創設から戦後の学園まで

第一節　学園の創設

教授　米田明美

官立ではなく私立の女学校を

甲南女子学園[※1]の歴史は、一九一一（明治四四）年に開園した甲南幼稚園、一九一二年に開校した小学校[※2]から始まります。甲南幼稚園・小学校は、教育者であり実業家、政治家であった平生釟三郎[※3]氏によって、「少数児童に教育を徹底し、官立に望めない特色ある小学校」を目指し、住吉村反高林に創立されました。当時住吉村やその付近には関西財界人が多く居住しており、自分たちの子どもを通わせるための学校がその出発点でした。その後児童の学年が上がるにつれ、その進路として男子には甲南高等学校[※4]を、女子には甲南高等女学校という形で創設が提唱されました。

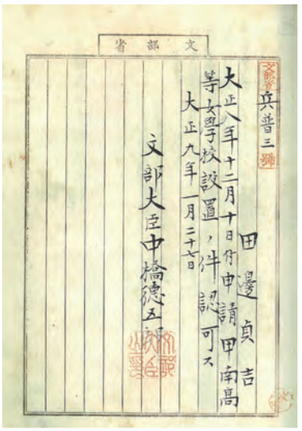
折しも女性の地位向上が叫ばれる大正時代。一九一九（大正八）年四月二〇日、甲南中学校の創立委員会が甲南小学校で開催され、その中で実業家安宅彌吉[※5]が甲南高等女学校設立を主唱しました。

創設には安宅のみならず多くの財界人が、新しい時代にふさわしい女子教育の必要性を望んだのです。当時の関西財界の中心メンバーの中でも特に久原房之助・岩井勝次郎・伊藤忠兵衛・平生釟三郎・田邉貞吉[※6]各氏が賛同し、多くの献金・寄付金が寄せられました。阪神間はいち早く港を開き外国の新しい思想に触れ得る地であり、加えて日本で二番目に鉄道が敷かれ、特に御影から住吉にかけては、大阪の富裕層が多く邸宅を構えた地でした。住吉村は、明治から昭和初期まで「日本一の富豪村[※7]」とさえ称されていたのです。さらに灘五郷と称される江戸時代から続く由緒ある造り酒屋が多く、文化的意識の高い地でもありました。それ故、多数の人々が新しい女学校の設立に期待・協力し、子弟を通わせたのです。甲南女子学園が「お嬢様が通う学校」と長く世間で評されていた由縁は、以上のような設立経緯によるものと思われます。

掲げられた理想は、官立にはない自由な校風の私立の女学校でした。明治時代に制定された学校令により官立校は、小学校より大学に至るまでドイツに範を求めて設立されていました。ドイツは私立学校がなくすべて官立でしたので、教育方針が画一的であり、多くの定員が求められました。それに対し主にイギリス・アメリカでは、私立学校が盛んで、富裕層が積極的に私立学校に寄付し設備も充実し、自由な特色を掲げることができました。豊かな知性と教養を持ち、品格を備えた女性を育てるには、教員と生徒が相互に交流できる少人数でないと、個性を尊重し、自ら創造して学ぶ教育は行えないという考え方でありましたので、私立の女学校の設立が叫ばれたのです。

一九一八年は、一一月に第一次世界大戦の休戦条約が成立し、世界が平和を取り戻した年でした。加えて明治時代とは異なるいわゆる大正デモ


安宅彌吉



財団法人設立許可書

クラシーという、政治や文化・社会の各方面に自由主義・民主主義運動が起こりはじめました。当時日本ではまだ女性には参政権は認められてはいませんでしたが、徐々に女性の意識改革の高まりが誕生しつつありました。

そのような風潮の中、一九二〇年一月に甲南高等女学校設立の認可が下りました。同年九月に「財団法人甲南学園甲南高等女学校」の設立出願書が提出されましたが、男子高とは違い基金二〇万円は思うようには集まらず、当初考えていたような十分な広さの土地の確保が難しく、校舎はなく甲南幼稚園の二教室を借りて授業が始まりました。校舎を建てる敷地確保に関しては、『創立三十周年記念誌』「回顧三十年」の「第三章　多難の校地、可憐の校舎」によると並々ならぬ苦労があったと記しています。当初は住吉村内（住吉神社の西側）に内定していましたが、二転三転し、結局、本山村田中（現在の本山南中学校）の地に落ち着きました。ここが甲南女子学園の出発の地です。当初はこの土地の購入に際し地主と折り合いがつかず、三〇年の期限付きで坪三銭という借地契約でありました。翌一九二一年一一月二七日、校舎の本館が竣工。以降この日を甲南女子学園の創立記念日としています。

甲南高等女学校開校

一九二〇（大正九）年一月に認可された高等女学校の内容は、本科五年、一クラス三五名、全校一七五名の定員でした。四月に開校し、入学希望者は二八名でありましたが、毎日数名ずつの補欠入学の申し出があり、数日後に定員に達することができました。

甲南高等女学校の創立者である安宅は、一代で安宅商会を設立し南満州鉄道監事、大阪商工会議所会頭、貴族院議員を務めた財界人でしたが、学校経営の経験はありませんでした。それ故教育方針などに関して、自ら積極的に前に出て指導的な役割を果たすことはせず、教育者（高等学校校長経験者）を選び任せる方向で行いました。財政面でのバックアップに終始しています。その後一九二一年三月七日には、「財団法人」としての認可が下り、財団の理事は、前海運協会会長の千浦友七郎、大阪丸永商会取締役の不破栄次郎、東洋紡績株式会社重役の真野愛三郎でした。最初の校長は甲南中学校校長の小森慶助が兼任し、教頭は貴志彌右衛門[※8]でした。初代理事長田邉貞吉は、甲南小学校・甲南中学校・甲南高等女学校三校の理事長を務めていましたが、女子教育においては保守的な考えをもっており、学校内は意見がまとまりませんでした。その結果小森・貴志とも二年で引退。その後一九二三年四月に、専任校長が見つかるまでという約束で、三田中学校校長今西嘉蔵が兼任校長として就任しました。やっと九月に専任校長として広島県立福山高等女学校校長であった表甚六が初代専任校長として就任しました。一九二一年には、定員を一学年四〇人とし各学年二クラスとしました。

教育方針を独自の校風としてまとめあげ、新しい教育を実現していったのは、表甚六校長（以下表校長）です。『創立三十周年記念誌』の中「回顧三十年」「第二章　設立の趣旨」で表校長は、「生徒定員を減少すること」「画一的教育を排して教育教授の徹底を期すること」「精神教育に重点を置くこと」と述べています。表校長が一九二七（昭和二）年四月に、教育方針を充実させるために設置した新学習法は、学級本位を改め学科本位とし、全学科教室は固定して生徒が毎時間移動するなど、教室を学年や組で固定せず、また従来の教師本位の詰込的形式的教育法ではなく、一学級の生徒の中で六人ずつのグループに分け生徒が問題の選択・提案を協議して、この間教師は適宜に机間を巡視して質疑に応じ学級全体で問題を解決する、ディスカッションによって生徒は切磋琢磨されていくなど現在の大学教育に近い方法で、教室の移動は、設備不十分などがありましたが、当時としては斬新な教育方法でした。

加えて表校長は、特に「精神教育」にも力を注ぎました。表校長の述べる「精神教育」は、宗教や思想という概念ではなく、自身の言葉を借りれば、「本校へは家庭の環境に恵まれている生徒が多く入学するであろうが、そうとすれば一層根気力を養成する必要があろう。又家庭で恵まれた生活をするものは、困苦欠乏ということを知らない。順境に在る間は得意になって道を失い易いものであり、逆境に立てば悲観して自棄するものは頗る多い。畢竟精神鍛錬が足りないからである。」として「困苦欠乏に耐える精神教育を施すことは乙亦本校設立の趣旨である」と述べています。

そして一九二七年七月に校歌が制定されることとなりました。校歌は二種定められ、第一校歌は甲南女子学園の教育の指標となるものとして明治天皇御製「まこと」が選ばれ、作曲は東京音楽学校教授信時潔氏に依頼し、第二校歌は生徒の愛校心を鼓舞するのを目的とし、時代に沿って生徒の心情にあうメロディーを第五学年の生徒が作詩作曲することとしました。一〇〇年近く経た今も甲南女子中学校・高等学校で、この伝統は続いています。

また表校長は、英語教育の充実のため、一九二四年一月に英国人教師ナイト女史を採用しました。当時高等女学校で外国人教員の採用はほとんどありませんでした。

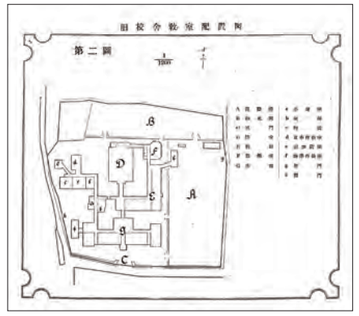
既に校章は定められていましたが、制服は決められておらず、和服で通学する生徒も多かったようです。そこでひとまず制服をセーラー服にすると決めました。この制服は夏・冬服とも少しずつ改変を



旧校舎 今北乙吉氏設計
今北氏は阪神間の財界人の邸宅の設計を数多く手掛けた建築家



旧正門



旧校舎の配置図


表甚六


ナイト女史

加え、次第に上品な洗練されたものになり、近隣の小学生の憧れのセーラー服となりました。[※9]

この校章ですが、前述の「回顧三十年」によると、生徒がこの校章を付けるのを恥ずかしがっていたので調べると、誰も校章の意図を知らないと言う。そこで「校章即校訓」とし、校訓として「清く正しく　優しく　強く」を掲げ、校章の意味づけを行いました。「生徒の信条は即ち教育の根本精神であり校訓である。之を具体化したものが本校の校章である。校章のクローバーは愛の象徴であり若松は前途の洋々たるを祝福すると共に常盤の松の霜雪を凌ぐ貞節を意味し、堅固なる徳操と天を摩する概あることを代表する。更に全体としての正しき形相は理智の針路を示し雪の純白は無我尽誠没我の精神を語るものである。生徒は居常これを胸間に着けて登校し無言の感化を受くると共に本校生徒たる体面を維持し発揚する。」（「校規抄録」より）とし、毎年入学式の式場で校長から、新入生の代表に一括して校章を渡し、その場で上級生が新入生の胸間に付けるという儀式はこの時から始まりました。

さらに情操教育の一環として、観菊会や音楽会を行いました。観菊会では、春に生徒に菊の苗を植え栽培させ、秋に保護者や卒業生を迎え、育った菊の鑑賞をしてもらうために園遊会を開催しました。園遊会の接待はすべて生徒たちによって行われました。音楽会も二年目からは公開で行われ、保護者や一般の人が多数鑑賞に訪れたということです。また大事に育てられひ弱な生徒が多いということで、体力向上のため、運動会や魚崎の浜での水泳訓練も実施さ


音楽会


観菊会


校章


高女第1回卒業式


小豆島合宿水泳


運動会


第一回卒業記念写真帖

れました。そして一九二五年、五年間の修了期間を経て、記念すべき第一回卒業証書授与式が挙行されました。第一回の卒業生は三二名でした。

翌年、卒業生たちが同窓会を発会し、一九二七年三月に同窓会誌『清友』創刊号を発行します。一方女学校では、卒業後の希望者のために「家政科」（一年間）を設置し、定員二〇名を受け入れ、翌年には「研究科」と改称しています。昭和一七年には「専攻科」開設となり、その後短期大学へと繋がっていきます。

※1　甲南女子学園…甲南女子大学・甲南女子高等学校・中学校で構成）

※2　甲南幼稚園・小学校…明治四〇年頃、日本生命創立者弘世助太郎氏ら住吉村在住の実業家らによって、設立が計画され、元神戸商業学校長平生釟三郎氏に声をかけ賛同を得た。幼稚園は一九二（明治四四）年、小学校は翌一九二二年に創立した。現在「学校法人甲南学園　甲南小学校」。


平生釟三郎氏

※3　平生釟三郎（ひらお　はちさぶろう）…一八六六（慶応二）～一九四五（昭和二〇）年。兵庫県立神戸商業学校校長（神戸大学の前身）、甲南学園の創立者。川崎造船所（現川崎重工業）社長、日本製鐵（現　新日鐵住金）会長。広田弘毅内閣で文部大臣。

※4　甲南高等学校…一九一九（大正八）年に本山村岡本に甲南中学校（旧制）として創立。後一九二三年に七年制甲南高等学校開設。現在、「学校法人甲南学園（甲南高等学校・中学校・甲南大学）」。この「学校法人甲南学園」、「学校法人甲南学園　甲南小学校」と「学校法人甲南女子学園」は、現在別々の学校法人だが、創設期に住吉村在住の財界人が理事として相互に相乗りして、新しい教育の理念を共有しており、親戚のような関係を保つ。

※5　安宅彌吉（あたか　やきち）…「安宅彌吉　その人」参照。

※6　久原房之助（くはら　ふさのすけ）…一八六九（明治二）～一九六五（昭和四〇）日立製作所・日産自動車・日立造船創立の基盤を作る。岩井勝次郎（いわい　かつじろう）…一八六三（文久三）～一九三五（昭和一〇）岩井商店を興し、日商と合併して総合商社日商岩井（現在は双日）となる。他にも岩井系企業として、関西ペイント・徳山曹達・ダイセルなど多数の工業企業を設立。伊藤忠兵衛（いとう　ちゅうべえ）…二代目伊藤忠兵衛。一八八六（明治一九）～一九七三（昭和四八）初代の呉服店を発展させ、後に伊藤忠商事と丸紅という二つの総合商社の基礎を作る。田邉貞吉（たなべ　ていきち）…一八四七（弘化四）～一九二六（大正一五）住吉銀行本店支配人、住吉財閥の大番頭。（住吉歴史資料館編集「わたしたちの住吉」）。一九三二（昭和七）年の兵庫県一世帯あたりの平均納税額が八八円に対し、住吉村は一〇七〇円と桁違いだったと記されている。

※7　貴志彌右衛門（きし　やえもん）…一八八二（明治一五）～一九三六（昭和一一）明治から昭和にかけての茶道家（藪内流）雑誌「徳雲」を主宰。夭折の作曲家・指揮者である貴志康一の兄。

※8　一九二四（大正一三）年四月、制服をセーラー服に決めたが形は決めなかったので、生徒は各自で色々なものを着ていた。徐々に統一し現在の形に落ち着いたのは昭和一〇年代。夏服は、一九二六（大正一五）年に、ワンピースとした。

※9　各周年記念誌からの引用については、適宜新字体に改めた。

第二節　昭和初期の学園

教授　米田明美

全人教育・個性尊重・自学創造

表校長の目指した教育方針については、『創立三十周年記念誌』の中「回顧三十年」で、以下のように記しています。甲南女子学園の教育方針の根幹となるべき方針で、漢字を改め要約し引用します。

「（一）自学創造教育の目標

主観的には、個人の全人格価値を実現せしめ、客観的には人類文化の向上発展に貢献し得る人物の養成を教育の目標とする。

（二）教育原理

自発自展の内部的努力を予想し、自由意志を重んじ、自己の力によりて価値創造への進展に努力せしむることを教育方法の第一原理とする。

教育活動の目的とするところは、生徒の内面に価値創造の意識を揺り動かし、自覚し、助長するにある。

（三）生活本位の教育

教師本位の規範を強要せず、生徒の時代年齢に応ずる生活欲求を理解し、其の価値化を助成し補導することを力める。

（四）個性尊重の教育

画一的・形式的教育の弊に鑑み、個人的指導を盛にし、個性を中心として天賦の性能を発揮せしめんことを期する。

（五）全人格主義の教育

生活組織の要素を総合的に取扱い、教科目の独自性を画拠することを避けて、常に全我活動をなさしめんことを期する。

各教科は各々共の専門的分野があるけれども、之に捉われては人格は偏る。人間諸能力の調和的発達が教育の理想である限り、各教科は常に全人格の陶冶ということを忘れてはならぬ。

（六）生徒本位の教育

実際生活に即して価値を体験せしめ、之を基として価値進展の欲求を促し、生活をして価値創造の無限の過程たらしめんことを力める。

表校長の訓育

また同書「第四章　甲南精神」の中で、表校長は、「私は本校を日本一の私立女学校にしたいと念願していた。」と述べています。

「然らば、何を以て日本一たらんとするか。それは教育その物の中に求めねばならぬ。

私は考えた。知育や体育方面は本校生徒の素質を以てしては、一流の公立学校に伍することは出来ても、其の右に出ることは空威張りに過ぎないと。（中略）本校は茲に思いを致し、訓育を以て日本一の学校たらしめたい、と。一体訓育の任務は何であるか。それは生徒の徳性を涵養して人格を道徳的ならしめることである。徳性の中心はなんであるか、それは品位と愛とである。（中略）品位と愛とは車の両輪の如きものではなく、両輪は共に愛であり、之を牽引するものが品位である。実に品位は精神教育の魂である。」

そして常に甲南の「生徒たり卒業生たるものは甲南高女に矜持を持て」と諭されていました。

さらに特筆すべき授業方法としては、授業中先生の質問に生徒が答えると、まずその答えを「いかがですか」とクラスメートに尋ねさせたそうです。教員はすぐに解答を示さず生徒たちに考えさせたとのこと。その答えが正解だと、皆が「よろしゅうございます」と一斉に唱えたそうです。そのやり方はどの授業でも行われたそうで、教師が一方的に生徒に教授するのではなく、何より生徒自身に考えさせることを重んじていたとのことでした。[※1]

他に表校長の訓話を思い出話として挙げる人が多数いました。週に一度講堂に朝礼として全校生を集め、訓話が始まります。この場では生徒全教職員が「静座」（現在は「聖座」）を行い、訓話を通して「訓育」（徳育）を伝えようとしたのでしょう。女性として社会人として、これからのあるべき姿をわかりやすく話されたということです。

表校長の掲げた教育方針、「全人教育」「個性尊重」「自学創造」そして「訓育」は、以上のような形で実践されていったのです。この教育実践は年を追うごとに地域の人々から高く評価されるようになり、一九二九年春の中学志願者のうち、甲南小学校を除く一般の受験者は二五〇名となり、入学許可候補者（合格者）六七名で約四倍の倍率からしても、阪神間からさらに学力等優秀な子女が集まることになりました。[※2]

一九三七（昭和一二）年七月、保護者が後援会を発足し、会長に村山長挙（朝日新聞社長）、副会長に野村元五郎（野村銀行頭取）と坂田幹太（元知事、阪神バス社長）が就き、女学校の教育を後押ししました。


朝礼


登下校


戦前校舎　講堂


ダンスのお稽古


割烹


作法

阪神大水害

一九三八（昭和一三）年七月、三日から降り続いていた雨は五日未明よりさらに激しくなり、六甲山麓を流れる芦屋川・石屋川などが次々に氾濫、遂に午前一〇時ごろ女学校の近くを流れる住吉川の堤防が決壊しました。当時は天気予報が未発達の時代で、ほとんどの生徒が登校していました。土石流が樹木をなぎ倒しながら校舎一階になだれ込み、教職員は生徒たちを校舎の二階に避難させました。

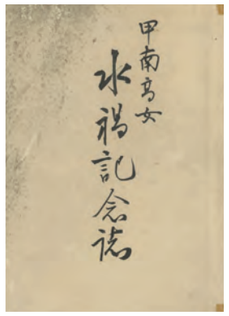
表校長は、生徒を帰宅させるよりも学校に残留させた方が安全と判断し、保護者からの迎えを待つことにしました。谷崎潤一郎の小説『細雪』[※3]にも記載される大水害でしたが、生徒教職員に一人の負傷者も出ませんでした。当時の朝日新聞には、

「住吉村の甲南高等女学校は、住吉川流域に臨んでいるため、三千八百坪の廣い校庭は七、八尺の高さにまで土砂が堆積してさながら砂漠と化し講堂をはじめ各校舎とも一階は惨憺たる砂の海、殊に作法室や洗濯室、割烹室などは殆ど廂近くまで埋没し、阪神地方に於ける諸学校中最もひどい災害を被った一つである。[※4]」

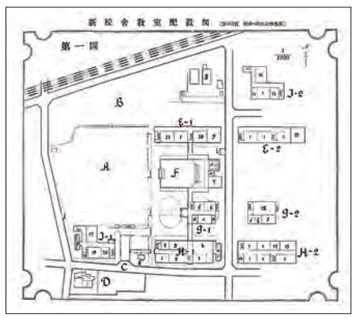
と記しています。校舎の被害は甚大で、学校敷地の北側に位置していた家事教室は屋根のみを残して全て土石に埋まり、他の校舎も窓ガラスは割れ、流木や泥流に深く埋もれてしまいました。神戸市の全家屋の七〇％以上が被害を受けた大災害だったのです。

一八日から生徒教職員力を合わせ、スコップで土砂の取り除き作業を行いました。ですが八月一日、朝からの豪雨は夜になっても止まず、再び泥流は住吉川岸に積まれた土嚢を越え、校庭に新築したばかりのバラックを押し流しました。こうした度重なる災害の中、生徒たちは夏休みを返上し毎日毎日泥を掘り出し運び、水を掻き出す作業を繰り返しました。『甲南高女水禍記念誌』[※5]によると、保護者を始め地域の多くの方々が救援に駆けつけ、復旧活動に尽力してくれたとし、本山第一高等小学校職員生徒合わせて三十余人、西宮高等女学校（現・西宮市立西宮高校）の教員と女生徒合わせて百余人、西宮市、芦屋市、神戸市の青年団、そして甲南高校の生徒約三〇名が、「手のあいている時はどこでもいいから出来るだけ救援せよと学校から命令」され、救援に訪れてくれたとあります。同書の「御來援」の項には、これら多数の方々への感謝の言葉が記されています。

生徒たちと保護者・救援に駆けつけて下さった方々の懸命な努力の結果、校舎内の泥を掻き出し、八月下旬から清掃作業に入ることが出来たのです。九月六日には生徒全員が登校して始業式、七日から二学期の授業が再開される



水禍記念誌



新校舎配置図


女学生たちの泥出作業


新校舎


立往生する省線


濁流が構内に


埋もれた校門


埋もれた校舎

ことになりました。掻き出された土砂の一部は、後に表校長の発案で築山とし花樹木が植えられ「和光園」と名付けられ、以後生徒たちの憩いの場となりました。[※6] それまで女学校の土地は借地で、地主の毎年のような値上げ要求に苦慮していましたが、[※7] 水害で荒れ果て土地の所有者も困り果て、周囲の土地も含め買入れの運びとなりました。表校長自身『創立三十周年記念誌』に「この時の私の喜びは雲霧霞晴れて青空を望むといった心境」であったと語っています。ようやく自らの校地を取得する運びとなったのです。

※1 『創立三十周年記念誌』（昭和二六年三月）による。
※2 『創立六十周年記念誌』による。
※3 谷崎潤一郎『細雪』婦人公論（一九四七年三月～一九四七年一〇月）。
※4 朝日新聞記事より。
※5 『甲南高女水禍記念誌』（昭和三年一月）
※6 一九四〇（昭和一五）年、水害で莫大な土砂を堆積していたが、半分は外へ搬出し、残りは買収した北側線路に沿って築山とした。東北隅に小祠を鎮座「和光神社」と名付け、築山は「和光園」と称し、万葉植物園や池・渓流も造った。正門前の校地は人家を払うて洋式庭園とし、これを一六回卒業生が学校へ寄贈した。名付けて「清友園」という。
※7 昭和一三年では、坪単価三五円から四五円にまで高騰していた。


新校門


和光園完成




和光園造営中


1940年当時の清友園


和光神社奉安殿

第三節　戦時下の学園

教授　米田明美

神戸大空襲・阪神大空襲―焼夷弾による校舎焼失

その後女学校は、戦争に翻弄されていきます。[※1] 国際連盟脱退、日独伊三国同盟が締結されるなど、次第に国内の軍事色は濃くなっていきます。一九三七（昭和一二）年には、軍事訓練が教科の中に入り、課外に弓道・長刀を置きます。

一九三九年一二月に戦争が起こり、戦域は世界中に拡大し、いわゆる第二次世界大戦に突入し、一九四一年一二月、太平洋戦争が起こりました。もちろん甲南女子学園にとっても苦難の時代でした。若い男性教員は次々と兵士としてかり出され、何人かの先生をバンザイの声とともに戦場に送り出しました。出征兵士を乗せた省線電車（現・ＪＲ）が女学校の北側を次々と通過、生徒たちは何度も何度も手を振ったそうです。

一九四一年六月、文部省の指示により校友会は廃止され、「報国団」を組織することになりました。[※2] これにより学生たちの自治組織は、戦時体制強化のため、勤労動員のための組織となりました。一九四一年一二月、太平洋戦争が始まり、翌年四月、初めて神戸に空襲があり、九月から英語は随意科目となり、やがて教室から消えていきました。また九月には女子勤労報国隊が組織され、割り当てられた生徒達が川西航空機製作所に勤労奉仕に出かけました。女学生の服装もモンペ姿になり、[※3] 学科に「修練」が加えられます。[※4]

一九四二年には、女学校の卒業生の進む先として、二年間の専攻科を開設します。当時はまだ兵庫県内に女子の専門学校はなく、一般に、高等女学校を卒業した女性は、一～二年後結婚するのが通例でしたが、さらに高等教育を受けさせる家庭が次第に増えてきた時代の推移を見ることができます。ただし前年太平洋戦争に突入し、卒業後の女性は皆勤労奉仕に駆り出されるという政治事情で、国家の非常時に教育の名のもとに女子の徴用逃れをするとは、非国民だという多数の声を粘り強く押し切っての設置でした。


1942年防空訓練


1937年出征兵士来校


1936年教練

修業年限は二カ年、一九四四年に第一回修了生を出しました。この後一九四九年三月に第五回の卒業生を出して旧制の専攻科は幕を閉じ、次年一九五〇年三月に新制専攻科（英文科、家政科）に設置認可が出て、四月に開設、一九五五年三月に家政科第四回生を出して専攻科の歴史は閉じられ、一九五五年四月の短期大学開設に受け継がれていきます。

一九四五年五月、戦時教育令により上級生の授業は全廃、生徒の動員教育が厳しくなり、「勤労即教育」と称されるようになりました。上級生は全員深江にあった川西航空甲南工場へ出勤することになりました。兵庫県勤労報国隊甲南高女隊の名のもと、川西航空工場へ動員された上級学年の方々の話では、毎日直接工場へ出勤し、全員各部署に数人ずつ配置されたため同級生と会えるのはトイレのみ。とにかく学校に戻りたかった、先生に会いたかった、毎日そればかり考えていたと話されていました。

前年八月には、中学校低学年生徒に学徒勤労令が公布され、下級生への動員命令も必須でした。表校長は生徒が心細く感じるのを憂い、何とかして校内で一緒に生徒たちが従事できる方法はないかと模索しました。理事であり後援会会長である坂田幹太と協議を重ね、東洋紡績社長の種田健蔵の協力を得、学校をミシン工場にすることにしました。県は難色を示したようですが、それを押し通し二年生以下の生徒は、女学校の校内（学校工場）で海軍水兵の制服製作に従事することになりました。女学校は、姫路第二海軍衣糧班東洋紡姫路工場甲南分工場として校内にシンガー・ミシン一〇〇台を並べ、生徒たちは予科練生（海軍飛行予科練習生）のズボンを縫うことになりました。手先の凍るような辛い冬の寒さの中で、生徒たちは懸命にミシンを踏み続けたそうです。出来上がったズボンは次々と一つの教室の中に集められて、うずたかく積み上げられました。

一九四五年三月一七日昼、川西航空工場は空襲で被災、神戸大空襲と呼ばれ、生徒たちは深江から予め決められていた避難場所、神戸女子薬専（現・神戸薬科大学）近くの丘の上まで、焼夷弾が降り注ぐ炎の中走りに走ったそうです。実はこの日の米軍の主要な攻撃目標の一つが、この川西航空工場だったとのこと。同じ航空工場に勤労奉仕していた他校の生徒には多数の犠牲者が出た中、甲南女子学園の生徒は全員無事避難することができたそうです。その後この川西工場に動員させられていた高女二二回生の方は、この三月に一年早く卒業することになったのです。文部省が一九四三年三月に制定した「中等学校令高等女学校規程」においては、修業年限を四年とするのは、同年四月入学の者からの適用となっていましたが、時局の緊迫に伴い卒業期の繰り上げが行われ、上の学年二一回生と合同の卒業式だったそうで、五年間の修業期間のはずが四年で卒業、しかも鉛筆を持てたのはそのうちのわずか二年余りだったのです。

以降阪神間は度々空襲を受けることになります。同年六月五日早朝、東神戸から六甲・住吉・本山という鉄道の沿線は、B29の大編隊総勢三五〇機が落とす焼夷弾でことごとく灰燼に帰しました。


戦時下勤労奉仕


大空襲で焼け野原と化した東神戸一帯 そごう百貨店（現・神戸阪急）より省線（現・JR）三ノ宮駅から、まだ余じんがくすぶる葺合区（現・中央区）を見る。（1945年6月5日）（Copyright: 神戸新聞社）

校舎再建―学校は焼けたが甲南精神は焼けていない

八月一五日の終戦を経て九月一五日、二学期の始業式が行われました。もちろん校舎はなく一七日から近くの芦屋の仏教会館を借りて行われました。表校長は病のため校長を辞し、[※5]後任に兵庫県立第一神戸中学校（現・兵庫県立神戸高校）校長の池田多助が就任します。


池田多助

一一月の就任式で、池田校長は「学校は焼けたが甲南精神は焼けていない。これからは棘の道には違いないが、多年長養した甲南精神には一難来る毎に鍛えられて益々強くなる素直さがある。甲南の伝統を一つ一つ堀起こして自信をもって発揮していきましょう。その内に皆とともに必ず今日の試練を感謝すべき日が来ると信じます[※6]」と訴えました。

五年生は繰り上げで卒業させられていて、残ったのは四年生以下。加えて多くの生徒が空襲で家を焼かれ疎開しており、残った在校生は一〇〇人余りでした。始業式を九月一五日に行い、授業を再開したのは一七日からでした。芦屋の仏教会館の一階ホールを借りての授業再開で、月曜日から金曜日まで週二回交代で一学年ずつ授業を行い、土曜日は燃えた校舎の焼け跡整理に費やされました。生徒たちは何度ももっと勉強させてほしいと校長に懇願したそうです。その後打出の公会堂の二階、一二月には神戸女子薬専（現・神戸薬科大学）の講堂、翌年一月には薬専の武道場。薬専の講堂を借りられるようになってから、音楽の授業ができるようになったそうです。寒さの中で生徒たちは、占領軍配給の缶詰の空き缶に灰を入れ、炭火を入れ抱きかかえながら、授業を受けたそうです。

翌一九四六（昭和二一）年二月からは本山第一国民学校（現・神戸市立本山第一小学校）と魚崎国民学校（現・神戸市立魚崎小学校）の教室も借り、分散して授業を行いま

甲南高等女学校の校舎も全焼しました。下級生たちが必死で縫い上げた予科練生のためのズボンも、一着も発送することなく燃えてしまいました。生徒の一人は、空襲警報のサイレンが鳴って夜明けの薄明かりの中女学校までたどり着いた時、既に校舎は炎に包まれ、とてつもなく大きな真赤な壁となって立ちはだかっていたそうです。紅蓮の炎が二階の教室を抜けて屋根の上からも空に向かって吹き出していて、とてもバケツの水で消せるものではなかったとのこと、阪神大空襲でした。この空襲では校舎だけでなく、多くの在校生やそのご家族も亡くなられました。

した。※7 教職員も、雨の日も風の日も徒歩・自転車で各学校を行き来しました。翌年四月からはやっと全校生を本山第一・二小学校へ集めることができました。学び舎もなく、新しい教科書が間に合わず、戦時中の教材の不要な個所を消したいわゆる「墨塗教科書※8」を使用していましたが、生徒たちの勉学意欲は真剣そのものであったと、当時を知る教師たちは述懐しています。食糧難の時代で、運動場や空き地はすべてイモや野菜畑となっていました。

校舎再建への道程は容易ではありませんでした。戦後復旧の木材高騰の中、本学校舎の木材調達も中々捗りません。多くの理事はGHQの占領政策により公職を追放され、阪神間の企業もほとんどが被災し、寄付は望みようもなかったのです。生徒はまだ疎開先から帰ってこず、それ故授業料も集まらず、学校の財産も封鎖され、教職員の給料さえ払えない状況でした。そこでその費用の一部でも工面しようと立ち上がったのは、卒業生でした。

「省線の窓から焼跡の母校のすがたを見た時、泣けて泣けてしかたがありませんでした。生徒はあちらこちら、公会堂や小学校をお借りして、分散授業をうけている。これで一体どうなるのでしょう。いつまでこんな状態が続くのでしょうと思つて校長先生にお聞きすると、自力で立てない学校は廃校になるとか承った時の悲しさ、みんな泣きましたわ～。※9」

唯一焼け残った同窓会館（清友会館）を中心として、家屋が無事であった者は着物一枚帯一本、焼け出された者はカップ一杯の小麦粉、畑のイモなどを持ち寄り、第一回バザーが開催されたのは一九四六年一〇月、本山第二小学校を借りて行われました。生徒たちも紅茶（三円）やパン（八円）、などを売り、それらの代金が校舎建設の資金の一部となりました。第一校舎の建設費の前金一〇万円の内の七万円は、主にこのバザーでの収益金だったのです。その後もバザーは毎年続けられ、講堂や第二校舎の建設費に充てられました。一時甲南高等女学校は再建不能とさえ囁かれましたが、それを当時の同窓生・教職員・生徒たちの手で復興したのです。日本全体が財政逼迫していた中、罹災した一私学が、国の援助も県の補助金もなしに、矢継ぎ早に校舎を建設できたのは、奇跡としか言いようがなかったのです。これらはすべて、後輩たちのために校舎を建ててやろうという一念から出発したのでした。※10

一九四七年四月には中学校を併設。高等女学校一・二・三学年が切り替わりました。同年九月に待望の第一校舎が竣工しました。木造二階建てのささやかでしたが、やっと手に入れた自分たちの校舎でした。これによって、生徒たちも教員も、不便な仮教室生活から解放され、「自分たちの学校」に登校することが出来ました。九月二五日、新校舎で二学期の始業式が行われ、授業が開始されました。

この第一校舎を初めとして一九四八年には本館が、年末には講堂が竣工しました。翌年三月には、旧制高等女学校最終（二五回）卒業式とともに、新制高校第一期卒業式がこの新講堂で行われました。


第1回バザー受付


第1回バザーグラウンド


1947年7月待望の第1校舎竣工


1947年8月第1校舎完成を前にしてペンキを塗る池田校長

※1 一九三六（昭和一一）年七月時局に鑑み教練を加設することとし、甲南高等学校配属将校陸軍中佐永幡寮二氏にその指導を依嘱した。女学生が銃を担ぎ隊長が長剣を佩びて号令するなど全く時局の反映である。一九三七年一一月　神戸市駐屯、歩兵第三四聯隊上村部隊、木村隊二三二人を学校に案内して終日慰労した。一九三九年六月　銃後のまもり士気昂揚に音楽隊を設置した。ブラスバンドは女生徒にふさわしからず、新興の鼓笛隊を採用した。後県内女学校にも漸次鼓笛隊を入れるようになった。

※2 一九四〇（昭和一五）年一〇月　帝国大学総長会議などにおいて、学友会を改組し、報国団を結成するよう求める文相訓示が行われた。

※3 一九四三（昭和一八）年五月　空襲頻繁となる。生徒の服装悉くモンペとなる。

※4 一九四三（昭和一八）年六月　学科中に「修練」の一科加わる。

※5 一九五〇（昭和二五）年九月一七日、表校長逝去。一〇月二五日、学校葬を挙行。

※6 『創立五十周年記念誌』「二、学園の歩み」より引用。

※7 一九四六（昭和二一）年二月　神戸女子薬専、仏教会館仮用を止め、本山第一及び魚崎小学校の教室を仮用することにした。二月から八月まで他校を仮用して開催したものは以下のとおり。

音楽会（灘中講堂）
保護者会（同右）
終業式（甲南高校講堂）
卒業式（同右）
入学考査（同右）
始業式（同右）

※8 一九四六（昭和二一）年一月　修身・国史・地理教授停止の命あり、又教科書は新規を要する。印刷の都合により教師用参考書を使用する。

※9 『甲南の道』「余録」より沢田静子同窓会会長の言葉。

※10 一九四六（昭和二一）年二月、理事会・後援会・維持会・同窓会の館員を一丸とする甲南高女復興会を組織し、委員会を開催、本格的建築の機運に向かっていく。理事長であった安宅彌吉は病のため引退、長男の英一氏が演奏会などを開催し募金を集める。彌吉は一九四九（昭和二四）年二月に逝去。尚、バザーは当初の役目を終えたということで、一九八一（昭和五六）年をもって最終とした。

第四節　戦後の学園

教授　米田明美

甲南女子中学校・高等学校―一隅にても清く香しく

戦後、教育制度は次々と改革されていきます。一九四七（昭和二二）年四月、教育制度改革により新制の中学校を併設し、本校も高等女学校の一・二・三学年は、義務教育の中学に切り替えられました。翌年七月には女子高等学校設立の認可がおり、財団法人の名称を「財団法人甲南学園甲南高等女学校」から「財団法人甲南女子学園」（一九五一年三月、制度改正により財団法人は学校法人となる）と変更します。

さらに教育方針の充実が計られました。表校長の後を継いだ池田多助校長が記した『創立三十周年記念誌』の中の「本校の教育方針」を引用すると、表校長の唱えた方針の続きとして

四、精神教育
敬天愛人、各自何ものかの信仰の上に、精神生活の根底を堅めしめ、上は神明にも通ずべき至誠の体験を収容に努めしむ。

五、科学教育の振興
従来我が国理科教育の欠陥を顧み、更に進んで化学の実験観察を重んじ、科学精神の涵養に力めること。

六、外国語教育と世界精神の強調
外国語を研究し外国及び外国人を理解し、以て博大なる国際的精神を養い、広く人類愛の世界観にまで導きたい。

と示されました。

この三か条は池田校長が時代と社会の要求に応じて策定されたものです。これらを含め池田校長の教育の成果として、『創立四十周年記念誌』では、「体力の向上・外国語と世界精神の発展・自治と自由の精神の伸長及び知的向上」を挙げています。「体力の向上」としては、一九四八年の第三回全国国民体育大会に在校生が兵庫県代表として出場し、団体送球試合、硬式テニス試合で活躍しています。加えて「外国語と世界精神の発展」の面では、一九五〇年には神戸市高等学校弁論大会において、優勝する生徒も現れたことからもその成果をうかがい知ることができます。また「自治と自由の精神の伸長」の面では、表校長が定められた「生徒心得」を「私たちの約束」に改めました。生徒の「自覚」と「自重」を待つべきであるという考えでした。

一九四八年の六月まで、生徒たちは芋畑だったグラウンドの整備を行い、同年一〇月二四日に、やっと戦後の第一回体育大会が復活しました。この後一九四九年には学園の東の校地を買収して第二運動場とし、また同年一〇月に講堂が、一九五〇年に第二校舎が施工され、その後も次々と校舎の増改築が続き、めざましい復興をとげました。


1947年夏グラウンドの整理

卒業生たちの心に長く刻まれている池田校長の言葉を紹介したいと思います。卒業式に巣立つ生徒のために、いつも池田校長は各々の画帖に一茎の蘭の絵を描き、「一隅にても清く香しく」の言葉を書き添えていました。最澄の「一隅を照らす、これ即ち国宝なり」を倣った言葉ですが、校長自ら、

「人生の一隅というものは到るところにある。学校の隅、家庭の隅、オフィスの隅、暗い汚ない埃っぽい隅でも、そうしたかくれた、目立たないところへおかれても、そして、大小色々な別はあろうが、蘭は蘭らしく、清く正しくやさしく、ほのかな香を放って咲いていれば、人知らずともそれで神様は喜んで下さると思う。[※1]」

描かれた蘭は、カトレアや胡蝶蘭ではなく、日本固有の蘭でした。菊ほどの華やかさはありませんが、「誠をこめてゆかしい香を放つ蘭になってもらいたい。そして一人でも多く、そうした人が世間にでてくれれば、と祈りたい」と。


池田校長の書いた蘭

短期大学創設

一九五〇年一一月二六日に創立三〇周年記念式典が行われましたが、その挨拶で池田校長は、女性のための大学創設を発言しています。

「幸に姉妹校の甲南が四年生の大学となり、女子の入学も考えられ、すでに本校から志願するひともあり、私の気持ち一応は慰められたのではありますが、正直に言えばやはり私はここに女子の伝統を伸ばした女子ばかりの大学が欲しいと思います。[※2]」

と述べ、以後入学式や卒業式など事あるたびに熱心に女子大・短期大学創設を訴えました。

一九五一年には、生徒自らが署名活動をして、育友会会長にお願いに行きました。同年は、まだ専攻科用の家政館が出来上がった年で、それまで毎年多額の出資を強いられていたので、保護者や同窓会は短期大学創設には消極的でした。一方、一九五〇年には、全国で一四九校の短期大学が創設され、その後も東京では女子の短期大学進学が当たり前となってきているという時代でありました。一九五二年三月の謝恩会の席で、当時の高校四回生は阿部理事長に三〇分だけに私達の意見を聞いてくださいといって、かわるがわる短期大学設立の必要を訴えました。理事長はこの生徒たちの訴えに耳を傾け、退出する際に二・三年のうちに必ずつくると明言しました。これが公式の席上で、理事長が短期大学創設に関する


1949年秋工事中の第2校舎


甲南女子短期大学







甲南女子短期大学

初めての発言であり、理事会としても設立を決意しました。

一九五二年六月に竣工した第三校舎、一九五四年五月に竣工した本館増築工事、翌年一月には第三校舎増築工事に入りましたが、いずれも短期大学設置のための工事でした。

設立準備は、校舎だけではなく多くの労力と資金が必要でした。まず被服中心の家政科で出発することになりました。父母全員に学校債（一口五〇〇〇円）を持ってもらい、何度も文部省に足を運び申請書を作成し、一九五四年一二月二一日に甲南女子短期大学設置許可の内報がありました。ここに阿部理事長と生徒との約束は守られたのでした。早速翌年二月に設置許可書が出て、四月五日には短期大学入試、即日合格発表。二〇日に第一回入学式。初代学長となった池田の理想は、この短期大学を日本一の大学に育てることにありました。池田は、中学・高校で甲南常識を、短期大学で甲南良識を植えつけたいと考えていたのです。

続いて、同年国語科開設に取りかかりました。一〇月に申請書を文部省に提出し、一二月認可の内報がありました。翌一九五六年四月一〇日の入学式には、家政科四九名・国語科第一回入学者は三〇名でした。両学科とも学生たちの勉学意欲は高く、研究誌（『甲南女子短期大学論叢』『甲南国文』）の発刊や、研究旅行・学術講演会など様々なアカデミックな成果を生み出していました。

一九五八年一〇月、高齢となった池田学長は退任し、[※3]第二代短期大学学長並びに第五代甲南女子中学校・高等学校校長として、山本校長は、表校長・池田校長の築いてきた甲南精神を継承することが自らの使命であるとし、建学の精神を端的に「まことの人間をつくる」ということばで表現しました。[※4]また表校長が提唱した「静座」を甲南の教育の中に据え「聖座」として『甲南のかがみ』に

「聖座は心身を挙げてまことの人となる行である。



甲南女子短期大学校門



山本榮喜

心身は一体なるがゆえに、正身は正心であると知らねばならぬ。正身端座して一切の思念を離れ、心品を整えて静かに坐るとき、人はおのずからまことの人となり『清く正しく優しく強く』の身心が現前する」

と説きました。かつて表校長は、甲南高等女学校の精神を作り、専攻科を立ち上げられました。さらに池田校長によって戦後の復興がなされ、短期大学が創設されました。そして山本校長は、中・高等学校の校舎移転と女子大学創設という一大事業が待っていました。

四年制大学開学へ

一九六一（昭和三六）年、創立四〇周年記念事業として、学園拡充計画を実施することになりました。学園の先を見、短期大学を充実・発展させようとの山本学長の考えでした。当初は、本山町田中の中・高・短期大学の校舎のある敷地と、第二グランドとの間の敷地を買収してそこに短期大学の学舎を新築し、中高の校舎を改築しようというものでした。ところが、同年八月四日、佐伯勇育友会会長、坂本那緒副会長以下他の役員たちが、阿部理事長と山本学長に面会し、四年制大学設置を強く要望しました。一九五五年に短期大学設置当時、すでに女性の短期大学進学は珍しいものではありませんでした。六年後には、女性の四年制大学進学も普通の学歴となるところまで、時代は進んでいたのです。[※5]

そして学園拡充計画は当初の計画を第一次とし、それを白紙に戻し、第二次計画に入ることになりました。つまりまず女子大学創設、短期大学とともに新たに用地を求めて学舎を建てることになり、中高の校舎建築については、後に回ることになりました。

新たな大学建設の土地探しは、これまた大変な作業でした。山本学長と関係者は適当な土地を求めて歩き回ったそうです。紆余曲折を経て、一九六三年現在の森北町の地が売りに出されることになり、結局この地に落ち着きました。

そしていよいよ造成・建築が始まりました。校舎群の設計は、昭和の建築史の礎を築いたと賞される村野藤吾氏が行いました。村野氏は敷地造成時のキャンパスの基本計画から校舎・内装・備品に至るまで設計し、亡くなるまでの二〇年以上本学の建設にかかわりました。



朝の正門



校舎全景

※1　「蘭を作ろう」「第二編　本学の教育方針」『創立四十周年記念誌』（昭和三六年二月）

※2　『甲南の道』『創立五十周年記念誌』『学園の歩み』より

※3　一九六四（昭和三九）年一二月二九日逝去。

※4　山本榮喜著『甲南随想』より

※5　神戸女学院は一九四八年に大学を開学、武庫川学院も一九四九年に大学開学していた。

第二章　中高の歩み

第一節　中高校舎移転建設について

―・学園の拡充

甲南女子中学校・高等学校が、神戸市東灘区本山町田中から、現在の森北町に移転したのは、一九六八（昭和四三）年で、この地で五〇年以上の歳月を経たことになります。この移転にあたっては、第五代の校長である山本榮喜の功績によるところが大きかったといえます。ここでは、移転の経緯と校舎建築の過程を、五十周年記念誌の山本校長の「甲南女子中学高校校舎移転建設記」を中心にしながら、まとめていくことにします。

一九四五（昭和二〇）年に校舎のほとんどを焼失した状態でしたが、一九四七年、木造二階建ての第一校舎が竣工されました。この第一校舎建築をきっかけにして、講堂や第二校舎等が次々と竣工されることになりました。

しかし、第一校舎は、建築材料の関係もあり、ダニが発生するようになりました。他の理由もあったようですが、結局改築ということになり、一九五九年三月、鉄筋コンクリート三階建ての新第一校舎が完成しました。しかし、それから数年後、第二校舎でもダニが発生し蔓延しました。この問題に対して、鉄筋の第一校舎ができ上がった段階で、次々と改築をしていくことへの疑問が、教職員から出た上に、生徒たちからも「グラウンドが狭い」「電車の音がさわがしい」などの声が上がり、学園の拡充に向けた動きが進むことになりました。

二・中高校舎建築

大学の建設が終わったことで、次は当然中高校舎の拡充整備にかかる必要がありました。しかし、財政は困窮をきわめており、建設を急ぐことを主張することは難しい状況でもありました。

「私学は発祥の地を去るべきではない」という考えから、学校を別の場所に移転することは、卒業生から懐かしい母校のイメージを奪うことになるという意見があり、教職員にも同じ思いを持つ者がいました。しかし、中間にある民有地を買収するという最初の計画は、困難を極めていました。また、仮に買収できたとしても、理想的な建築設計は望めそうにもなく、完成まで授業と建設工事を並行して行う必要があり、その間の生徒への影響なども考えると、いっそ他の地に求めた方がいいのではないか、という意見が出てくるようになりました。

山本校長もその意見に傾き、その後の建設委員会で、中高建設の土地だけは早く確保しておくという方針が決まり、旧校舎の隣接地の買収は困難であるから、他に土地を探すことにしました。

いくつかの候補地の話は出ましたが、いずれも困難な点がありやめることにしました。

移る場合、学園のまとまりから見て、女子大学になるべく近い方がよい、というのは当然の考えでした。そして、恰好の土地が芦屋市に隣接した位置に見つかりました。それが、現在の中高校地になります。

一九六五（昭和四〇）年三月、理事会が開催され、中高校舎を新築移転することを決定しました。それを受けて、山本校長は教職員・育友会・同窓会に了解と協力を得なければいけないと考えました。特に、教職員には現地を見てもらうことにしました。それにより、これまで移転に反対していた人も、素晴らしい環境と眺望を見たことで、移転に賛成することになりました。また、育友会・同窓会の了承も得ることができ、いよいよ実現に向けて動き始めることができました。

しかし、この土地を買うこと、さらに安く買うことは困難をきわめました。所有者に相当な高値であっても、あまり売る意志がないことが分かり、「土地収用法」を適用してくれるのであれば売ってもよいとのことでした。そこで、無理とは知りながら、土地収用法による買収を行うことにしました。私学が土地収用法によって土地を買収することは、不可能に近いことではありました。しかし、約一年にわたる事務局の努力と、関係者の好意等によって、土地収用法の申請が許可されることになりました。そして一九六六年四月、一万二〇〇〇坪余、三億一〇〇〇万円余で土地買収が決まりました。

校地の購入は決まりましたが、大学の建設に多額の費用を要したため、中高の校舎建築は二、三年後でないと無理だろうと、教職員の多くが考えていました。ところが、一九六六年四月の理事会で、校舎建築もただちに実施することが決定されました。この理由としては、一九七〇年は日本万国博覧会（大阪万博）の年であり、一九六八年頃にその準備が始まると、建築資材や労賃が急騰するので、それまでに工事を完成した方が有利である、という考えが理事者側にあったためでした。また、経費についても、旧校地売却の代金で、新校地の買収費と建築費は大体賄えるという見通しもありました。

設計は村野・森建設設計事務所に依頼しました。依頼をするにあたって、阿部理事長からは、甲南は由来清楚にして優雅なる伝統と学風を持った学園であり、とくに中高は贅沢なものではなく、中高らしい質素なものにしてもらいたい、と要望しました。また、工事は大林組が担当することになりました。

この校舎を設計するにあたって、中高の教職員の中で組織された校舎建築委員会が中勇育友会会長と二十余名の役員が、阿部幸次郎理事長や山本榮喜校長などに会い、これまでの学園拡充計画を変更して、早急に四年制大学を建設してもらいたいという申し出をしたのです。

これからの女子教育は、四年制大学の時代であり、大学を先に建設しないと、中高の生徒が今後大学進学で困ることになるというのが、育友会側からの要望でした。

こうした保護者の要望を受けた理事者側は、計画を変更せざるを得なくなりました。学園拡充計画は、四年制大学を先に建設する方針に切り替え、まずそれに必要な校地を探すことにしました。その後、甲南女子大学は、一九六四年四月、現在の地で開学しましたが、中高の校舎の拡充は遅れることになりました。

核となり、全教職員の希望や意見を取り入れて計画されたものでした。設計事務所もこの基本的要求を取り入れていきました。そのため、校舎の規模は拡大し、全体の坪数も著しく増大することになりました。

特に、特別教室が膨大になり、国語と数学を除く全教科に特別教室が設置されました。また、その設備も他に類をみない完備されたものとなりました。

教育方針のなかの、「自学創造の学風」と「科学教育の振興」及び「外国語教育と世界精神の強調」が、これまで以上に成果を上げることができるように、新校舎の建設を契機にして、教育施設を充実させることができたのです。

三．移転

一九六八（昭和四三）年四月九日から一二日までの四日間、旧校舎から新校舎へ器具備品の移転作業を行いました。この移転は、一切他の手を借りず、教職員と生徒の力でやろうとするものでした。途中雨が続くなど困難なことが多かったですが、教員も生徒も協力一致して楽しく作業を進めることができました。一二日午後五時半、すべての作業が終了しました。

この作業の様子が、当時の生徒の日記という形式で、『和光』に記載されています。その一部を引用します。

四月九日　移転作業第一日

澄んだ青空を背景にした、白亜の校舎を眼前にしながら、長い急な坂道を一足一足、踏みしめるように登っていく。玄関前まで来ると、背中をさすような暑さがわき起こる。ちょっと疲れる。しかし、待ちに待った新校舎移転がいよいよ始まるのだと思えば、少々の疲れは快いものである。（中略）

六トン積みのトラックが玄関前に到着。皆がどっと周りに集まる。校舎移転第一日目の初仕事である。それぞれに大小様々の荷物を抱え運んでいく。最初は割り当てのようにわかれて作業をしていても、そのうちにだんだんと各クラス入り乱れてくる。これは一つの甲南生の特徴だろう。優しい甲南生は他のクラスが困っている時に、黙って見過ごすことができないからである。リレー作業もわきあいあいと進む。こんな調子で大型トラック、小型トラック、ライトバンなど到着するごとに作業が進んでいった。（『和光』二五号（一九六八年））

四月十日

少し曇っていた空からとうとう雨が降り出した。新校舎に運ばれてきたものをおろす作業に比べて、今まで使い慣れた所から、次々と荷物を積み入れるという作業は、だんだん殺風景になっていく旧校舎を目の前にし、少々寂しい感じがした。

相当の雨の中を、荷物をいっぱいに積んだトラックが動きまわる。雨にびっしょりぬれながらの若い男の先生方の働きぶりは素晴らしかった。私達も皆雨の中で働いた。これをすべて良き思い出となるのだと思いながら。

中身のすっかりなくなってしまった校舎、でもただ一つ和光園だけが今までのすべてのことを知っているかのごとく学園内に静かな落ちつきをはなっていた。（『和光』二五号（一九六八年））

四月十一日

作業が始められてから三日目、先生方も、私達も疲れ気味。しかし、みんなが助けあって、この記念すべき大仕事を続けている。（中略）

旧校舎では、雨の中びしょぬれになりながら、みんな懸命にトラックに荷物を積み込む。山のように荷を積んだトラックは新校舎へ。

新校舎では、待ち構えていた人達によって、山のような荷もあっという間に各教室へ、各部屋へと運ばれる。荷物が運ばれるたびにまだ整備されていないとは言え、だんだんと活気にあふれてくる部屋。自分達がこの部屋で、これから活動をしていくのだと思うと、なんだかファイトがわいてくる。夢がわいてくる。

新しい地に始まる古くて新しい甲南の歴史。その第一ページには、みんなで汗を流したこの移転作業のことが大きく記されるに違いない。（『和光』二五号（一九六八年））

四月十二日　移転作業第四日

今日は、旧中一、旧中二、旧高一、旧高二が新校舎で、人数が比較的多かったので、中一、中二はお掃除の方、高一、高二は机やいす運びなど重労働に回されました。（中略）女生徒ばかりだと兎角力など弱くて重い荷物は運べそうにないように見えますが、全くそれは誤りで皆、一生懸命やっていました。今度の校舎は広いので隠れ場が一杯あって、怠けようと思えばいくらでも怠けられるけれども、やっぱりしんどくても一生懸命手伝えば将来「校舎移転の時はしんどかったけれども良かったわね」ときっと友と楽しく思い出を話せる時が来ると思います。これで私達も念願の新校舎に移る事ができ、甲南の歴史の第二頁が、無事開かれることでしょう。（『和光』二五号（一九六八年））

一九六八年四月一五日、いよいよ新校舎へ移転する日がやってきました。この日は朝から快晴で、校庭の桜はすでに葉桜になっていました。

午前八時三〇分、教職員と生徒は旧校舎に集合し、二〇分間全員で最後の清掃をして、長い間お世話になった校舎を清めました。

午前九時、全員グラウンドに集合しました。当時の同窓会会長をはじめ、多くの同窓生の参列を得て、なつかしい校舎との別れの式が始まりました。

山本校長の挨拶を五十周年記念誌から引用すると、以下のような挨拶でした。

本日、昭和四十三年四月十五日、甲南女子高等学校中学校は、このなつかしの古き校地校舎に別れを告げ、本山町森字山田町の丘の上の新校地校舎に移ります。

顧みれば大正十年十一月二十七日、甲南が此の地に発祥してここに四十有八年、甲南建学の精神はここに根を下ろし、「清く正しく優しく強く」の甲南の校風はここに起りました。

中途二度水と火の災難に遭いましたが、「古川に水絶えず」校運は年と共に栄え不断の発展を遂げてきました。

高等女学校二四回、高等学校二四回、四〇〇〇余の卒業生をここから世におくり、日本の家庭と社会に馥郁たる芳香を放っております。

しかるに校舎も老朽化し校地も狭隘となり施設も不十分なので、世界に雄飛する国運発展の新しい時代を迎え、校地校舎を拡充し施設を充実して、新時代に応じて甲南永遠の発展を図るため、世界を展望する丘の上に新校舎を建てそこに移ることになりました。

六棟の古き校舎よ、和光園よ、桜の花よ、四千の甲南の乙女達を楽しく遊ばせ育ててくれた運動場の土よ、その他もろもろの木や草や花や鳥よ、今去るに及んで無限の感謝を捧げます。

ありがとうございます。さようなら。

我等はこの地に生れ育った甲南の精神と伝統を丘の上の新校地新校舎に移し、甲南永遠の発展に邁進する覚悟であります。どうか見守ってください。

さようなら

ついで同窓会会長と和光会会長池田悦子の挨拶があり、高垣教諭の指揮で一同校舎の方に向きをかえ、声を揃えて「有難うございました。さようなら」の挨拶をして、校舎に別れを告げました。

旧校舎から新校舎への全員徒歩の行列が出発しました。一番先頭には山本榮喜校長、次に校旗を池田和光会会長が掲げ、石田教頭と学校の表札を持った鈴木和光会副会長が続きました。その後ろには、中二を先頭に隊伍を組んで、生徒の列が続々と校門を出て行きました。校門のところでは、近隣の方々や同窓生たちが彼女たちを見送ってくれました。行列の中ほどには、伝統とともに新校地へ移すべく、モッコに入れた土を運ぶ生徒たちもいました。

この移転の日の感想を、池田和光会会長が『和光』に記しています。その一部を引用します。

別れの式が始まった。こんなことぐらいで私は絶対感傷的になりはしまいと変な自信を持っていた。ところが、私が別れのあいさつを述べ始めると何やらそれまでのざわめきがだんだんと静まって、全校生が私のしゃべるつまらぬことば一つ一つを神妙に聞いているように感じられ、自分がしゃべったため明るかったその場の雰囲気をガラッとかえてしまったようで、何か悪いことをしたような気持ちで思わず黙ってしまおうかと思った。しかし今思えばあの瞬間ぐらいであったろう。校舎を見渡し「ああなんてすばらしい学校だろう。

私はここで青春の半分をすごしてきたのだ。あのパーゴラ、講堂、桜…いいなあ」としみじみ思ったのは。

全校生による行進が始まった。校旗を持つのは初めてだったので、最初は旗のことだけが心配であったが、慣れてくると自然と色々なことを考え出した。何というめぐり合わせだろうか。中一のときこののんびりとした道を通りながら、今の甲南を想像したであろうか。

物珍しそうに私達の行進を見守る子供達や、手をふりながらやさしくほほえんでいる近所の人達は、私達がこの地を去るのをどう考えているのだろう。…汗をかきながらあの最後の坂道を登り切った。それまでのもやもやが全部とけ去って、初めて喜びを感じた。いよいよここから第二の甲南の歴史が始まるのだと。（『和光』二五号（一九六八年））

一〇時三〇分、全員が新校舎に到着し、改めて新しく整った校舎を見て生徒たちは驚喜しました。旧校舎の土を新校地のあちこちに撒布して移転の行事を終えました。これは甲南の長い歴史と伝統が新校舎に変わることなく永遠に発展して栄えるようにとの祈りでもありました。

講堂はまだ完成していなかったので、体育館で始業式を行い、この日から甲南の新しい歴史の一頁が始まりました。新校舎はゆったりとして新しく、すべての設備が整って快適でした。先年の大学設立と併せて、戦災以降長く苦しい復興の歴史は幕を閉じ、長年の学園の念願は達成されたのでした。



旧校舎から新校舎へ

第二節　中高の発展

中・高校元教諭　三宅広明

一九二〇（大正九）年に設立された甲南女子学園の前半五〇年については、次のようなことが軸になっていたように思われます。

一九二三年に就任した最初の専任校長であった表甚六によって教育理念の確立と基盤づくりがなされ、理事長安宅彌吉がその理念に賛同し、よく理解して支えたこと。戦後の一九四五（昭和二〇）年に表校長を継いだ校長池田多助が、終戦間際、六月の神戸大空襲による全校舎焼失という学校の存亡にかかわる危機的な状況からの復活再建をはたし、創立の教育理念を再び掲げたこと。また、中高を卒業した生徒が続けて学ぶ場所としての短期大学を設立したこと。そしてその次の校長山本榮喜が、甲南女子大学を設立し、中高の移転を実現するなど学園の充実をはかり、ここでも表校長以来の教育理念をくり返し語り続けたこと。

この三人の校長による教育に対する深い見識と熱い思いが、「甲南精神」ともいわれる今日に続く本学園の基本理念をつくりあげ確立してきたといえます。この章では、現在の場所に校舎が移転してからしばらくしての一九七〇年から阪神・淡路大震災のおこった一九九五年までを中高の発展期としてとらえます。

一．甲南の展望

山本榮喜校長は、一九六八（昭和四三）年の校舎移転を目前にして、これからの「甲南の展望」について述べています。まず生徒には、「世界に眼をひらけ」と呼びかけます。新校舎からの見晴らしは素晴らしいが、あなたたちが見なければならないのは「時々に移り変り行く世界の情勢と日本の運命、人類の幸福についてである。人類を広く理解するために、たんに英語だけでなく、その他の外国語の学習も必要となるときが来るであろう」といいます。社会の変化によって女性のあり方も変わってきていて、「今後、家庭の主婦は他人を当てにして過ごすことはできないであろう。貧富に拘わらず、自らの家庭や生活を支えるものは自分であり、自己の健康で有能な心身である」。だから、「この度の学校移転を契機として、甲南の教育はこの厳しい現実を直視し、その厳しい現実に生き抜く教育に徹しなければならない」と訴えるのです。

身体を鍛え、授業に真剣に取り組み、一層の知的向上を図らなければなりません。「そのために素晴らしい体育館、広い運動場その他の運動施設が完備された」のであり、「国語と数学を除く全教科に特別教室が設けられ、その設備もおそらく他に類例をみない完備したものが造られた」のです。また、甲南のバックボーンは和光会であり、「新校舎は和光会の本部を始め、文化運動の各部の部室をすべて用意し、その飛躍的発展に備えている」と述べ、新校舎建設による教育環境の整備により、「甲南建学の精神」と「甲南伝統の優雅な気品とたくましい心身を兼備する」女性を育てる教育を実現することを訴えています。このとき、次の言葉が印象的です。

最も大事なことは教職員の協力一致である。新校舎は、前に述べたように、全教職員の協力一致によって出来たものである。それを私は甲南の教育上極めて意義深いものと思い、今後の甲南の発展の原動力となることを固く信じている。（『和光』二四号　一九六七年）

つまり、校舎移転は、場所の選定、土地買収から校舎の設計まで、理事会が独断で行ったのではなく、「教職員で組織された校舎建設委員会が中核となり、全教科、全教職員の希望や意見を余すところ

なく取り入れて計画されたもの」であったということを強調しているのです。表校長のときには、校長の意図がまずあって、さまざまな教育理念が実現されていったのが、戦後二〇年を経て、教職員の委員会による話し合いが校舎移転という大きな事業に際しても尊重されるようになり、それが「甲南の発展の原動力になる」と考えているのです。これは、甲南創設から続く穏やかなリベラリズムの伝統と、戦後の民主主義的な理念がうまく結びついたことを示すことがらです。

また、甲南女子大学の学長でもあった山本栄喜校長は、中高が新校舎に移転した年に、総合学園としての甲南女子学園の将来の発展のために、考え、努力すべきこととして中高と大学の関係について、「唇歯輔車（しんしほしゃ）」の関係が大切だと、これも『和光』を通じて生徒たちに語りかけています。

第一に、中高と大学とは唇歯輔車の関係にあることを忘れないことである。唇歯とは中国の春秋左伝にある「唇亡歯寒」という語句から来た言葉で、くちびると歯のように、互いに利害関係の密接なことの謂であり、輔車とは、やはり左伝から出た言葉で、輔は頬骨、車は歯齦の意で、相互の利害関係が最も密接で一方が亡びれば他方も立ちゆかぬような関係をいうのである。したがって甲南の中高と大学は唇歯輔車の関係にあるということである。

（中略）

現在までのところ昔の高女時代から、ここ二十年の中高の名声の上に甲南女子大学は発展している。中高の伝統の上に大学の学風が築かれていると見ることができよう。反対に、大学が良くなれば中高は一層良くなり、大学が悪くなれば、中高の名声も次第に落ち、昔日の甲南でなくなることもあり得るということを、中高の生徒たちにも先生方にもよく考えてもらいたい。（「清和の集い」『和光』二五号 一九六八年）

大学を設立して、中高の校舎を移転するという総合学園としての基盤が整った時期に、中高と大学が同じ学園として仲良く相携え、人格主義、創造主義という学園の伝統をよく継承して、甲南独自の学風の発展を図ることがもっとも肝要であると未来を語っています。そして中高の充実について、校長を退任して二年後、創立五〇周年にあたる一九七〇年に、学園発展への誇りといささかの懸念を込めて次のように述べています。

「甲南には、人物本位で、甲南らしい立派な人柄の生徒が入学し、甲南精神を身につけ、甲南の伝統を受け継いで、今日の発展をもたらしたものと信じている。」「人物第一主義で選んで入学させた生徒たちだが、入学後大変まじめに勉強して学業成績も優秀になったといわれている。」「しかしこの知的向上はあくまで甲南の人物第一主義、全人教育の精神の中における知的向上であった。勉学さえできればよいというものでは絶対にない。」「予備校などに通って受験勉強をするものがあるようだが、この傾向が増大すると甲南生の気風も自ずから変わり、人物第一主義を標榜してきた甲南もやがて看板を下ろさねばならないことになりはしないかを憂える。」（「甲南を永遠に興すもの」『和光』二七号 一九七〇年）

二．理念の継承

これ以後の校長は、山本校長が示した甲南の理念にそって学校運営を行ったように思えます。大阪府立高津高校の校長から赴任した第六代校長の有光募は、創立五〇周年記念式で次のように述べています。

まず素晴らしき環境に心を打たれた。「環境は人をつくる」といわれ、完備した施設、設備、これらは日本一か、然らずんば日本一流の学校に伍するものと確信し、これで教育の成果は十二分に期待できると思った。（中略）

「まことの人間をつくる」の建学の精神、「清く、正しく、やさしく、強く」の校訓は、普遍の教育理念として、今もなお脈々として教職員、学生、生徒の胸中に生き、日々の学園生活の指針、原動力となっている。

そして、甲南の教育の核心は人格の育成であるとして、次のように語ります。

今日の時代が一人ひとりの人間によっていっそう自主的、自律的に生きる力をもつことを要求しつつある。そのような力は、いろいろな知識、技術を修得することだけから生まれるものではなく、さまざまな資質・能力を統合する主体としての人格の育成に俟たなければならない。そのための教育がめざすべき目標は、自主的に充実した生活を営む能力、実践的な社会性と創造的な課題解決の能力とを備えた健康でたくましい人間でなければならない。（『和光』二七号一九七〇年）

第七代の中高の校長を務めた鯵坂二夫は、女子大学の第二代の学長でもありました。京都大学教育学部教授を経て本学園に赴任した鯵坂は、ペスタロッチ、ルソー、デューイなどの紹介者として知られていましたが、彼らの教育思想は、外から教え込むより自ら学ぶことを重視するものであり、鯵坂の教育観もそのようなものでありました。つまり押しつけではなく、ひとりひとりの個性を大切にして、それぞれの能力を伸ばす教育を目標としていました。

鯵坂は、学長として大学の拡充につとめながら文部省の教育課程審議会副会長（一九七三～七五）を務めるなど多方面で活躍しています。その多忙のなか鯵坂は、毎週の講堂朝礼では、本を読むこと、内村鑑三など尊敬する人物のこと、母のことなどについて生徒に語りかけています。

第八代校長の三輪和敏は、神戸大学付属明石中学の校長を務めたのち甲南に赴任して、「建学の精神と教育方針とについて非常な驚きと感動を覚えた」と述べています。それは、彼が旧制中学生だったころ大正デモクラシーが開花して、自由の精神を基調にした教育が盛んになっていたのが、この学校ではその理念が現在も生きていると感じられたからです。

わたしは本学園でのさまざまな教育活動、そして和光会の諸君たちの活発なスポーツ活動や文化活動を見るとき、遠く五十年昔のわが国の教育理想が、まさに今日わが学園で開花していることに大きな喜びをおぼえないではおられない。同時に「全人教育・個性尊重・自学創造」といった本学園創立期の精神が、よくぞ、あのいまわしい軍国主義、全体主義の教育思潮のなかに埋没することなく、立派に生き続けて今日に至ったものと、本校の根強い伝統の力と、それを守り続けてきた先輩諸氏の努力と精進とに頭の下がる思いである。（『和光』三六号一九七九年）

しかし、この理念が日々の教育実践のなかに本当に生きているか、ということについては心配する声もありました。当時長く教頭として中高の教育実務を担当した鹿間春一郎は次のように述べています。

私が経験させてもらった甲南の最近の二十年余りの間は、全く順調そのものであった。まず大学の設立、ついで中高校舎建設、そして移転、内部の設備充実とともに諸制度の整備などの輝かしい歴史がある。だから昭和二十年代にあちらこちらと甲南と縁故のあるところで校舎を借りて授業し、「私たちの校舎が欲しい」と希求した当時の生徒たちの気持ちや、また昭和三十年代の、プールがなくて水泳ができない、体育館がないので、雨の日は部活動ができない、という生徒たちの嘆きも今や理解できない状態となった。（中略）

そうした物的なものの充実による安堵の気持ちの故か、最近の甲南には燃えるようなものが感じられない。私の甲南にかかわる二十年の歳月は、甲南の全歴史の三分の一を占めることになってしまって、その間を通した傾向として、だんだん意気込みとか、熱気とかいうものが無くなって行く感が深い。抵抗がなければ発熱がない、というのが電気の通性であるが、我々もそれに似ているのであろうか。長い困難の時代に、苦心して作り上げられた伝統が、今の時代に生きて働いていないきらいがある。

（「伝統」『和光』三七号　一九八一年）

学校の様子が現状維持、惰性に流れるようになってきていて、これまで困難な状況の中でこそ力を合わせて苦心して大切につみ重ねてきた努力、想いによって育まれた甲南の伝統に対する自覚が稀薄になってきているのではないか、「よい伝統をいかすためにはそれ相当の工夫と努力が必要」であり、「伝統はそれをさらに立派なものとし、改善されるためにあるのであって、その上に安座するためにあるのではない」といっています。おそらく三輪の見たように甲南の理念は生きていたのでしょう。しかし同時に、鹿間の感じる懸念もその中に胚胎してきていたのではないでしょうか。

そのような中で、一九八〇（昭和五五）年創立六〇周年の年に第九代校長に就任した本野亨一は、生徒とのふれあいを楽しみながら、一〇代の生徒に語りかけることを、校長としてというより、大人の責任として大切にしていたように思われます。毎回の講堂朝礼や式典の言葉はていねいに練りあげられていて、静かに生徒たちに語りかけられました。カフカの翻訳と紹介をしたドイツ文学者だけあって、その語りは魅力的で、退任後、教職員が中心になって「朝礼訓話と式辞集――『十代』へのあるコミュニケーションの経験」という冊子にまとめています。この本の朝礼訓話の内容は大きく分けて四つ、「戦争と平和」「ユーモアについて」「一隅を照らす」「文集とともに」であり、式辞は入学式と卒業式のものをまとめたものでした。本野は、毎年学年でまとめられる文集、生徒会の『和光』、新聞部の『清鏡』を読むこと、そして学校行事に参加することを大切にしていて、それを通して考えたことを朝礼や各学期の始業式、終業式、入学式、卒業式で生徒に直接語りかけていきました。その中で、繰り返し「自由と規律」について語っているのが注目されます。甲南のおおらかな雰囲気を楽しみながら、同時に鹿間の懸念していた空気も感じながら、学校という集団のなかの「自由と規律」について語ることで、当時の甲南の生徒に矜持と自省をうながしていたように思われます。本野は、ゲーテの「タッソー」を使って生徒に話しかけています。一六世紀のイタリアで宮廷に召し抱えられている詩人タッソーが、政治優先の宮廷社会では、芸術家の尊厳と孤高が通用しないと煩悶していたのですが、それを理解する領主の妹レオノーレとの会話。

タッソーはレオノーレに訴える――自然の鳥たち、けだものたちに、目を向けてください。かれらは、心のままに行動して、充ち足りています。かれらは鳥にむかって歌う、「私たちがしたいと思うことは、すべて許されているのです」と。しかし、人間がさわやかに自由をたたえることの出来る黄金時代は、もう失われています。しかし、尊敬と共感をこめてレオノーレは反論する――失われてはいません。心の通い合う宮廷の人たちは、自然の生きものたちと同じように、世界のたのしみをわかち合っています。ただし、その唄はかれらとはひと言だけちがうのです。「私たちにふさわしいことであれば、すべて許されているのです」

共同体の規律をふまえ、「私たちにふさわしいこと」を希う心にこそ、ほんとうの自由が生まれる、と十六世紀イタリアの宮廷人レオノーレは言う。生徒たちのもとめる自由は、芸術家の自由ではないのだが、レオノーレの誠実な反論は、二十世紀の学校という集団でも生きてくるだろう。（「自由と規律」『和光』四〇号一九八三年）

この話は、退任する最後の卒業式（一九八五年）の式辞でも再び取り上げています。本野は、学校生活の自由と規律について考えるとき、いつもこの二人の対話がごく身近に蘇ってきて、レオノーレの「規律にふさわしい自由とは、それでいいのですか。もう一度考えなおしてみては？」という誠実なうながしの声が聞こえてくるといいます。卒業生にはこのような「うながし」の声に触れることを期待する、というのが送る言葉でした。本野にとって、教育とは生徒一人ひとりに「うながし」の声が響きあうような経験を与えることであり、学校とはそのような声が充溢する場所でありたいと考えていました。

第一〇代校長の宮城宏は、後に女子大の学長に就任した社会学者でしたが、平等院の住職も務めていました。学年遠足で生徒が平等院に行く時には、袈裟をつけて案内してくれたものです。家族社会学が専門で、中国への関心が深く、中高を含む学園として中国との交流に努めました。天津外語大学からの教員の留学生には高校の選択中国語の授業を担当してもらっていました。講堂朝礼では、中国やパキスタンに研究調査に行った時の話など、自分が経験して感じたことを自然な調子で生徒に語りかけていました。教訓を語るのではなく、教養を身につけることの意味を生徒に感じさせるような話を大切にしていたように思います。

第一一代校長の井野辰男は、兵庫県の教育長を務めた人でしたが、話し合いを大切にするデモクラットであり、職員会議の議論を尊重していました。創立七〇周年を記念して、戦前からすべての第二校歌のCDと歌詞の冊子をつくることになったとき、戦時中の歌詞に、好戦的でふさわしくない言葉があるのをどうするか、という議論になったことがあります。そのとき教職員の意見を十分聞いたうえで、現在の価値観で過去を修正するのはよくない、と歌詞はすべてそのまま記録、録音するように判断しました。また元号が昭和から平成に変わったとき、世界のなかの日本という国際教育の観点から、学校では基本的に西暦を使うことを話し合いの中で申し合わせました。

井野は着任したとき、生徒の様子について大きな危機感をもっていました。講堂朝礼の聖座は見事に静寂の中で行われているけれど、「聖座が終わるや否や生徒のざわめきや私語があちこちで始まり教師が注意して廻る光景が展開する」。これを腹立たしく、情けなく思い、「これは一体どういうことなのか。生徒たちの幼少期からの躾に問題があるのか、本校の指導方針や指導体制に欠陥があるのか。

本校の伝統として今日に伝わる訓育そのものが形骸化してしまって、実は形式だけを受け継いでいるのか」と嘆息しています（『七十年の歩み』）。これは、鹿間が懸念していた緊張感の薄れた惰性によって、問題が顕在化してきていたということでしょう。たしかにこの頃、生徒のおしゃべりやわがままな振舞いが目立ち、生徒指導に教職員がふりまわされるという、それまで本校ではあまり経験しなかったようなこともおこってきました。

一九九〇年代を通して学校で起こったこのあたりの混乱は、本校だけの問題として考えることはできません。このような状況は、日本社会の大きな変動が、本校の全人教育・個性尊重・自学創造という教育理念の価値観を試す事態となったともいえます。つまり、一九八〇年代後半からのバブル経済と一九九〇年代に入ってからのその破綻による長く続く不況により、人間教育を標榜する価値観よりも現実の厳しい経済状況を生き抜くための進学教育のほうがより強く求められる状況がうまれ、その中で生徒が無意識のいらだちにとらわれるようになったのではないでしょうか。大学で、教養教育（リベラルアーツ）よりも就職に役立つ実務教育が求められるようになるという社会意識の変化が、中高の場合は、教育理念よりも有名大学への進学実績が学校の評価につながるという現実的な問題となってきたといえます。学校が、一〇代の青年期の少女たちの人間的な成長の場所としてよりも、大学受験のトレーニングの場所として求められる空気が強くなってきたことの反映ともいえるでしょう。社会の中に成長を見守る「ゆとり」が失われてきたともいえます。その「ゆとり」のなさが落ちこぼれをふやし、成績はいいけれど真の学力が定着しないという危機感が文科省の中に生まれて、学習指導要領のなかで「ゆとり」教育が強調されたのですが、その理念を社会の方が受け入れる「ゆとり」がなかったということでしょう。一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて「ゆとり」教育の評判が悪く、大学受験を第一の目的にする学校や塾や予備校がふえ、受験産業が巨大化して学校教育の中に浸透していくのも当時の社会状況の反映とも考えられます。

ところが本校の教育理念は、創設以来「清く、正しく、やさしく、強く」の校訓に見られるように、「ゆとり」のある上品な女性を育てるというところをめざしていたので、この時代の社会が求める現実的な教育観とは少しずれが生じていたと考えられなくもありません。本校としても、本来の教育理念が日常の教育活動のなかに生きていたかどうかが問われる事態になっていたということができるでしょう。

ただし、井野の感じた学校の「情けない」状況は次第に収まり二〇〇〇（平成一二）年頃からは、講堂朝礼やホームルーム、そのほかの学校行事は穏やかで集中した静寂の中で進められるようになっていきました。一九九五年の阪神・淡路大震災による物理的、心理的な衝撃や、教職員のこのままではいけないという危機感の共有から、のんびりした学校の雰囲気が変わっていったということができるでしょう。一九九〇年頃までは、学校は人間として大切なことを学ぶ場であって、進学などは自分で準備すればいいといった空気が学校のなかにあったのは確かです。では、われわれはこれまで本校の教育理念を日々の教育活動のなかで実現できていたといえるのか、あるいは直接的な受験指導ではないにしても、進学を希望する生徒の意欲に応える授業を日々行ってきていたといえるのか、という反省を込めた問いが生まれてきて、それがその後の学校改革につながっていくのです。学校改革については後述しますが、「抵抗がなければ発熱はない」という鹿間の言葉が思いだされます。

ところで、井野の就任当初の嘆息は、失望として彼のなかにずっと続いたわけではありません。一人ひとりの生徒のもつ穏やかで素直な人柄とふれあう中で、甲南本来の校風が生きてくると、ほかの学校にはない自由でのびのびとした独自な学校になるだろうという希望を述べているのです。創立七〇周年にあたって、三〇年後の創立一〇〇周年にこの学校はどうなっているか、と予想している文章です。

三〇年先の甲南女子校は現在以上に入学困難校になっていると思う。それは大学への有名進学校であるためではない。自由で伸び伸びとした雰囲気、自律の精神と友愛の情に満ちた校風のもとで、本当の意味での全人教育が行われている学校として天下に名を馳せているためである。

昨年増築された校舎以外はすべて瀟洒な校舎に建て替えられているだろう。国の助成金が抑制されているため、経営上一学年は今と同様一八〇名と変わらないが、一クラスの人数は三〇名になり、一学年六クラス編成となる。何年か先の校舎改築はこの計画に基づいて行われる。プールは新体育館の最上階にあり、ソーラーシステム方式で冬季でも温水プールとして使用可能である。食堂は現在のプールのある場所まで含めて広々とした部屋になる。どっしりとした円形テーブルと背もたれのある椅子が配置されゆっくりと食事を楽しむことが出来るだろう。運動場も根本的に改修され雨がやめば一時間後には使える。

学校は週五日制になっており、土曜、日曜は休みである。しかしボランティア活動は重要な教育活動の一つで、週一回誰もが社会奉仕にさわやかな汗を流す。更に欧米の諸国と同様に九月に入学し六月末日に卒業する。二か月半の長い夏休み中に入学試験や就職試験が行われる。又学校で学習する外国語は多様化し、六年間のうち一年ぐらいは約半数の生徒がいろいろな国へ留学しているだろう。生徒の特性や個性を最大限に伸ばせる学校―それが甲南女子校の未来像なのである。（「創立百周年に想う――甲南女子校の未来像」『和光』第四七号一九九一年）

現在からみると、あたっていることとそうでないことがありますが、井野の教育観がよく表れているといえそうです。

第一二代校長の片山亨が就任した年度の一九九五年一月一七日に阪神・淡路大震災が起こり、学校はたいへんな混乱に陥りましたが、震災については別なところにまとめられています。片山は、中高の教育について次のように述べています。

私は教育の第一義は豊かな心を育てることだと思っています。特に中学・高校時代というのは人生の中で最も感受性が鋭い時期で、まるで海綿体が水を吸収するように様々なものを吸収する時期です。この時期に知識を吸収するとともに柔軟な心、豊かな感性を育てることが最も大切なことだと思います。それには音楽や美術に接して感動する心を養うこと、すぐれた作品を読んで自分を高めてゆくことでしょう。その根本は皆さん一人ひとりが熱中できるものを見つけ、よりよい自分になろうとする内発性です。それを期待します。（「豊かな心を育てよう」『和光』第五一号一九九五年）

簡素な生活をすること。それには必ず自分で自分を律する自制心をもつことが必要です。本校の方針である〝全人教育〟とは自立した心の豊かな人間を育成することにあります。自由には必ず責任

が伴うことを自覚し、より高い人格を形成してゆくこと、〝清く、正しく、やさしく、つよく〟の校訓はそのための心の持ち方を示したものです。しっかり勉強をしよう。そして考えることを通じて知性を磨き、礼儀を重んじ、簡素で清潔な生活をすること、そこから甲南精神は生まれてくる。（「簡素な生活を」『和光』第五四号一九九八年）

豊かな心を育て全人教育による人格形成をめざすという理念を語りながら、「しっかり勉強をしよう」と訴えて、そこから甲南精神は生まれてくるのだと語りかけています。これまでしっかり勉強をすることなどはあたりまえと考えられていたためか、このような語りかけを校長が行うことはあまりありませんでした。それだけ当時は、学力をつけること、知性を磨くこと、礼儀を重んずることが本校の重要な課題と考えられていたのだと思われます。

第三節　阪神・淡路大震災と中高

中・高校教諭　林正規

一九九五（平成七）年一月一七日午前五時四六分、兵庫県の淡路島北部沖を震源とした直下型大地震が阪神地域を襲いました。

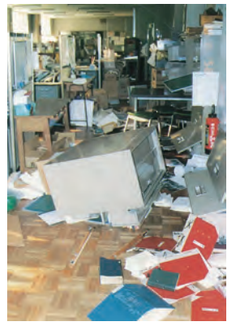
本校にとっては、一九三八（昭和一三）年七月の阪神大水害、一九四五年三月および六月の神戸阪神大空襲に続く大きな災害となりました。生徒およびその家族に一人の犠牲者も出なかったことは、奇跡的であり、本当に幸いなことでした。また、本校校地の地盤がしっかりしていたことで、校舎が倒壊するといった大きな被害がなかったことも本校にとっては、幸運なことでした。

この未曾有の災害に際して、生徒や教職員は協力して復旧にあたり、積極的にボランティアに参加したりするなど、大きな経験と学びを得ることもありました。震災から二五年というこの機会に、当時の被害などの状況や生徒、教職員の行動を記載し、その思いを残しておきたいと思います。

一．震災当日（一月一七日）の状況

事務室鮫島さん、森（満）さん、高垣副教頭が、午前中に登校し、被害状況を確認されました。

第二特別棟の周辺で地面の陥没、隆起、沈下、ずれなどがあり、各校舎にも亀裂や一部窓ガラスの破損などがありましたが、校舎自体はすべて倒壊を免れました。電気はすぐに復旧しましたが、都市ガス・水道については長い間復旧しませんでした。（詳細は、甲南女子中・高等学校『阪神大震災の記録』に記載）


職員室


体育館が避難所に

登校した鮫島さん、森（満）さん、高垣副教頭がひっきりなしにかかってくる電話に対応、「学校はどうなるのか」「授業はどうなるのか」という問いに、「学校から連絡があるまで自宅待機」と答えることしかできませんでした。

本校は神戸市から災害時の避難所として指定されていたこともあり、昼頃には本校山側の森北町七丁目からの避難者二〇数名と本校家庭科龍野先生（近くに借りていた部屋が倒壊）が避難してきていました。その後、時間とともに避難者が増え、一〇〇名を超える状況になっていきました。保健室の布団・毛布などの寝具はすべて避難者に提供しました。

二．震災から生徒登校前日（一月三一日）まで

震災翌日の一八日には、片山校長が登校され、生徒の自宅待機、一月二〇日午前一一時に部長会（現在の校務運営委員会にあたるもので、管理職と三部長の会議）、午後一時から職員会議を行うと指示をされました。

一九日には原口教頭をはじめ、近隣に住む教職員約一〇名が登校し、電話対応や避難者の対応などが分担して行えるようになってきました。

二〇日の部長会には片山校長以下三名、職員会議には校長以下一五名の教員が参加しました。ここでは、生徒および保護者の安否確認をすること、中学入試（当初二月実施予定）を変更し、三月一日に延期、試験会場を三カ所（本校・宝塚・明石）で実施すること、および地震対策教職員組織の編成を行いました。震災から四日目にしてようやく学校として組織的な活動が始まりました。

二五日には生徒全員、保護者全員の無事を確認することができ、電話対応をしていた事務室の教職員には、安堵の声が広がりました。

二六日に震災後二回目の部長会、職員会議（三八名出席六名欠席）が開かれ、一月三一日の職員会議、二月一日一一時の生徒登校が決定、震災対応教職員組織の再編成（避難者対応・保健室係・渉外連絡係・復旧作業係・電話受付・機械用度係）が行われました。また、この日には当時の和光会会長の厚美氏が友人数名とともに登校し、生徒による復旧や避難所のボランティアを申し出てきました。

当時非常勤講師だった社会科の森（未）教諭とともに積極的に活動してくれました。ボランティアに参加する生徒は日に日に増え、中には避難者とともに体育館に泊まりがけで活動する生徒も出てきました。この震災は、日本に「ボランティア」という言葉が一般的になるきっかけになりましたが、私たち生徒や教職員にとっても日常の学習や教育活動とは異なる経験をすることで、「人のために活動する」ということのやりがいやうれしさを強く感じることができました。

二七日から三〇日は生徒の登校に向けて、校内の復旧作業が本格化しました。二九日には戸棚類の引き起こし作業は完了し、下足室で散乱している上靴の整理など、着々と生徒の登校に向けた準備が整っていきました。

三一日には、翌日の生徒登校に向けて、午前一〇時から部長会、午後一時から職員会議が開かれました。乗降駅・通学路での指導（ＪＲ芦屋・神戸・新神戸・阪神芦屋・阪急西宮北口・三宮の各駅など）、二月二日・三日の復旧作業（生徒にもボランティアを依頼）、二月六日以降の授業再開（この時点では一週目は四五分の授業を午前中に二コマ、翌週からは午前・午後に二コマずつと決定し、二月三日に変更）、生徒の服装（私服・リュックの使用も認める）、高三卒業式関連事項（三月一一日実施、二学期までの成績で卒業認定）、中学入試、学年末考査などについて決めました。三一日の午後、待ちに待った水道が復旧しました。飲料水の確保ができるようになったこと、水洗トイレの使用が可能になったことは、生徒の登校・授業再開に向けて大きな前進になりました。

三．二月一日生徒登校から授業再開へ

二月一日午前一一時、多数の生徒が登校し互いの無事と再会を喜び合いました。この日の生徒登校数は六四九名で、高校三年生を除くと出席


本を整理する生徒

～ＪＲ神戸駅～森北町二台、新神戸駅～森北町一台（その後交通状況の復旧に合わせて経路変更を重ね、三月末まで延べ六〇便）を運行し、生徒を輸送しました。

二月の寒い時期でしたが、保護者から石油ストーブ五〇台の寄贈があり、各教室に二台ずつ設置することができました。また、当時のスチーム式の校内暖房は都市ガスが止まっていたため重油に点火できず使用できませんでしたが、技術担当者の工夫で、プロパンガスを使って重油の点火に成功し、八日からはすべての校内暖房が復旧し、授業環境の改善ができました。

二月一六日の職員会議で、高校三年生の卒業式を三月一一日に挙行すること、学年末考査は三月一七日～二二日、中学校卒業式・三学期終業式は三月三一日に行うことにしました。また、授業日も三月は四日～一六日で、月曜日を休日とする週五日制にしました。

二月に入ってからは、交通状況が急速に回復し、二月八日にＪＲ芦屋―住吉間、一三日に阪急王子公園―御影間、二〇日にＪＲ住吉―神戸間が開通しました。日を追って生徒の登校者数が増え、二月二三日には八七二名（九五・二％）に達し、次第に日常が戻ってきていると感じました。

四．中学校入学試験について

一九九五（平成七）年度の中学校入学試験はこの年から一カ月早めて二月一日・二日（前年までは三月一日・二日）に実施することになっていました。この年の出願は、震災前の時点で二五五名の出願があり、一月二〇日が締め切りになっていました。しかし、一月一七日の震災のため、全ての面で変更を余儀なくされました。

本校では、一月二〇日に他校に先駆けて入試日程の三月一日への変更を決めました。一週間後、私学連合会でも調整が行われ、兵庫県は統一しとになりました。

二日と三日は、近隣で登校可能な生徒たちに手伝ってもらい、校舎の至る所に散乱している器具や書籍などの片付けをしました。多くの生徒が自発的・自主的に登校して手伝ってくれましたので、予定より短い時間で作業が終わりました。生徒たちの愛校心、ボランティア精神を強く感じた二日間でした。

三日に再度臨時職員会議を開き、登校の不便さを考え、基本的に隔日での登校とし、登校した日は午前・午後二時間ずつ、各四〇分の授業を行うこと、月曜の電車の混雑のひどさから登校日は火・木・土の三日間にしました。

二月六日には七六一名（八三％）の生徒が登校しました。やはり西方面からの登校は困難な状況でしたので、一一日に「神戸市北区」「神戸市西区」「神戸市中央区以西、明石・加古川方面」の三地区で保護者との懇談会を開き、一四日より大型バスをチャーターして、地下鉄板宿駅～ＪＲ神戸駅～森北町一台、新神戸駅～森北町一台（その後交通状況の復旧に合わせて経路変更を重ね、三月末まで延べ六〇便）を運行し、生徒を輸送しました。

二月の寒い時期でしたが、保護者から石油ストーブ五〇台の寄贈があり、各教室に二台ずつ設置することができました。また、当時のスチーム式の校内暖房は都市ガスが止まっていたため重油に点火できず使用できませんでしたが、技術担当者の工夫で、プロパンガスを使って重油の点火に成功し、八日からはすべての校内暖房が復旧し、授業環境の改善ができました。

二月一六日の職員会議で、高校三年生の卒業式を三月一一日に挙行すること、学年末考査は三月一七日～二二日、中学校卒業式・三学期終業式は三月三一日に行うことにしました。また、授業日も三月は四日～一六日で、月曜日を休日とする週五日制にしました。

二月に入ってからは、交通状況が急速に回復し、二月八日にＪＲ芦屋―住吉間、一三日に阪急王子公園―御影間、二〇日にＪＲ住吉―神戸間が開通しました。日を追って生徒の登校者数が増え、二月二三日には八七二名（九五・二％）に達し、次第に日常が戻ってきていると感じました。

四．中学校入学試験について

一九九五（平成七）年度の中学校入学試験はこの年から一カ月早めて二月一日・二日（前年までは三月一日・二日）に実施することになっていました。この年の出願は、震災前の時点で二五五名の出願があり、一月二〇日が締め切りになっていました。しかし、一月一七日の震災のため、全ての面で変更を余儀なくされました。

本校では、一月二〇日に他校に先駆けて入試日程の三月一日への変更を決めました。一週間後、私学連合会でも調整が行われ、兵庫県は統一して三月一日に延期されることになりました。また、出願期間も一月三一日まで延長し、郵送でも受け付けることにしました。

試験会場も、当時の交通事情の中で、全員が本校に集まって試験を受けることは難しいことが予想されましたので、三会場に分散実施（本校・宝塚ホテル・明石グリーンヒルホテル）することにしました。また、二日間実施（一日目：国語六〇分・社会四〇分・理科四〇分、二日目：算数六〇分・その後面接）していたものを、国語・算数を一〇分ずつ短縮し、面接を取りやめました。

最終的な出願者は三八四名（本校会場一三七名、宝塚会場一九九名、明石会場四八名）でした。その中には震災の犠牲になったり、被災のため受験を断念したりするものがあり、震災の大きな影響がありました。また大阪と時期がずれたため、すでに他校に進学を決め受験しないものもあり、当日の受験生は二九五名となりました。三会場に分かれたことで、各会場の下見、会場設営、当日の役割分担、当時普及し始めていた携帯電話の利用など様々な工夫をしましたが、入試当日は春めいた穏やかな日で、特に事故もなく例年と同じような入試風景になりました。

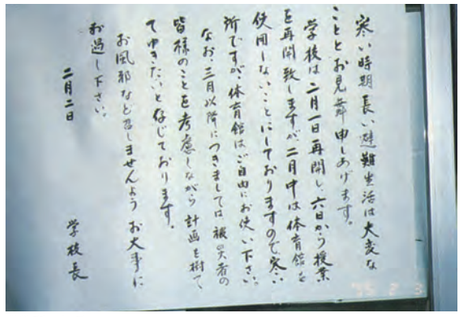
合格発表は三月三日に本校で行い、四日に合格者登校日が行われ、無事に入学者を決定することができました。ここでも、教職員の様々な工夫と協力が実を結んだと感じました。

五．避難所対応について

震災当日に一〇〇名を超えた本校への避難者は、翌一八日朝には約二〇〇名になっていました。その後、深江のＬＰガスタンクにひびが入り国道二号線より南側に避難命令が出たこともあり、一八日夕方には四〇〇名を超え、一九日には約五〇〇名に増え、体育館・ダンス室がほぼ一杯の状況になりました。二〇日には二四〇名に減り、その後はしばらくこの程度の人数が避難されていました。

一八日には事務室の鮫島さん、龍野先生が対応し、トイレを流す水にプールの水を使用することや、体育館での禁煙などのルールが決められていきました。飲み水については、明石方面に住まれていた伊藤先生と殿浦先生が軽トラックに三〇〇リットルの水を積み、持ってこられました。まだ救援物資も何も届かない状況の中で届けられた飲料水は、四〇〇名を超える避難者の方にとても感謝されました。

一九日からは、本校の教職員が分担を決めて対応する状況になりました。給水や食料の配付などに始まり、その後必要な物資も、生活用品などさまざまなニーズに協力して対応しました。残念なことに本校の避難所が行政からもしっかり認識されていない期間が一週間程度あり、給水は水道局へ電話しその都度自衛隊の給水車などに来てもらう、食料も不規則にしか届かないので、近くの本山第三小学校に取りに行くなどの作業に追


避難所の掲示


避難者との親睦パーティー

われました。ただ、この間の教職員やボランティアに来た生徒たちの表情が疲れていながらも生き生きしていたのが印象的でした。

避難されている方と教職員・生徒は、さまざまな工夫をしてこの事態に対処しました。トイレ対策では、避難者のリーダーが、トイレに水の流し方やトイレットペーパーの捨て方の注意事項を書いた紙を貼ったり、ボランティアとして体育館に宿泊していた生徒が体育館の寒さを訴えると、発泡スチロールの板を体育館の壁に立てたりするなどしました。また、避難者の方と教職員とで親善ソフトボール大会や、バーベキューパーティーを開催したりしました。これらのことによって、「甲南女子は他の避難所に比べるとはるかに素敵だ」と喜んでいただきました。

震災から一カ月が過ぎる頃になると、避難者の方もそれぞれがそれからの生活のことを具体的に考えられるようになり、落ち着いた日々が続くようになりました。この頃には、高校一年生の生徒や卒業生が何回か炊き出しをしてくれるということもありました。

二月に入ってから、避難者の間で何回か会合がもたれ、二月一四日には、「自立の道を考える」ということで、次の三つの方針が出されました。

① この時点で生活するあてのないものを除き、二月末までに避難所を出る（八家族程度になる予定）。

② 避難所を、体育館から多目的ホールに移す。

③ 二月末をもって基本的には救援物資をもらわない（必要とされる方には別途希望をとる）。多目的ホールに残るものは、自炊する（多目的ホールから外に出たところに、簡易の台所、洗濯機などを配置しました）。

救援物資については、学校でこの後も継続して受け取りたいと申し込みをされた方が約五〇名おられました。これも、約一カ月続いた後、取りに来られている方で話し合いが行われ、四月には終了しました。

避難所に残られた方も、四月に入ると次々に住むところを探され、五月四日には、本校の避難所も閉じることになりました。

この震災で悲惨なこともたくさんありましたが、近隣の方と直接ふれ合う機会になり、学校が地域の方により親近感を持って受け入れられるきっかけになったと感じました。

六．日常を取り戻すまで

混乱した一九九四（平成六）年度が三月三一日に終了し、一九九五年度が始まりました。

三月一二日に阪急三宮―王子公園間、四月一日に阪急夙川―岡本間およびＪＲ全線が開通し、かなり交通事情は改善しました。当時はまだ甲南山手駅がなかったので、ＪＲ芦屋駅または摂津本山駅から徒歩で通学する生徒が多数でした。

交通事情の好転に伴い、四月は始業を一時間遅れ（九時二〇分登校）にしたものの、震災前からの予定通り四月八日に一学期始業式と高校入学式、一〇日に中学入学式を行い、その後六時間（四五分）授業を実施することができました。

五月の連休後の六日からは、三〇分繰り上げて八時五〇分登校、六時間（四五分）授業になりました。六月一七日・一八日には、四月から延期していた文化祭を開催することもできました。

六月一二日に阪急全線開通、六月二二日に神戸電鉄が全線開通と、各交通機関も予定より早く復旧し、生徒の登校の環境もかなり改善されてきました。

二学期からは全て通常の時間帯にし、基本的には、通常の学校生活が戻ってきました。女子大の擁壁改修工事の土砂が中高のグラウンドに置かれ、体育大会がポートアイランドのワールド記念ホールで行われるということがありましたが、近隣の多くの学校がプレハブの仮設校舎などでの授業実施を余儀なくされた中、本校は半年あまりで復旧をほぼ終え、震災前の状態に回復できました。このことは、本校にとって本当に幸せなことでした。

これは、生徒・教職員の努力もありましたが、同窓会や育友会をはじめ多くの方の支援協力があったことが欠かせません。

この阪神・淡路大震災は、過去の水害や空襲のときと同様に悲惨な出来事でしたが、その対応については、様々な人の協力・支援という本校の伝統の力が発揮され、人の生命の尊さやまわりの人に対する思いやりの大切さを再認識する機会にもなりました。この体験で学んだことは、これから本校で学ぶ生徒たちにも引き継がれることを祈っています。

第四節　中高の改革

中・高校元教諭　三宅広明

一．学校改革への道すじ

一九九〇年代の中ごろから中学の入学志願者が減少する傾向が見られ、教職員の間でこのままではいけない、何とかしなければという気分が生まれてきていました。前身の甲南高等女学校が一九二〇（大正九）年に設立されて以来、学校設立の理念である教育方針「全人教育・個性尊重・自学創造」にもとづく教育を行ってきていて、長く外部からも評価され、教職員も学校の現状に満足していて、社会的な意識の変化や、生徒や保護者の学校に求めるものが変わってきていることに少し鈍感であったということができそうです。たとえば一九八〇年代のバブルの崩壊とその後の長い経済的な収縮は、中高においても大きな影響を被ることになりました。中高では、それまで甲南女子短期大学か甲南女子大学にほとんどの生徒がそのまま進学するという状況が続いていたのが、一九九〇年代に入って短大や女子大以外の外部の大学への進学希望者が増える傾向が顕著になってきていました。

当時の片山享校長もカリキュラムの変更など改革に向かいましたが、一九九八（平成一〇）年に就任した采女節子校長が中心となって積極的な学校改革に取り組んでいきました。采女校長は、就任早々の一九九八年から二〇〇一年三月までの三年間に三次にわたる「学校改革プロジェクト」を立ち上げ、制度の面でも意識の面でも、あらゆる方向から学校を見直し、学校改革に向かう基盤をつくりました。彼女はその意気込みを、社会の変容に応える女性の教育のあり方をふまえて、「創立の教育理念を、新しい革袋にいれて再生をはかることが求められる時が来た」と述べています。

（二）学力をつける

この学校にとって今、大切な事は何か。采女校長は、学力をつけること、勉強の習慣をつけること、それこそが第一に大切な事だと明確にしました。生徒の希望の進路が多様になってきている現在、その希望の進路に進むことができる学力をつける学校が良い学校であり、勉強の習慣をつけることこそがこの学校に求められることだと考えたのです。

これまでにも一九九〇年代の前半から、英語で習熟度別クラスを採用するなど、学力をつける取り組みはしていましたが、なかなか成果が上がりませんでした。それをもっと根本的にカリキュラムを変更し、授業の方法を変えることで実現しようと考えました。

ですから学校改革では二つのことが検討されました。一つは希望の進路を保障するため、受験指導に対応するカリキュラムを新しく作ること。もう一つは、学校設立の理念である教育方針の「全人教育・

個性尊重・自学創造」を生かす学びの形を実現するということでした。「甲南」の目ざした学びを新しいカリキュラムの中に生かした学校改革が大切だと考えられたのです。

① 進路志望の実現を保障する

そこで、学習の効率化を図って、これまでの文系と理系のコース分けに加えて習熟度別コースを採用しました。つまり二〇〇二（平成一四）年度から中三と高一の二年間は、一学年四クラスのうち一クラスを、成績上位者を集めたアドバンストクラスとして設置し、英語と数学は二クラスを三分割にしたのです。

それまで中高の教育目標は、創設以来、この時期にしかできない一人ひとりにあった個性、能力を育てようということを基本方針としていて、特別な受験対応の指導はしてきませんでした。ですからこの新しい目標は、それまでの教育方針との関係を問われるものでもありました。全人教育と新しい課題の進路志望の保障は両立できるものなのか、それが大きな問題でした。しかし学校改革の議論のなかでは、そもそも創設以来の教育方針の意味を私たちは理解してきたのか、そしてその理念は本校の教育活動の中で実現できているのか、という問いとなって教員に戻ってきました。

② 人間教育の進展

このころ実際に授業をしていて、授業に興味のもてない生徒がでてきて、「学びからの逃走」といわれるような事態がおこっているという認識を多くの教員がもつようになっていました。そのため、まず教室での学びという基本的な形を内実のあるものにするにはどうしたらいいのか、ということが大きな課題となっていました。これを何とかしないと、進路志望の実現という目標もとても達成できないだろう、つまり進路志望を実現するためには、受験に対応したコースづくりなどだけではなく、生徒を教室での自発的な学びに向かわせる教育方法が求められるという議論になり、試みとして高一で「探求」、中二で「平和」という授業を設置しました。これは、ちょうど新しい学習指導要領に「総合的な学習の時間」が置かれたことへの対応でもありました。

一見進路志望の実現という方向と矛盾しているようにも見えるけれど、この方向の実践こそ、実はこの学校の本来の教育方針につながるものであり、「甲南女子中高」に対する信頼を受け継ぎ、育てるものなのではないか、そして進路志望の実現という目標のためにも意味があるのではないかと考えたのです。

この二つの方向については、矛盾した考えであるとか、あれもこれもと手を広げるだけであぶはち取らずになってしまう、どちらかに集中すべきだという意見が教員の間からも上がってきました。しかし、話し合いのなかで、まずやってみようということになりました。この選択は、これまで学校としてあまり取り組んでこなかったことを大幅に増やすことになったので、その準備のための話し合いや自己研修などで教員の負担が増えたことは間違いありません。けれども実際にやることによる成果も見えてきて、その持続のなかで教育のやりがいも実感できるようになってきました。二〇〇三年に、受験生を対象とした『甲南女子通信』に掲載された新旧二人の校長（采女節子・大榎茂行）の対談のテーマが「今こそ二兎を追おう」であったことが、その当時の空気を伝えています。

そこで采女は、改革に向かっていく問題意識を次のように述べています。

まず第一に想ったことは、ここは温室だということです。（中略）女性自身の立場も非常に変わっているのに、非常に温室的で、良くいえば守られている。悪くいえば孤立している。それはこれから生きていく女性にとってあまり良い環境ではないんではないか。やはり開かれた、世間の風にあたった学校でないと具合が悪いんじゃないかということを強く思いました。もう一つは、前校長の片山先生が取り組んでおられた改革を推し進めたいと思いました。そこでプロジェクトチームをつくって将来の案を立ててください、それをもとに進んで行きましょうと申しました。それから、生徒たちも世の中に夢を持ってもらいたい。ボランティアとか社会福祉の問題、あるいは環境の問題、そういうものに生徒が目を開いてくれればいいなとも思いましたが、それには何よりも勉強すること、知性の問題が大事です。いささか古いんですが、天野貞祐先生もおっしゃっている「知育こそが徳育である」、知的な刺激こそが徳育の基本であると先生方には申し上げたのです。

甲南女子中高生の課題を社会性の欠如と考え、その力をつけるには勉強すること、知的な刺激を受ける授業を行なうことが必要だとし、その方向づけと実現のための改革をプロジェクトチームとして教職員自らが生みだすことを求めていたのです。

（二）学校改革プロジェクト

学校改革に向けての具体的な内容については、三次にわたるプロジェクトチームの提案によって進められました。

① 第一次プロジェクトチーム（一九九八年四月～一二月）

中野虹兒教頭のもと、九人のメンバーが三つの分科会（中学入試・機構改革・大学進学）に分かれて検討しました。ここでは「全人教育・個性尊重・自学創造」というこれまでの教育方針をもとに、中高六カ年で「どのような人間を育てるのか」という全体構想を立て、具体的なカリキュラムを作成することを求めています。とくに人間教育の課題として、「自立」を教育の中心にすえて「教育目標と「自立」」をはかろうとしていることが注目されます。

「自立」については、采女校長が「どのような教育を目標とされているのですか」という生徒の質問に答えて次のように話しています。

今、改革という形で取り組んでいますが、その中心は「自立」ということです。自立した個人。自立とは何かというと、「責任が取れる個人」、そういう人間をつくりたい。責任をとる、自分の行動にも、自分の言葉にも責任をとる。「自分で責任をとる」そういう風にもっていきたいと思います。これからの世の中は、それが一番大事になるでしょう。（『和光』五七号、二〇〇一年）

教育学でよく使われる「自律」ではなくて、「ひとりだち」の意味をもつ「自立」が強調されたのは、当時の生徒たちの行動の「無責任さ」「勝手さ」に対する采女校長の批判でもありました。校長は、「自立」と「謙遜な気持ち」という言葉を生徒によく語っていました。

② 第二次プロジェクトチーム（一九九九年四月～二〇〇〇年五月）

一一人のメンバーが三つの分科会（カリキュラム、学校行事、校訓・教育方針の具体化）に分かれて議論しました。カリキュラムについては、従来の中学三年、高校三年の「3―3制」を、中一から二年ごとに区切り、それぞれを基礎期、充実期、発展期とする「2―2―2制」としました。また、英語の授業を重視すること、「総合的な学習」や「情報」の教科を積極的に実施すること、「発展期」の自由選択科目の時間数と科目数を増やして受験対応型の授業をすることなどが示されました。また、少人数編成や習熟度別のクラス編成をすすめること、中三からスタンダードの三クラスとアドバンストの一クラスに分けた習熟度別編成を採ることを求めました。

八月には全教員による一泊の研修会をもち、改革の方向

の共有がはかられました。また、中一の生徒（二〇〇〇年度入学生、五八回生）を対象にした、第一回目のスプリングセミナーを牛窓で二泊三日の日程で実施しました。「自分で見て、自分で考え、自分で行動できる力をつけよう」をテーマに工夫を凝らしたオリエンテーションを行ない、これがその後のスプリングセミナーのもとになりました。

③　第三次プロジェクトチーム
（二〇〇〇年六月～二〇〇一年三月）

一〇人のメンバーで構成され、第一次と第二次二つのプロジェクトチームの答申、つまり中高一貫教育ということを意識しながら、「学力をつける」、「生徒が人間的な成長を遂げる教育を実現する」という大きな目標を、たんなる理想論としてではなく、日々の学校現場の中でどのように実現していくかという困難な課題に取り組むことになりました。生徒と教員はそのままで、新しく変わっていくためには、当事者である生徒と教員それぞれのモチベーションを高めることが何より必要になります。そのため隔週に開かれるプロジェクトチームで話し合った内容は随時職員会議に協議事項として報告され、全員で議論し、問題意識が共有化されていきました。時間はかかったけれど、この過程で、自分たちの学校改革という意識が生まれてきたのは、その後の実践にとって大切な事でした。

最終答申は、「カリキュラム」と「学校行事」からなっています。「カリキュラム」では今後の課題と「アドバンストクラス」の編成基準、「総合的な学習の時間」の具体的な取り組み方、「補習」のあり方などが示されました。また「学校行事」では、体育大会と文化祭、学習成果発表会、宿泊体験学習などのあり方が検討されています。この最終答申によって学校改革の方向づけと制度面での具体的な提案が示され、その内容にもとづいて職員会議などで議論検討され、実施されていくことになりました。

教職員の議論にもとづく三次にわたる学校改革プロジェクトチームの答申を踏まえ、学校改革の基本方針とその実施計画について、采女校長は、次のように生徒に呼びかけています。[※1]

改革の基本方針は次の二点です。

Ⅰ　基礎学力を充実して、夢に、望みに向かって正しい進路を選べる力をつける

Ⅱ　洗練された態度、行動力をつける

そのための具体的な改革は大体次のような順序で計画しています。

(1)　担任は担任の仕事に専念する態勢をつくる
(2)　講堂朝礼その他、学校の行事をできる限り生徒主体の運営に
(3)　学校行事をすべて見直す（校外学習、修学旅行、文化祭、体育大会、その他）
(4)　カリキュラムの全面的な見直し
(5)　新しい取り組み（進路別授業、習熟度別授業、補習授業など）

気持ちを新たにして、ご一緒にしっかりと取り組んで、これからの八十年の歴史の第一歩としようではありませんか。

二．全人教育の再生

（一）「探求」

二〇〇一年度から「探求」という科目をつくって総合学習に取り組むようになりました。一学年四クラスを生徒の希望で五つの講座（「自然環境と生命」「社会環境と生き方」「人間環境と福祉」「国際環境と多文化共生」「地域環境と神戸」）に分け、それぞれ二人の教師で担当します。どの講座にも「環境」という言葉がついているのは、たまたま二〇〇一年～〇三年まで甲南三学園（甲南小学校・幼稚園、甲南高等学校・中学校、甲南女子中学校・高等学校）が、文部科学省から環境教育研究開発学校に指定されたので、「探求」をそれに対応する授業にもしようとしたためです。「探求」が生まれたきっかけは、「学校改革」の一環としてでしたが、同時に一九九八年に改定されて二〇〇二年から順次実施される学習指導要領（高校は一九九九年に改訂、二〇〇三年から実施）に定められた「総合的な学習の時間」に対応するものでもありました。現在は「総合的な学習の時間」の中の科目「探求」と位置づけていますが、研究開発学校になっているときには「学校設定教科」として「環境」という教科をつくり、その中の科目として「探求」を位置づけていました。

（二）「平和」

中学二年生を対象とした「平和」は週一時間で、各クラス二名の教員が担当し、中二担任を含む複数の担当教員が毎回相談して授業をつくるという形をとりました。一学期に「ピースおおさか」「リバティおおさか」へ一日研修旅行、秋に一泊の広島研修旅行を実施し、卒業生などの外部講師を随時教室に招聘してさまざまな人に話を聞く、ということを大切にしました。授業のための教科書などはなく、最初から生徒が互いの意見を聞きあうこと、話しあいのなかで自分の考えを深めることを第一の目標として授業をつくっていきました。

「平和」についての知識を学ぶ授業ではなく、他者の話を聞いて、自分を問う「対話」を実践することを意識して授業をつくっていったのです。

（三）保育体験実習

三学園で取り組んだ環境教育の一環として、二〇〇二（平成一四）年から中三で「保育体験実習」を実施するようになりました。「いのち」の大切さを再認識すること、自分自身の幼いころを振り返ることによって、自分に注がれた愛情に気づくことなど「心の環境」を豊かにはぐくむことを趣旨とし、同時に、社会のなかでの責任ある行動をとる訓練をする時間としても考えられました。この取り組みには采女校長の強い思いが込められていました。采女は、講堂朝礼などでローザ・ルクセンブルクやジョルジュ・サンド、あるいは日本の中で、無名だけれど様々なかたちで社会と関わる女性について紹介しながら、生徒たちが社会に目を向けること、開かれた世界観をもつことに希望を抱いていましたが、[※2]その具体的な手がかりとして学校で何かできることはないかと考えていました。その思いが育友会の役員で保育園の経営をしている人や、卒業生で保育園の園長をしている人たちに伝わり、その人たちの協力によってこの保育体験学習は始まったのです。だからこの実習も「探求」「平和」と同様、全くの手作りの試みでした。

家庭科の保育の授業、学年、環境教育推進委員会などが連携をとりながら準備を重ね、七月の一学期期末試験のあとに三日間、保育園、幼稚園で実際に園児に接することになります。

三．自学創造教育の伝統を継ぐ

「学校改革」の第一の目標であった「進路志望の実現を保障する」という点については、次章「中高の新しい発展」で詳しく述べられます。では、「全人教育」を目ざした「学校改革」によってどのような成果が見られるようになってきたのでしょうか。

さまざまな評価はありえますが、次のようにまとめることはできそうです。中二で「平和」、高一で「探求」の授業、そして中三で「保育実習」を体験することによって、学年の中での生徒同士の関係のもみほぐしや再発見が生まれ、共同で話し合いの体験を重ねることによって、学校や教室への親和感がましてきました。その結果、高二になって生徒会活動に積極的に参加し、高三では学年がまとまって学校全体のリーダーになる、という流れが自然に生まれてきました。また、高二で実施される沖縄への修学旅行でもそれまで

の話し合いや調べ学習の経験が生かされて、たんなる名所めぐりの観光旅行ではなく、体験や学びを軸にした主体的な研修旅行になってきています。もちろんいつもうまくいくわけではありません。学年によってカラーは違うし、担当者を含めて思いが空回りする場合もあります。けれども、「平和」「探求」などの授業の多くは小グループを単位にした協同学習のスタイルをとっており、普段の授業とは違う相互性を重視するので、進行がうまくいってもいかなくても、そこに生まれる関係のゆれや組み直しは、お互いを見直し、自分を見直すきっかけにもなっています。

そしてこのような取り組みは、実は戦前から本校が目指してきた教育のあり方でもあるといえます。本校の最初の専任校長であった表甚六は「回顧三十年」（一九五一年）の中で、「戦前の甲南女子での自学創造教育」について次のように述べています。[※3]

> 自学創造の新教育を標榜してから学芸会も刷新の機運に触れて、根本的に改新したのである。即ち生徒が平素学習したものをある限られた幾人かの生徒によって繰り返される学芸会でなしに、研究問題を定めて全校生徒が分担研究をなし、これを総合して問題解決をするという総合法であり、創造法である。（「躍進日本とわれらの覚悟」「我が国の服飾」「聖戦と我等の経済生活」など）こうしたテーマの下、各教師はそれぞれ専門的に分担して指導する、全校生徒一名も漏れることなくこれに参加する。国文あり、詩歌あり、図画あり、音楽あり、数理あり、家政あり、劇あり、さながら演劇のような場面もある。父兄たちは、学芸会といえば競って集まる。近所の知人を連れてくるのもある。弁当もちで朝から入場して終わるまで熱心に観覧した。だから生徒は一所懸命に骨を折る。そこに和の訓練もある。この学芸会はついに入場券を発行して制限せねばならぬほどに発展して、文部省視学官…のごときは大いに称賛せられ特に文部省へ報告せられたほどである。学芸会の記録は一冊の印刷物として生徒に頒布した。

学校全体でテーマを決めて、それに関連する総合的な学びを行なっていたようで、全校生徒の分担学習が基本にあるようです。これに対し、「平和」や「探求」は小グループに分かれて、自分たちの問題意識に基づいて話し合い、調べて発表するものであり、取り組み方は随分違いますが、生徒一人ひとりの学びを重視するという点では重なっているようです。なぜ表甚六が戦前から「自学創造教育」をめざしたかについては次のように述べています。

> 注入主義一点張りの公立学校の教授法への違和感が述べられ、理想主義的な手作りの「自学創造教育」への自負が伝わってきます。この詳しい実践と総括についての表の報告は、甲南女子の戦前からの教育が基本的にめざす理想を示していて、今後とも本校の教育理念の核として生きていくもののように思われます。つまり、九〇年代後半からの学校改革でめざしたものは、戦前からの本校の教育理念を今日に生かし実現しようとする試みに他ならないのかもしれません。

私は本校赴任前、公立高女の校長たりしとき、最も不満であったのは、生徒の人数が多くて理想とする教育ができないのと、教授法が注入主義一点張りで、少し新教育めいたものでも試みようものなら、知事さんのお目玉が光るのと、この二つであった。…本校の実施した新教育法を「自学創造教育」と称した。

※1　『和光』五六号二〇〇〇年
※2　采女節子「式辞と講堂朝礼の話」『研究紀要　第三六～三八号』二〇一七～九年
※3　表甚六「回顧三十年」は、『創立三十周年記念誌』甲南女子学園一九五一年に初出、中高の『研究紀要　第二九号』二〇〇八年に復刻。

第五節　中高の新しい発展

中・高校元教諭　長尾きぬ代

一・学校改革　第一期から第二期へ

采女校長のもとで強力に進められた学校改革は、女性を取り巻く社会の大きな変化に対応できる学校作りを目指したものでした。学力強化の基盤である教育の場を整備する試みと同時に、甲南の伝統に立ち返っての地道な努力が続けられました。講堂朝礼や、折々の行事で校長から語りかけられる強い思いは、生徒にも教員にも浸透していくようでした。新しい世界に生きる女性の育成を目指すことに加え、「時代の風潮に流されない、気品ある生徒を育てる学校」というイメージを取り戻すことにも成功しつつあったのです。

度重なる教員研修会を通して、「甲南の伝統とは」「どんな生徒を育てようとしているのか」「未来を生きる生徒にどんな力をつけてやるべきか」について、日常の生活面の指導から授業の見直しまで、議論する時間を持てた意義ある期間でした。

ただ、その間に生まれた新しい制度が実行に移されるたび、大きな成果が感じられたものの、甲南女子中学校への入学志願者が増えるという目に見える結果は長続きせず、根本的に問題が解決されたというわけにはいかなかったのです。

二〇〇四（平成一六）年、大榎校長が就任した二年目の中学入試の実質倍率は、限りなく一に近いものでした。中野副教頭より、過去数年の本校中学入試の実態（実受験者数・合格者数・実質倍率など）について詳細な報告を受けた大榎校長は大きな衝撃を受けました。それらのデータが示す本校がおかれている実態は深刻な状況であり、更なる少子化を控えて暗澹たる未来を予想させるものでした。大榎校長は当時の切羽詰まった状況を振り返り、九〇周年誌で次のように述べています。

> それを見た途端、それらの年々の凋落ぶりに私は思わず「ウーム」と唸らざるを得なかった。二、三年前、采女校長の下で成された改革による「アドバンスト・コース」設置の成果が出る前に、このままでは、従来の生徒たちの学力水準を維持するどころか、すぐに定員割れを起こし、学校経営そのものが危機に陥ると思った。急いで教育力向上委員会を設け、会議を重ね、資料となるスタディ・サポートの分析や教科会議が開催され、教員相互の意見交換をしたが、それだけでは実効は期待できなかった。そこで、内部だけでなく、もっと広く世間の注目を集める、相当早急に必要だと思われた。しかも、それは教職員自身の内から自ずと湧き起こる改革でなければならないと。この思いを広く伝えるために、私は新任であることを利用して、保護者会などで、当然同席する教員をも強く意識しながら、校長の教育方針として、従来の甲南の立派な伝統である品位ある人格の育成と、特に社会に出て役立つ知力を養うこと、この二兎を追うことを私の甲南教育の柱にしたいと訴えた。

二・第二期　第一次プロジェクト委員会

この大榎校長の意向を受け、新たな改革の方向を求めて、二〇〇五（平成一七）年度末に、当時副教頭であった金延教諭を中心に第二期の第一次改革プロジェクト委員会が立ち上がりました。それは、八名の委員により三月から五月の間に九回の委員会が開かれ、集中的な審議が行わ

れるというものでした。

この委員会の目的は、「本校の現状を踏まえ、本校の伝統と誇りの保持を図り、更なる安定した女子校の地位を確立するために、どのような体制・教育システムがよいか、特進コースの設置、実施時期も含め検討し、学校長に答申する」ことでした。まず、本校を取り巻く背景を含め、本校がおかれている現状を直視することから始められました。一般に共学志向が見られ、女子校には志願者が集まらず、定員割れの現実がありました。また、本校としても入学生の成績の二極化が著しく、入学後の成績向上を図りにくいなど、本校における教育の在り方そのものを考え直さざるを得ない状況にあることを認識しました。そして、安定して志願者を惹きつける学校であるためには、どんな改革が必要であるかということが議論されました。その間、委員会が一貫して目指した姿勢は、「実行を前提にした議論であること」「純粋に『目的』達成のための提案を行うこと」「現実直視・優先順位・スピードなどの経営感覚を持った提案を行う」ことなどでした。

また、最終目標は「学校長に答申する」ことではありましたが、全教職員に理解・同意を得られるものでなければならないという趣旨に基づき、生徒の学習状況が分析・検証されました。各学年の入学時の成績とその後の伸びの相関性を明確にし、授業で生徒に学力をつけさせる方策をめぐる議論が重ねられたのです。

さらに、大きなテーマであった「特進コース」についてはカリキュラムの枠組み、入学試験の体制など、具体的に話し合われました。最大の問題は、世間に見られる「特進コース」は甲南女子学園が伝統的に守ってきた教育方針とは相いれないと思われることでした。その問題を解決するため、甲南女子独自の「特進コース」の実現に向けて、議論が深められました。進路志望の実現のみならず、第一期の改革で始められていた人間教育のさまざまな具体策を継続すること、入学時に成績上位者を確保すること、学校生活の満足感・充実感を保障することが、本校「特進コース」設置の重要項目であるとの合意に達しました。

第一次プロジェクト委員会答申

二〇〇六（平成一八）年五月一二日に答申が提出されました。答申の中で述べられたその骨子と、新コース制についての根本的な考え方は次の通りです。

〔**骨子**〕

私達は本校を、魅力ある女子校であるという評価のもと、本校への憧れと前向きな姿勢を持つ志願者が絶えず増加するような学校にしたいと願う。その実現の一方策として次の提言を行なう。

本校の現状を踏まえ、本校の伝統と誇りの保持を図り、更なる安定した女子校としての地位を確立する目的のため、「人間教育の進展」と「進路志望の実現」を教育目標の二本柱（車の両輪）に据えた、本校だからこそできる「特進コース」を設置する。

〔**本校だからこそできる「特進コース」の留意点**〕

本校の教育方針の一つである「個性尊重」（多様性を認める）の精神のもと、「特進コース」「普通コース」関係なく、生徒それぞれが、満足感・充実感のある学校生活を送れるように、また両コースとも、自尊感情が育成され、同学年の甲南女子生としての仲間意識を保持できるように配慮する。

① 「特進コース」の生徒も、進路志望の実現に特化するのではなく、学校行事・部活・和光会活動等、本校の人間教育システムの中で成長すべきであり、それらの活動への積極参加を呼びかける。

② HR・道徳の両コース合同授業や、共通課題・合同発表の機会を増やす工夫を、学年経営の留意事項とする。

③ カリキュラム編成・時間割編成に支障がない範囲で、また教科の特性を勘案して、例えば「総合」「芸術」は、両コースの混合授業を工夫する。

第二次プロジェクト委員会

続いて、当初の計画通り、第一次答申の具体化を目的とした第二次プロジェクトチームが結成されました。中野教頭、金延副教頭のもと、教務部、生徒指導部、総務部、進路指導部、入試対策部など各部署の責任者を中心にした一〇名の委員により、二〇〇六（平成一八）年六月七日～一一月二四日に、更なる議論がなされました。それぞれのコースの名称、クラス編成、カリキュラム、成績評価、入試体制、教室の配置、教員の勤務体制等などについてです。

そして、二コース制実施に伴って起こり得る問題を想定しての議論が続きました。二コース間の生徒のコース変更のありかた、入試問題の難易度、入学志願者の受験パターンと志願票の工夫、入学者のモチベーションをどのように維持するか、両コースの生徒の行事や部活動の参加の仕方、生徒の持つ差異感にどう対処するか、等々です。

準備しなければならない事柄は広範囲に及ぶものでしたが、この第二次プロジェクトも、金延副教頭の強いリーダーシップと委員の熱意で、答申に向けて集中的に議論が進み、形となっていきました。

第二次プロジェクト委員会答申

第二次プロジェクト委員会の答申は、職員会議の審議を経て、校長の了解のもと中高の改革案として決定されました。そこには、新コースのクラス編成やカリキュラム、入試体制、具体化に伴う諸問題に加えて、「中長期展望」が盛り込まれました。

中長期展望（二〇〇六年一二月二二日）

社会情勢や学校間競争の現実の中で、社会的評価と経営の安定を図るために、質の高い教育の実現は不可欠である。そのための「あるべき体制」を明示し、その実現に向け努力したい。現在は学費値上げの環境にないが、遠くない将来校舎改築の時期も到来する。その時期を目途に、社会的評価向上と安定的な志願者確保を目指し、校舎改築と併せ、学費の値上げにも耐え得る高質の教育体制の実現を目標としたい。

あるべき体制

一クラス三五人、五クラス

一学年一七五人、三〇学級

編制

〔三五人×三〇クラス＝一〇五〇人〕

中学棟・高校棟の増設

一年間の集中的な審議で到達したこの改革案実現の了承を得るため、理事会に金延副教頭作成による「普通科新コース設置の計画趣意書」が提出されました。

コース制の設置に伴う専任教員の増員や校舎建築までをも含む改革案は、理事会の了解がなければ実現不可能なことでした。しかし、大筋で了承され、実現に向けての力強い歩みが始まったのでした。それがいかに大きな意味を持つことであったか、大榎校長の九〇周年記念誌に見られる文章の中で感じ取ることができます。

これは一見、一クラスが増えただけのように見えるが、実は大変なことである。つまり、単純に見て、将来中・高 六学年で、六クラス増であり、クラス担当教員も六名増、新設一クラスに主要五教科を配置

「本学園の伝統と誇りの保持を図り、更なる安定した女子学園としての地位を確立するために、『人間教育』と『進路志望の実現』を教育目標の二本柱に据えた新たなコースの設置と、目標実現のためのカリキュラムを甲南女子大学の協力を得ながら策定する。」

この計画により、優れた資質を持つ中学入学者が増えるとともに、リーダーとしての資質を具え、一〇ヵ年一貫教育を希望する甲南女子大学志望者が増え、結果として甲南女子学園の社会的評価が向上すると信ずるものである。

新制度の概要

1　「新コース」の名称・募集定員・実施年度名称

「Sアドバンストコース」
（略称：Sアドコース、《「S」はSpecialの頭文字》）
「スタンダードコース」

定員

Sアドコース　約四二名
外部募集　約三五名
甲南小学校推薦約　七名
スタンダードコース約一三〇名
外部募集　約一〇七名
甲南小学校推薦約　二三名

実施年度　二〇〇八年度

2　カリキュラム

Sアドコース

本校が大切にしている「人間教育」の面をそこなわないことを前提にしたうえで、難関国公立大学を含めた難関大学への進路も実現できるようにすることを考えて編成した。

中学でスタンダードコースの各学年三単位増、高校で各学年三～四単位増とし、増単位分は五教科（国語・数学・理科・社会・英語）に振り分ける。増単位分の授業は土曜日に行う。

スタンダードコース

本校の創立の理念・教育目標を具体化するために、生徒個々の個性を大切にし、さまざまな進路志望にこたえることのできるカリキュラムとした。

基本的に現行通りとするが、高校二年から、甲南女子大学の講座を三講座（二単位×三＝六単位）履修できるようにし、最大六講座（一二単位）を大学の単位として認められるようにすることで甲南女子大学への志望者増を図る。

3　成績評価

基本的に現行通りとするが、Sアドコースの増単位となる五教科は、Sアドコース単独の評価となるので、進級の基準がスタンダードコースより厳しくなることが予想される。

4　Sアドコース・スタンダードコースのコース変更制度

①　Sアドコースからスタンダードコースへの変更は、希望があればどの学年でも可能とし、成績不良で進級の基準を満たさない場合、Sアドコースで原級留置か、スタンダードコースへ変更して進級するかは、本人の選択とする。

②　スタンダードコースからSアドコースへの変更は、中学二年及び中学三年へ進級する時点で、コース変更試験を実施する。

5　中学入試体制

①　統一入試日にスタンダードコースの入試を実施する。

②　Sアドコースの入試は、前期・後期の2回とし、他校の入試日の動向を見て、受験者数・成績上位者確保に最も有効な日を探って実施する。

③　スタンダードコースとSアドコースの何れも受験可能なこと、またSアドコースが不合格でもスタンダードコース合格が可能となる制度を工夫する。

6　一体的教育の推進

増単位分の授業以外は、Sアドコースとスタンダードコースともに、従来通り、学校生活のあり方は全く同一とし、学校行事、部活動において、同一条件で交わって活動できるように配慮する。

7　甲南小学校推薦入試のあり方（省略）

8　クラス編制およびそれに伴う勤務体制と経費（省略）

本計画実施により期待する成果

厳しい状況は本学園だけのものではなく、むしろこの状況を好機と捉えたい。本計画の積極的前向きな姿勢が生むメリットは多い。

1　成績上位者確保のためには志願者増が不可欠であるが、受験生（保護者）のニーズに応える教育の質（「人間教育」と「進路志望の実現」）の向上を図ることで、志願者増と成績上位者の確保が実現できる。一方中高と大学の連携強化が甲南女子大学進学志望者の増加を生み、ひいては甲南女子大学の発展、本学園全体の発展につながる。

2　中学一年・二年を五クラス編制（少人数クラス）にすることで、近年社会的現象として増加している生徒指導上の諸問題（不登校、いじめ、基本的生活習慣の欠如、社会性・公意識の欠如等）及び、学力向上に対する、より木目の細かい指導が可能になる。

3　高校のカリキュラムに甲南女子大学の講座を可能な限り増やし、大学の単位を高校で取れる体制を作ることで、早い段階からの甲南女子大学進学志望者増を図ることができる。

4　中高等学校の社会的評価の向上と、大学が行なっている社会的評価向上の取り組みとの相乗効果が期待でき、学園全体の社会的評価向上につながる。

三、新体制への準備

この第二期の学校改革は、二〇〇六（平成一八）年の三月にスタートし、第一次のプロジェクト委員会が三カ月、第二次委員会が六カ月という短期間の集中的議論を経て答申が提出され、職員会議で合意に達しました。驚くべきそのスピードと内容の緻密さは、目指した姿勢が、発足時から最後まで守られたということを意味しています。それだけ事態は差し迫っており、綿密な行動計画を持って改革にあたっていなければ、そのあとに続く成功はあり得なかったともいえます。

引き続き二〇〇七年度には新体制への準備が急ピッチで進められました。「Sアド準備拡大部長会議」が設置され、生徒の学校生活の細部に至るまで考え得る限りの準備について提案、審議がなされ、各部署が動き始めました。

四. 新体制のスタート

新体制による二〇〇八（平成二〇）年度中学入試は、大幅に受験者が増えました。加えて、Sアドバンストコースには、予想を超える成績優秀な新入生を迎えることができたのです。

六六回生の担任団は初めての二コースの生徒たちを、経験したことのない緊張感を持って迎えました。学年主任は、学年の一体感を常に意識したと述べています。学年集会、学校行事、学年の行事などで両コースの生徒を前に話す言葉に神経を使い、生徒が差異感を持たないように、優越感や劣等感を持たないようにと、細心の注意を払ったといいます。まさに、プロジェクト委員会で議論され、決定された新制度の精神が忠実に実行されていたことが感じられます。

「普通科、新コース設置の計画趣意書」に添付された別紙資料の「Sアド、スタンダードコースのあり方～行事関係」（金延教頭作成）に次のような記述が見られます。

Sアド、スタンダードの両コースの生徒が同学年の甲南女子生としての仲間意識を保持できるように、下記の各行事を積極的に利用する。また、道徳やHRにおいても、各行事に向けた取り組みに加え、これらとは別の学年単独の行事等も企画していく。そもそも本校は小規模であるため、学年が一体となって活動する行事が多く、小回りもきくので工夫しやすい。

ただし、コースの差異感をなくすことを目的にいたずらに混成の機会を増やすことが、クラスの結束を弱くすることになるので注意したい。各担任を中心としたクラス作りを土台にして、担任団の連携による学年作りをすること（五人で学年を担当する意識）が必要である。つまり、従来の甲南スタイルをより強化することが、「ひとつの甲南」を維持する最善の方法である。

学年主任としては、生徒間のそして担任同士の一体感を強い決意をもって目指していたということですが、時が経ち、ふと気づくと、ひとつの学年として融和しており、大きな違和感もなくなっていることを実感したようです。Sアドの教室だけが、他のクラスと離れた特別棟にあり、木曜日の七時間目授業、土曜日の授業という違いも大きな障害にはならなかったようでした。大きな懸念材料であったその環境は、逆に、クラスの生徒同士の結びつきを一層強くしたようです。コーラスコンクールや体育大会、英語劇コンテストなどの学校行事に、強い団結力を持って臨んでいる姿が際立っていました。

また、Sアドコースの生徒たちの理解の速さ、深さという点では目を見張るものがあり、教員にとっても良い刺激になりました。ほぼ全員が本校を第二志望としていたSアドの入学生たちと、非常に教育熱心な保護者に満足感を与えられるよう、さまざまな工夫がなされました。校務分掌にSアドコース長が新設され、その強いリーダーシップもあり、学期ごとの保護者会や会議など、情報交換、意見交換が頻繁に行われたことも、新しいコースが順調にスタートできた要因であったと思われます。

五. Sアドバンストコースが二クラスに

二〇〇七（平成一九）年三月の時点での計画趣意書では、スタンダードコースは基礎である中一・中二のみ四クラス編成であり、その後、三クラスに戻ることになっていました。従って、二〇〇八年度の二コース制開始も、それに伴う不安を残したままのスタートでありました。

ところが、二〇〇九年度入試ではSアドバンストコース合格者の歩留まりが予想外に多く、急遽Sアドバンストコースを二クラス編成にするという事態が起こりました。これは教職員にとって大きな勇気づけとなり、また、入学生にとっても、クラスのメンバーが六年間変わらないという息苦しさを取り除くものであり、新体制の大きな弾みになりました。

二〇一〇年度入試では当初よりSアドバンストコースの二クラス募集を行い、期待通りの結果となりました。入試日程・募集の工夫の効果もあってスタンダードコースの実質倍率も上がり、世間の本校への評価も急激に改善したようでした。初年度、第一志望とする生徒がほとんどいなかったSアドのクラスでしたが、本校ならではの「特進コース」の魅力が認められつつあることを感じた時期でした。

スタンダードコースの生徒たちにも、期待以上の良い影響が感じられました。従来、甲南女子には競争意識が薄い生徒たちが多かったのですが、Sアド生に対する対抗意識が刺激されるのか、何かにつけ以前より頑張る姿が顕著になったようでした。スタンダード、Sアド生の両方が共に、自らに高い目標を設定して謙虚に努力する姿勢が多く見られるようになったことも喜ばしいことでした。

また、「特進コース」新設の議論の中では、部活動の衰退を心配する声が常にあがっていましたが、その予想は大きく外れました。勉強だけでなく、学校生活を大いに充実させたいというSアド生が多かったのです。このことは、本校が意図したSアドコースの趣旨をよく理解して選んでくれた証のように感じられます。また、準備段階で、あるいは始まってからも、常に両コースの生徒に差異が生まれないよう、細部にわたって制度を整えてきた結果であったとも思われます。

さらに特筆すべきは、生徒指導上の重大な問題が激減したことです。新制度の発足が何か学校の空気を変えるきっかけになったことは確かです。

しかしそれだけではなく、改革の流れの延長で生徒指導部、進路指導部、各学年の担任団からのきめ細かい生徒および保護者に対する語りかけが功を奏したものと思われました。

六. 新校舎建築に向けて

二〇一二（平成二四）年度より、Sアドバンストコースの週六日制に加え、スタンダードコースの週六日制への移行（全学年一斉移行）も決まり、一九九七年から始まった週五日制は一五年間で終了し、元の六日制に戻ることになりました。

さらに、Sアドコースが二クラスになったことにより、清水校長（二〇〇八年四月―二〇一四年三月）のもと、一学年五クラス、全三〇クラス、一学年生徒数一八〇人、スタンダードコース三クラス、Sアドバンストコース二クラスの体制が固まりました。これに伴い一学年五教室、全三〇教室に対応した新校舎の建築が決まりました。二〇一〇年度着工、二〇一一年度中に竣工し、二〇一二年度四月から、新校舎での新たな歴史が始まったのです。

清水校長の校舎建築に対する思いは九十周年誌に次のように表されています。

さて、著名な建築家村野藤吾氏が設計した本校の校舎は、今から四二年前に甲南の丘とよばれる現在の地に建てられました。海の見える高台に並ぶそれぞれの建物は、周囲の環境とも調和し、誰からも愛

されてきました。しかし、長い年月の経過に伴う老朽化は避けられず、次第に維持管理の手間や費用がかさむようになってきました。今日そうなることを予見していたかのように新校舎建築の資金計画をたててくださった一三年前の学園理事会と、その実施を快諾してくださった現在の理事会のおかげで、九〇周年を迎えた記念事業として現在の中学棟、高校棟と特別棟の一部の建て替えが行われることになりました。工事は、まず現存のテニスコートの場所に新校舎を建設し、その完成後に現在の中学棟、高校棟と一部の特別棟を撤去し、新しいテニスコートを造成するという順序で進められます。生徒たちの学校生活への工事の影響を最小限にするために、旧校舎から新校舎にスムーズに移行できるような計画が採用されました。四階建ての新校舎では、一学年五クラス制による少人数教育が可能となり、その教室は学年ごとに同一フロア上に配置され、さらに生徒たちが交流するための広いスペースも確保されています。基本設計は、先生方が意見を出し合い、それを建築委員会が集約し、設計会社と何度も話し合って出来上がりました。今年の一二月に建築が始まり、二〇一二年の春には理想的な新しい教育空間が生まれます。地球環境に配慮し、かつ、現在の景観に溶け込んだ光と風と緑の新校舎の完成を誰もが心待ちにしています。

七．企画部・入試対策室・進路指導部の軌跡

第一期・第二期の学校改革で行われた変革のひとつに、入試対策部・進路指導部の誕生とその充実があります。

まず、第一期第一次プロジェクトチーム答申により、「企画部」の創設が提案されました。プロジェクトチームの意気込みの象徴のようなこの「企画部」の提案は、中学入試対策（入口）と進路指導（出口）の両方を分掌するものでしたが、実際には、企画部は中学入試対策（生徒募集・入試広報）を中心とした部となり、進路指導はしばらくの間、総務部・教務部等に編入されることになりました。やがて、進路指導部の創設に合わせて企画部は発展的解消を果たし入試対策室に、そして、入試対策部へと名称変更されました。この二つの部の目覚ましい充実ぶりは、その当時の本校を取り巻く状況や改革の目指すところをよく表すものといえます。

企画部から入試対策室へ

少しでも多くの志願者を集めるための工夫はいつの時代にもなされて来ましたが、少子化の影響もあり、学校間の競争は激化の一途をたどるようになりました。あらゆる機会を捉えて、それぞれの学校が自らの教育方針を打ち出して多くの人々に理解を求め、魅力を訴える時代となりました。その当時の情報発信の資料を振り返ってみると、入試広報の考え方、方法における大きな転換点にあったことが強く感じられます。

「甲南女子通信」は二〇〇〇（平成一二）年八月二八日に創刊号が発行され、二〇〇六年六月二五日までの六年間に、通算三一回続きました。

第一期学校改革の宣言とその内容の公表は、学園創立八〇周年に当たる二〇〇〇年の学園創立記念日に予定され、改革実施は二〇〇一年度からと決まっていました。

二〇〇〇年四月に改革先行行事の「中一スプリングセミナー」を実施し、第二次プロジェクトチームの答申、第三次プロジェクトチームの結成、最終答申と、翌年に改革元年を迎える熱気の漲る時期でした。

その中で年間五号もの「甲南女子通信」が発行され、「人間教育」を重視する甲南女子の伝統と、時代に合った「自立した」女性を育てる学校改革の内容を広く伝える努力がなされました。

この「甲南女子通信」は当時の中野企画部長（後、副教頭、教頭）による手作り（印刷のみ業者依頼）の通信でした。本校に受験実績のある塾に置いてもらい、塾関係者や塾に通う受験生、保護者に本校のことを知ってもらおうと作成したものでしたが、改革の初期から中期にかけて、本校の教育の内容、姿勢、熱意を世間に知らしめる重要な役割を果たしていました。

学校行事（式典・文化祭・体育大会・修学旅行・スプリングセミナー等）や保育体験学習・環境教育・総合学習等の「人間教育」の実践、習熟度別編成システムや補習等の学力向上関連事項、部活動の活躍、留学制度の紹介、入学式・始業式等の校長の式辞まで、さまざまな甲南女子の教育活動を、写真を多用して案内する広報誌でした。

新しく生まれた入試対策部でも、副教頭、入試対策主任を中心に、さまざまな機会や媒体を通じての広報活動が企画、展開されました。

従来から行われていた学校での説明会に加えて、受験業者・塾などが主催する学校説明会、個別の相談会など学校外の催しも年々増え、入試対策部以外の多くの教職員をも巻き込むこととなりました。学校改革以来、一層多忙になっていたにもかかわらず、協力を惜しまぬばかりか、それぞれの立場で気づいた新しい提案も出て、充実した広報活動となっていきました。

また、多くの学校が集まる合同の説明会では、私学がおかれている厳しい現状を肌で感じる機会にもなりました。しかしそれと同時に、学校の一員としてその教育方針に対する理解を深め、問題点に気づいて改善策に思いを巡らすきっかけともなりました。

校内での学校説明会では、生徒たちも大いに貢献してくれました。校舎内の清掃から部活動の発表、学校生活についての質問に答えるなど、さまざまな分野で生き生きと活躍する姿が見られました。二コース制の順調なスタート、新校舎建築に向けての明るい希望に支えられ、教職員・生徒が一丸となって、学校の魅力を伝えようという熱意が発揮される機会となったようです。

企画部から入試対策部へと移行する頃から、広告媒体が急速に多様化し、洗練されたものになっていった感があります。イメージを伝える写真、端的にメッセージを伝えるコピー、参加者に示すスライドの一枚一枚に工夫が凝らされ、プレゼンテーションとしての完成度も向上しました。

基本的な情報に加え、二コース制に関連して予想される質問に対応するQ＆Aは、SアドバンストコースⅡ新設に伴う課題とその対応について、教員間の激論の末に到達した統一見解が多く含まれ、新体制に向かう学校の姿勢を物語るものでした。

進路指導部の歩み

改革以前、本校の進路指導は、甲南女子大学への内部推薦入試の対応が中心であり、他大学進学志望者の進路指導は、ほとんど行われていませんでした。しかし時代の流れで、甲南女子大学にはない学部や、共学の大学に進学を希望する生徒が増えたこともあり、「進路指導係」の仕事が他大学進学志望者の指導の方向へも拡大していきました。

甲南女子大学に内部進学ができるというメリットと同時に、希望する他大学に進学ができるということは、中学入学志願者にとって大きな魅力になり得る条件でした。その上で、生徒たちの希望が叶えられ、本校として少しでもよい実績を上げるということは、学校の将来にかかわる問題になっていたのです。このことが学校改革の中で確認さ

れ、さまざまな形で「進路指導」が始まりました。

一九九八（平成一〇）年頃より、高校生対象に全国規模の模試が導入され、その後中学生にも学力考査受験の機会を設け、生徒が自分の実力を知り、弱点の克服に役立てる機会が増えました。同時に、教員にとっても、個人として、あるいは教科として、授業の改善につながる取り組みのための良い材料となりました。

一九九九年四月にはカウンセリングルームが、受験に役立つ資料を揃えた専用の進路指導室として準備されたのですが、そのことが伝えられると、「進路指導」を待ち望んでいた生徒、保護者の間に大反響があったという記録が残っています。また、六月には初めて他大学の入試説明会が本校講堂で開かれました。

二〇〇一年から中三・高一で習熟度別のクラスが設けられる等、生徒の学力を伸ばす新たな手立てが加えられました。国公立大学志望者が増えたのもこの時期の特色でした。

二〇〇三年には、高一・高二の生徒対象に、甲南女子大学の講師を招いて大学学部説明会が企画されました。このような機会を通して、大学での学びの内容をより具体的に生徒たちに知らせることとなりました。

二〇〇四年度には、進路指導係が独立して部として昇格し、本格的な進路指導部としての活動が始まりました。

この年から進路指導部主導で、二泊三日の新高一生全員参加の勉強合宿が始まり、高校生としての自覚を生徒たちに持たせる良い機会になりました。さらに二〇〇五年には夏休み中の勉強合宿「高二サマーセミナー」も始まるなど、精力的な活動が次々と展開されました。

「進路のしおり」が作成され、高校生に配付されたことも大きな一歩です。その内容は、「夢の実現へ向けてのパートナー」という副題が示す通り、「進路指導計画」「進路について考える」「入試スケジュール」や、各種の推薦入試を含む入試制度について、また、受験にあたっての出願手順や注意事項、進路状況、合格体験記などとなっています。この「進路のしおり」は、生徒の動向、入試制度の変更などに伴い、今に至るまで、常に進化を続けています。

同時に、学期ごとに高校生対象に発行された「進路だより」を見てみると、生徒たちに、将来の設計や日常生活の過ごし方、心の持ち方について身近なことばで語り掛けていることが感じられます。その他、ホームルームの時間を使って「未来予想図」を描かせたり、卒業生による学部ガイダンスを企画したり、補習や個別指導を行うなど、進路指導部は着実に歩みを続けています。

一九九八年度に始まった学校改革の中で行われた本校の教育制度や組織の変更、整備の根本精神は二〇〇八年に策定された「本校の教育理念」に集約されているように見えます。

【学校の使命】建学の理念を基盤に、知性と品格を備え、人生や社会に対して前向きに取り組む自立した女性を育成する。

歴史を振り返ると、甲南は誕生以来、「まことの人間をつくる」というゆるがぬ建学の精神を保持しながら世界に心を開き、自由な精神を愛する風土の中で歩んできたことが感じられます。今後も未来に向けて、目まぐるしく動く世界の中で変化を恐れず、積極的に、一人ひとりの生徒の能力を引き出し、伸ばす体制づくりを探って行かなければなりません。

第六節　中高の新校舎建築

中・高校元教諭

殿浦伸明

一．長く愛された校舎

新校舎建築の計画進行にあたっては費用の問題、建築場所の問題、新築か増築かなど解決すべき問題が多々ありました。中でも一番大きな問題は校舎（村野藤吾[※1]設計）に対するそれぞれの思いでしたので、第一節「中高校舎移転建設について」と合わせて、四〇数年間愛されてきた校舎に触れておきたいと思います。

正門を入ると長い階段と広いスロープの車道が伸びており、守衛室の石垣の上には数寄屋造りの茶室、一段上には小さな日本庭園、さらに一段上がると講堂、管理棟があります。管理棟を軸にして高校棟、中学棟、特別棟が等間隔に並び、海側にはテニスコート、グラウンド、プール、体育館などがゆったりと配置されていました。

三棟の校舎の間にはベンチや花壇や木々に囲まれた広い芝生の中庭があり、生徒たちの友情を育んだ憩いの場でした。

講堂（安宅記念講堂）は、村野藤吾氏が設計に一番力を注いだ建物です。毎週の講堂朝礼をはじめ数々の行事で使われてきましたが、本格的な舞台照明や放送機器を完備し、一二〇〇人を収容できる立派なホールです。

体育館は旧校舎では講堂（東畑謙三[※2]設計）と兼用でしたが、バスケットコート二面の専用体育館が誕生しました。そして待望の二五メートルプール（育友会の寄付）も完成し、各教科の理想が次々と実現しました。

このように中高の移転事業は校地選定、取得のときから理事会、育友会、清友会の尽力があり、教職員の熱い思いを随所に反映する形で一九六八（昭和四三）年に完成しました。

二．新校舎建替えまでの経緯

甲南女子の教育は創立以来ずっと生徒たちの個性を尊重してきました。選択制授業が多く取り入れられ、教科別の特別教室も十分に配置されていました。一九九〇年頃、習熟度別授業が導入されると、少人数授業の教室が必要になり、空き教室だけでは対処できない状態になりました。一九九九年には大きい特別教室を分割し改修しました。第一被服教室は、三特－一、三特－二教室、合併教室は四特

※1　村野藤吾：日本の代表的建築家。甲南女子大学の設計も担当

※2　東畑謙三：東畑建築事務所創立者、当時の学園理事

＊（建築の経緯は山本栄喜「甲南女子中学高校校舎移転建設記」『五十周年記念誌』に詳述されています。）



中高間の芝生の中庭



1977年頃の校舎全景

室は四特－二、四特－三教室にそれぞれ、分割・変更され、他にも理科教室は四特－一教室、社会科準備室は三特－三教室にそれぞれ少人数授業の教室に変更されていきました。更に第一会議室も分割して授業に使用することもあり、理想の学び舎もあちこちで不都合が生じて、教室不足の解消は最重要課題でした。

学校改革で二〇〇八年にSアドコースが始まり、一学年五クラス編成が年次進行すると、六学年計三〇クラス編成になり、抜本的な解決策が必要でしたが、事態は簡単ではありませんでした。校舎に対する愛着と、中高単独会計では収支が赤字だったこともあり、新校舎建設という大胆な発想はありませんでした。そこで、六教室のみの増築案を中心に模索が始まりましたが、建物の老朽化で天井や壁の雨漏りの補修工事も度々行われるようになって、全面建替えが早晩必要になることも事実でした。教室不足を増築で対処できたとしても、やがて全面建替えが必要になった時、増築部分が計画の妨げになります。また、各学年一クラスだけ新しくなるのは教職員の賛同が得られませんでした。新校舎建築計画は、校長以下教職員はみな苦しい選択と決断を迫られていました。

大榎校長はこの状況を打開すべく、学園に「中高新校舎建築委員会」の設置を求めました。（委員会は学園側四名、中高側六名で構成）

三．新校舎建築プランの経緯

当時、学園は新校舎建築基金として一三年間で二六億円の校舎建築基金の積み立て計画が進行中でしたが、大榎校長は不足分の教室を増築する方向で模索していました。予算面の不安があったのだと思われます。しかし、前述のように六教室増築と現校舎[※1]の改修では将来を見据えた教育環境が実現できるかどうか、工期や工費の面から考えても有効策とは言えませんでした。学園側からするのは工事が完了するまでグラウンドが犠牲になることや、動線が悪くなることなどで見送られました。

●**「テニスコート案」**テニスコートの面積では窮屈さがありましたが、以後、三階建て、四階建て、五階建て、八階建てなどいくつものプランが模索、検討されました。

新校舎の建築計画は大林組の提案を皮切りに双星設計、東畑建築事務所の様々なプランが駆け巡りましたが、その結果、委員会ではテニスコートからプールまでを敷地とした「東畑A案[※2]」に決定しました。このことは職員会議（二〇〇九年五月二二日）で報告されましたが、予算（二六億円）を大きくオーバーしていることが理事会で問題になり、再検討されることになりました。

理事会は再修正案の東畑二案、双星三案を検討し、プールを残す「双星C案」を基本案としました。その結果設計主管は双星設計と決定しました。

学園はこれを基に改めて設計コンペを双星、東畑の二社に指示し、以後の具体的な作業は中高に新たに設置された「建築委員会[※3]」が中心になって進めることになりました。

※1　現校舎：新校舎計画中の村野藤吾設計の校舎の呼称

※2　「東畑A案」は、甲南女子の教育方針や校風を基にしっかりとしたコンセプトが提示され、中学と高校の独立性と自然な一体感をゆったりとした配置の中で実現している。将来への建築計画の展望を踏まえた魅力的な設計でした。

※3　「建築委員会」は大榎・清水校長以下九名の代表委員で構成されました。

四．新校舎の設計コンセプト

四〇年前、眺めの良い甲南の丘に建てられた校舎は生徒たちの伸びやかで心豊かな感性を優しく育んでくれました。それは山本藥喜校長の願いそのものだったのですが、そんな甲南に相応しい新校舎の形を模索した設計者倉橋尉仁氏は今回の設計にあたっての想いを次のように述べています。

九〇周年を迎えたこの甲南女子中学校・高等学校には二つの大きな特徴がある。一つ目は恵まれた立地環境。神戸・六甲の豊かな自然の恵みに抱かれた標高七五mの敷地からは大阪平野から瀬戸内までパノラマで一望でき、さながら緑に抱かれた展望台にいるようである。そして二つ目は積み重ねてきた歴史。既存校舎群は、庭から茶室に至るまで、すべて村野藤吾氏の作品であり、四〇年以上経た今もなお、独特の風合いを醸しながら皆に愛されている。新校舎の計画にあたっては、これら二つの特徴を最大限に活かし、甲南女子ならではの校舎づくりを目指した。

風と光と緑の学び舎

建物中央に三層吹き抜けの「光のアトリウム」を取り巻くように教室を配置した。六甲の自然の恵みを建物内部まで導き入れ、次代を担う生徒たちが、風・光・緑といった自然の中で大いに学び、語らい、活動し、それぞれの心象風景としていつまでも記憶に残る学び舎づくりを目指した。

伝統と創造の学び舎

既存校舎への増築であるため、新校舎は村野作品との調和に配慮して、素材、色彩、意匠等を決定した。さらに、新校舎から村野氏独特の造形美や庭を望める計画とすることで、甲南女子の長い伝統に対して、敬意を表した学び舎としている。

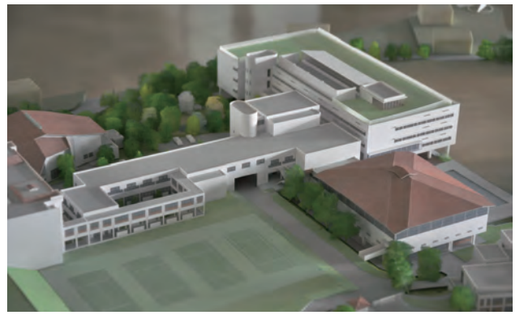
肌で感じられるエコスクール

「光のアトリウム」を通して自然通風・自然採光を促進する構成とし、屋上芝生広場を設ける等、学校生活を通じて、生徒が環境への取り組みを肌で感じられるエコスクールとした。また、太陽光発電パネルで普通教室の照明用電力をまかない、さらに建物の照明をすべてLED化する等、先進的な取り組みを行っている。

（「甲南女子中学校・高等学校」藤原直樹／双星設計　倉橋尉仁／東畑建築事務所『建築と社会』二〇一二年七月号）

このようなコンセプトをもとに「空気の流れ、交流・語らいの空間」が模索され、具体的に展開されていきました。新校舎の設計では、村野藤吾氏の設計理念を深く研究し、甲南女子の校風を理解し、調和のとれた形にたどり着いていることがわかります。

創立以来、甲南女子の生徒たちは友情を深め、広く友達の輪を大切にする。また教職員に対しても親しみをもって接することができる明るく穏やかな雰囲気があります。そのような校風は創立以来の長きにわたって培われてきましたが、それは本山の旧校舎や現校舎*の素晴らしい環境に育まれたものです。新校舎でも語らい・居場所・交流


新校舎の完成模型


日本庭園と新校舎


ピロティ式で開放的なデザインの新校舎


垂直水平のシンプルな構成の新校舎

を設計の基本として様々な工夫があります。アトリウムやプラザのテーブルセットやベンチは合掌造りの囲炉裏端のように、生徒たちの心を解きほぐし、寛げる空間になっています。

最新の設備が採用されていますが、機能性だけでないゆとりのある空間になっているのは、村野藤吾氏の設計理念を生かそうとした努力の成果でしょう。

また、講堂、特別棟、管理棟、図書館そして新校舎の本館に囲まれた空間には新旧の違和感がなく、回泉式日本庭園は新たに命を吹き込まれたように輝いています。改めて敬意を表したいと思います。村野藤吾氏もこのコラボレーションに納得してくれることでしょう。

＊二〇一九年、管理棟、特別棟、講堂、体育館、体育研究室、守衛室の六件が国の「登録有形文化財（建造物）」に登録されました。

五．竣工して

新校舎完成披露（二〇一二年三月一〇日終業式）

四四年前の引っ越しに比べるとわずかな距離ですが当時を思い浮かべながら、清水校長を先頭に和光会の役員たち、そして全校生が後に続いて新校舎に向かいました。それぞれ期待に膨らんだ気持ちを抑えながら、本館に入場するとそれは現実となりました。生徒たちは教室や新調された家具などの真新しい設備に驚き、感激して本館には歓声が響き渡っていました。

アトリウムでは完成を祝して愛唱歌「青春はいま」の演奏がコーラス部とオーケストラ部によって始まると、吹き抜けの手摺りには、生徒たちが鈴なりに並んでの大合唱となりました。甲南女子の新たな歴史の始まりを歓び分かち合う、忘れられない一日になりました。

新校舎見学会

新校舎見学の希望は多く、期待の大きさがうかがわれました。学園関係者はもちろん育友会、清友会など多くの皆さんに、日程を調整して見学会が実施されました。皆さん異口同音にこの素晴らしい校舎で勉強と、楽しい学校生活を送れることを羨ましくも喜んでいただいているようでした。

六．最後に

新校舎建築は遠い夢のようなものでしたが、この計画は大榎校長の発議で始まり、学園の決定に至るまで、加えて中高内でも慣れ親しんだ校舎を解体することに躊躇があり、意見集約が大変でした。新校舎建築の概要が決定した頃に、筆者が建築委員会（中高）の委員長を任されましたが、さまざまな要望や意見をどう反映できるか、新校舎がみんなに歓迎してもらえるように、設計・施工の皆さんと腐心しましたが、一つずつ形になっていくのは大変有意義な時間でした。更に、計画になかった沿革パネルの制作をさせてもらえて、甲南の素晴らしい歴史を知ることができました。このような形で新校舎建築という歴史の大きな節目に関わることができたのは大変光栄なことと心から感謝しています。

また、大榎前校長に新校舎の完成を見届けていただいたのは大変嬉しいことでした。




アトリウムでの大合唱

第七節　中高の現在の歩み

中・高校教諭　後田尚宏

一．文化祭と体育大会の統合へ

本校の体育大会は、全校生が縦割りの四つの団に分かれ、最上級生である高校三年生が団員である下級生をまとめながら、団の優勝を目指していくのが伝統となっています。二〇〇二（平成一四）年の第七四回大会から新設された「マスゲーム」は、各団高校二年生と一年生の協同演技となっており、高校三年生の「応援合戦」へ継続し、リーダーシップの育成につながるものです。

体育大会は、二〇一二年の第八四回大会までは秋に行われていました。高校三年生の応援団長を中心とした「応援合戦」の演技の準備は夏休みから始まり、本番を終える九月中旬まで高校三年生の生活は体育大会一色となります。甲南女子大学への内部進学一辺倒から、国公立大学や他の私立大学への進学を志望する生徒が増えていく中、体育大会終了後にいち早く受験モードに切り替えさせ、落ち着いた状態で秋を迎えさせることが毎年の課題でした。

生徒の進路目標の多様化は、自主的に行われる応援団の練習に対する思い入れの温度差として現れます。しかしながら、協同から生まれる団結力や熱い想いの共有がその差を埋め、大きな達成感を生み、生徒たちの力となっているのも事実です。

二〇一三年度に二コース制の一期生である六六回生が最終学年を迎えるに当たり、進路実績を生み出すために必要な要素のひとつとしてこの秋の課題を解決する必要があるという提案がなされました。そのため、前年の二〇一二（平成二四）年度に行事のあり方を抜本的に見直す行事検討プロジェクトが立ち

上げられました。そこで議論の中心となったのは、本校の二大行事である体育大会と文化祭のあり方でした。

本校の文化祭は例年四月末に開催され、文化部の舞台発表、作品展示、研究発表が中心となっており、高校三年生の部活動引退に向けた最終発表的な要素が強いものです。また、運営も高校三年生の和光会役員を中心とした文化祭実行委員会が行い、行事を通して高校二年生の次期役員にバトンタッチをしていきます。

つまり本校の二大伝統行事はともに高校三年生がリーダーシップをとる形態を取っており、甲南女子の学校文化を形成する上で特徴的であり重要な部分だといえます。伝統


体育大会終了後、四団と教員の集合写真

を守り高校三年生が行事の主体になることを第一とするならば、二大行事を春（一学期中）に実施することになります。

一方、二大行事を春と秋に分けて実施することを第一とするならば、秋に実施する行事の主体を高校二年生に移す必要があります。どの選択をしたとしても、新しい制約の中でも「今まで通りの行事」をしたい想いと、新しい制約に応じた「新しい行事」にすべきだという想いが錯綜することになりました。

生徒に何を学んで欲しいのかを考えたとき、上級生がリーダーとなり全校生がともに学ぶ場を作ること、与えられた条件の中で自分たちができる最大限のものを考え出す機会を与えることを外すことはできません。最終的に、五月一六日の職員会議で二大行事を春に行う「四月案」を決め、詳細については九月を目途に立案することが決まりました。育友会総会で概要を伝え、新行事のプロジェクト委員と和光会役員の合同会議を

二. 第一回 Konan Girls' Festival の開催

二〇一二（平成二四）年一二月二二日付で新しい行事「Konan Girls' Festival について」の案内が、清水徇校長、五百藏正雄行事検討プロジェクト委員長、石橋三波和光会会長の連名で保護者宛に発行されました。

「体育大会と学芸会・文化祭を含んだ約一週間に及ぶ新しい行事、甲南女子にしかない創造的な行事週間。この行事を、新校舎への感

積み重ねていくことになります。約一週間の間に、文化祭と体育大会、それらに付随する関連行事、その他の行事をどのように配置するのか、運営する生徒やバックアップする教員の動きも考慮しながら検討を進めていきました。甲南女子の歴史に残る新たな一ページを作り上げるため、その後約半年の期間を要することになります。

謝の気持ちを持ちつつ、甲南女子の新たな歴史を刻む素晴らしいものに育てていきたいと思っています。

この新たな行事週間の名称を、和光会が中心になって全校生から募りました。幾度かの選考を経て三つに絞られ、決選投票を行いました。その結果、Konan Girls' Festival が選ばれました。最終的には理事会の承認を経て、Konan Girls' Festival を正式名称にしたいと考えています。」

最終的な調整を経て、「年間行事予定表」は次のように記されています。一般公開日に加え、在校生だけで楽しむ「校内文化祭」や、運営の手助けをするボランティアの「フェスティバル委員」などが新設されました。

なお、'Konan Girls' Festival は、その頭文字をとった「KGF」を略称として用いています。

四月

（九日～一九日KGF準備

期間）

一七日　KGF準備
一八日　体育大会予行
一九日　健康診断、KGF準備
二〇日　学芸会、KGF準備
二一日　文化祭公開日
二二日　校内文化祭、体育大会準備
二三日　代休
二四日　体育大会練習
二五日　体育大会

これに加え、二〇日の午後には「運動部対抗招待試合」が企画され、松蔭中学校・高等学校のアーチェリー部、バスケットボール部、ソフトボール部をお招きし、親善試合が行われました。応援にはボランティアのチアリーディングチームが組織され、応援に華を添えてくれました。

また、二一日には、二〇一二ロンドンオリンピック銀メダリスト（アーチェリー男子個人）の古川高晴選手をお招きし、模範演技と銀メダルを披露していただきました。

春期休暇からKGF終了まで、慌ただしい毎日でしたが、新しい歴史を刻むのだという思いに後押しされながら頑張り通した一ヶ月でした。また、KGFの立案から開催に至るまでの過程で、例年通りのルーチンをこなすことから脱却し、「与えられた条件の中で最大限のパフォーマンスを引き出すための創意と工夫」に取り組めたことは、生徒にとっても教員にとっても貴重な経験でした。

なお、二五日の体育大会は、前日二四日が雨天だったため、グランドコンディションが悪く、翌日二六日に順延されました。

三. 二大行事統合の余波

大きな行事の移動のため、その内容だけではなく、他の行事の開催や内容についても変更を余儀なくされました。

KGFの準備のため、三月から四月、とりわけ春期休暇中の多忙が予測されるため、次の二学年のスプリングセミナーの変更を行いました。

○中学一年スプリングセミナー（七一回生）
・四月一日～三日の実施
・一日　校内で研修、終了後帰宅
・二日、三日　校外施設で一泊二日の研修

これを、実施期間は変えず、三日間とも校内での研修のみの日程に変更しました。

○高校一年スプリングセミナー（六八回生）
・三月三一日～二日の実施
・校外の施設における二泊三日の宿泊研修

これを、期間を七月二三日～二五日に変更し、「サマーセミナー」として実施することになりました。それに伴い、宿舎の変更とともに、内容についても高校入学時研修から変更せざるを得ませんでした。

なお、体育大会では、中学一年生の演目「リズムに乗って」（ダンス）が「新記録に挑戦!!」（大縄跳び）に変更されました。入学後からの練習時間ではダンスの振り付けの指導が不十分であるという理由からです。そのため従来からあった団対抗の大縄跳びを、クラスづくりの一環として、クラス対抗の競技に変更しました。

思いもよらぬことで頭を悩ませたのは、毎年閉会式で歌う「体育大会歌」です。二番の歌い出しが

♪秋風さやに吹きそよぎ
　白萩こぼるる校庭に立ち

となっており、「秋風」は言うに及ばず、「萩」は秋の季語です。歌詞を書き直すか、新たに作り直すかなどが思い浮かぶところですが、「昔から歌い継がれてきたものなので、そのまま大切にしていく」という生徒の意見に落ち着きました。

四. KGFの見直し

嵐のように慌ただしく過ぎ

去った第一回ＫＧＦでしたが、その終了後から、第二回に向けての見直しをすることになります。

行事の整理・統合の議論の過程で、「四月案」は支持と不支持に分かれた経緯がありましたので、第一回ＫＧＦの振り返りでも当然のごとく賛否両論がありました。とくに二大行事を約一週間に収めたことから生じた弊害についての内容が多く、「元に戻す」案や、今回のＫＧＦを決める過程で吟味してきた案が再び浮上することになりました。

しかし、当初の課題として「高校三年生主体の行事を秋に置かない」こと、目指す学びとして「高校三年生がリーダーである」、「制約の中で最大限の工夫をする」ことを覆すわけにはいきません。

生徒へのアンケート結果で印象的だったのは、高校三年生と二年生で賛否が大きく分かれたことです。三年生は今後も今回のＫＧＦを踏襲して欲しいという意見が多く、二年生は体育大会を九月に戻して欲しいという意見が多いという結果でした。企画・運営の中心であった三年生は新行事を完成させたという達成感が強く、二年生は慌ただしく行事に振り回されたという疲労感が強かったのではないかと思われます。

アンケートの「疲れた」という意見は、よく頑張ったという証ではあるものの、ケガも含めた健康管理や、体育大会の演技の安全管理のあり方は、次回のＫＧＦの運営に向けて大きな課題のひとつとなりました。そのため、文化祭と体育大会の開催時期を一学期内でずらす案が有力となっていきますが、それをさらに決定づけたのは、「ひとつひとつの行事を大切にしたい」という生徒の想いでした。

これらを受け、生徒の健康・安全管理を軸に、二大行事を一学期中に適当な間隔を開けて開催する案を作成するため、第二次のＫＧＦプロジェクトが立ち上げられました。

主な課題は次のようなものになります。

・行事の開催日の置き方
・生徒の健康管理、安全管理
・ＫＧＦとしてのまとまり

○行事の開催日の置き方

当初は以下の五つの案が示されました。

Ａ案：第一回ＫＧＦの日程に若干の余裕を持たせたものＢ～Ｅ案：四月の中・下旬と五月の初旬のそれぞれに、文化祭あるいは体育大会のどちらかを開催する案

二つの行事の間隔が適当か、文化祭の練習や準備の流れが中断されないかという視点で、Ｂ～Ｅ案のうち、「四月に文化祭、五月に体育大会」案が有力となりました。

しかし、ここで体育大会の開催日について大きな課題にぶち当たりました。四月下旬から五月にかけては多くの運動部で公式試合があり、体育大会を例年通り土曜日あるいは日曜日に開催すると、この試合と重なる可能性があるということです。

高校三年生にとって、この時期の試合は高校生活最後の試合になります。一方、体育大会も六年間の積み重ねを経た団のリーダーとしての最後の大会になります。

高校三年生の最後の体育大会を不参加にさせたくないという想いが強くあり、代替案として体育大会の平日開催の可能性を探ることになりました。

しかし、これについては、当時の理事長より体育大会は土曜日あるいは日曜日に開催するようにという指示があり、生徒たちの中からも保護者が見学しやすい土日がよいという声があったようです。

かくして公式試合のトップシーズン中の土曜日または日曜日に、全員参加の体育大会を開催するという難題に向き合うことになりました。

生徒に行事か試合かの選択をさせるのは酷であるし、とくにチーム競技では個々に選択させることは不可能です。また、第一優先は体育大会全員参加とし、顧問は年間の試合の参加について取捨選択をして、体育大会には参加させるという意見もありましたが、正しいけれど現実的ではないと思われます。

最終的に、試合が行われない土日があるとすれば、それは公立高校の中間考査期間およびその直前の土日であると考え、体育大会の開催日を設定することにしました。そうすることで、文化祭には最低一日は参加でき、体育大会には全員参加、運動部の試合にも出場できます。デメリットとしては、体育大会が中間考査一週間前になること、天候等で順延した場合は考査までの期間が短くなることなどがあります。

○生徒の健康管理、安全管理

ＫＧＦ以前、体育大会の準備期間の生徒たちの状況は、朝練、昼練、放課後練習と、よく言えば一生懸命なのですが、優勝に向けて猪突猛進、周りも自身も見えず、自分の体調や周囲への心遣いも不十分になりがちでした。昼ご飯は昼休みに食べるべきです。すべきときにすべきことをする、与えられた時間の中で主体的に見通しを立て工夫していく力をつけて欲しいと考えました。

四月はじめの文化祭の準備週間では、文化部、運動部ともに部活動を優先します。体育大会の練習は体育の授業、ＬＨＲで行うこととして、応援団四役とマスリーダーの打合せ以外の朝練、昼練、放課後練習を禁止にしました。

文化祭終了後の体育大会の準備週間（体育週間）は、放課後に応援団とマスゲームの優先練習時間帯を設け、それ以外の練習は禁止しました。

応援合戦等の危険な演技の制限としては、ピラミッドの土台の高さを二段までにしました。各団の練習時間帯については練習計画を作成させ、ピラミッドやリフトなどを行えるのは教員が配置されているときのみとしました。

○ＫＧＦとしてのまとまり

一週間内に収まっていた学芸会・文化祭と体育大会が、約三週間に広がったため、全校生の一体感をいかに保つかが課題となりました。生徒たちは、文化祭開始前にオープニングイベントを、体育大会終了後にクロージングイベントを置くことで、ＫＧＦとしての一貫性を持たせる工夫をしました。

以下、二〇一四（平成二六）年度第二回 Konan Girls' Festival の日程です。

四月
（一〇日～二六日　文化祭準備期間）
二五日　オープニングイベント
二六日　文化祭準備・展示準備
二八日　学芸会、校内文化祭
二九日　文化祭公開日
五月
（一日～一三日　体育大会準備期間）
一四日　体育大会予行
一七日　体育大会、クロージングイベント

なお、この日程の変更に伴い、高校一年生のサマーセミナーは一年で終わり、元のスプリングセミナーに戻りました。

五．二コース制における教育課程と複雑化する時間割編成、人員配置

（一）教育課程

現在の教育課程は、第五節に記載されている二〇〇七（平成一九）年の「普通科新コース設置の計画趣意書」を踏襲し、大きな変更はありません。

二コース制でありながら、本校の教育方針「自学創造」を具現化した探究型授業（中学二年「平和」、高校一年「探求」）が両コース共通の教育内容や実践で成り立っていることは大きな特徴であるといえます。

進路志望の実現に大きく関わる「発展期」（高校二年・三年）の教育課程の推移については次の通りです。

単一のコースで、甲南女子大学への内部進学が中心の時代には、二時間連続・四クラス同時展開の「自由選択」枠を設け、語学系（フランス語、

現在、発展期の教育課程の系統は次の通りです。

○スタンダードコース（三クラス）
　高校二年生（三系統）
　　国公立文系、理系、私立文系
　高校三年生（七系統）
　　国公立文系、私立文系一・二
　　国公立理系一・二、私立理系一・二
○Sアドバンストコース（一クラス）
　高校二年生（三系統）
　　文系、理系一・二
　高校三年生（三系統）
　　文系、理系一・二

一つの系統が必ずしも一つのクラスにはならない上に、それぞれの系統の中にも、世界史か日本史、物理か生物といった選択があります。いくつかの系統を組み合わせてクラス編成を行った上で、クラスごとに複数講座の同時展開授業を置く必要があります。このように、設定された系統を単位時間数通りに展開していくのが時間割の編成作業になります。

（二）時間割編成

単一コースで選択科目がすべて「自由選択」枠にまとめられている時代の時間割編成は単純でした。各講座を条件に沿っていずれかの曜日に振り分け、教務部員数名が自分に割り当てられた曜日の六学年分を組み上げて持ち寄るという方法です。それらを調整し、時間割を完成させることができました。

単一コースの時代であっても、英語と数学において二クラスを三分割した習熟度別授業を導入した時期から時間割編成が複雑になり始め、時間割表の形をした大型のボードに講座のコマをはめ込んでいく方法で編成作業を行うようになりました。生徒用時間割と教師用時間割に矛盾が生じないように、複数の教員が各講座の諸条件を確認し、それぞれのボードにコマを入れていく作業です。教務部員の協働作業が中心となり、多くの人員と時間を要しました。

長く続いた方法でしたが、二〇一二（平成二四）年度、新校舎に移る際、ボードの掲示や作業をする場所がないことから、このボードを廃棄し、別の作業方法を検討することにしました。二コース制の教員の配置が進む中、教務部にこの協働作業ができる人員が確保できないと判断したことも作業変更の大きな要因でした。

そして、時間割編成の難易度が一気に高くなったのもこの年度からです。全学年が五クラス構成、週六日制、全教員に授業のない半日を週二回確保するという新たな条件が加わりました。さらに全学年でSアドバンストが二クラスとなった二〇一四（平成二六）年度以降は、とくに高校二年生・三年生で一クラスを複数人で分割するコマが増え始め、自由度が低い、言い換えれば担当教員を拘束する時間割となっていきました。

一学年五クラス構成になったことで、教育課程の時間配分上は問題がないように見えても、時間割編成上で大きな障害にぶつかることがありました。それは高等学校の必履修科目である芸術です。本校では「芸術選択」として、音楽、美術、書道のいずれかを選択させる形をとっていますが、一学年四クラスのときには、二クラスずつを同時展開での三講座に分割し、人数を調整しながら少人数クラスで実施していました。しかし、一学年五クラスとなるとこの分割が複雑になります。五クラスを二分割した二・五クラスをつくり、それぞれを三分割するわけですが、現在「実用英語」が一クラスを二分割して実施していることを利用しています。これらが高校一年生、二年生に置かれているため、非常に複雑な時間割になっています。

ボード廃止後は、パソコンを用いた時間割編成をしています。膨大な条件を漏らすことなく最適なコマ入れをしてくれ、最終的な調整もパソコンを用いた手作業が可能です。複数人が作業日を決めて集まり、条件が書かれたたくさんの書類をめくりながら編成作業を進めることの効率の悪さを考えると大きな利点があるといえます。ただ、初期条件の入力は分担できても、最後の調整は操作に慣れた人の仕事になりがちであることは避けられません。どのような業務でも「慣れた人に」の傾向は強いですが、「パソコンで」となると、その傾向はさらに強まるようです。

（三）人員配置

二コース制がスタートした二〇〇八（平成二〇）年度は、中学一年が五クラス、その他が四クラスで合計二五クラス、専任教員（教諭、常勤講師、外国人講師）は四八名でした。当初の計画では、中学一年生・二年生が五クラス、中学三年生以上が一学年四クラスでしたので、二〇〇九年度から合計二六クラスが続く予定でしたが、この年度の入学生から六年間五クラスが続くことになり、二〇一〇年度二六クラス、二〇一一年度二七クラスとなりました。さらに、二〇一二年度に本来四クラスの学年も五クラスにしたため、合計は一気に三〇クラスとなり、これが現在も続いています。二〇一八（平成三〇）年度現在、合計三〇クラス、専任教員五八名で、この一〇年間で授業総時間数が約一五〇時間増え、専任教員が一〇名増えています。

学年担任団の構成は、単一コース四クラスの学年では、クラス担任四名と補助をする学年担任一名で、学年主任は四組あるいはD組の担任を兼任していました。二〇〇八年度から二コース制の学年では、各クラスの担任と学年主任で、学年主任はクラス担任を兼任しないことでスタートしました。翌年、学年にSアドバンストコースがあるかどうかにかかわらず、中学の学年主任はクラス担任との兼任がなくなりました。それは翌々年にも年次進行しますが、二〇一〇年度は全学年で学年主任はクラス担任との兼任がなくなりました。ところが、二〇一二～二〇一四年度の三年間のみ、中学の学年主任がクラス担任を兼任することになり、二〇一五年度以降再び全学年で学年主任はクラス担任を兼任しないことになりました。

現在の専任教員五八名の内訳は、教頭二名、部長四名、各部員一六名、学年担任団三六名になります。これに校長、副校長を加えた六〇名が中学校・高等学校の人員構成です。なお、二〇一七年度より、校長以下の配置を、校長―教頭―副教頭から、校長―副校長―教頭に変更しています。

六．授業力向上への取り組み

「人間教育の進展」と「進路志望の実現」の二兎を追うことでスタートした二コース制でしたが、教育課程などの仕組みとともに、進路実現に向けた各教員の学習指導力の向上も大きな課題でした。

それを受け、二〇一三（平成二五）年三月、「授業力向上プロジェクト」が立ち上げ

・後期ミーティング　一／一〇～三／二八　全三回

活動成果として

①相互授業観察

・甲南女子「授業方針」

授業観察実施要領を策定

・甲南女子「授業スタンダード」

授業観察シート（共通・各教科）に展開して制定

・授業観察

二〇一三（平成二五）年三月以降全三回実施

②授業アンケート

・「二〇一三年授業アンケート」作成

・授業アンケート実施

全体での実施は延期され、二〇一四（平成二六）年二月に任意で計一四名の教員で実施

われわれ教員は、生徒が到達すべき目標を念頭に置いて授業を行い、その到達の度合いを評価しています。当然教える側にも目標があり、その到達の度合いを評価し、それをもとに授業を改善していく必要があります。

本校では、二〇一四（平成二六）年度から授業アンケートが始まりました。授業アンケートにおいて、生徒が評価者になり得るかどうかが議論にのぼりますが、授業の受け手は紛れもなく生徒です。授業観察においても、先生の話術や板書だけを見るのではなく、生徒の表情や動きを観察することが大切だと思われます。

七．中学入試の動向

統一入試日に各校が一回だけの試験を行うというのは遠い昔の話となり、昨今は複数の日程に加え、午前と午後に二回の入試を行うことが当たり前になってきました。少子化のため、統一入試日一回の試験で各校が相当数の受験生を確保することが非常に困難になったために、トップ校や競合校の併願先になるような日程になっています。大手塾の調べでは、統一入試日とその翌日の二日間で平均三・三校を受験していると言われています。

入試の内容については、半日で行うことから教科の数の減少、国公立中高一貫校との併願を考慮した適性検査型入試の実施、英語教育重視の観点から英語入試の実施や検定試験の結果を加点対象とするなど、さまざまな特徴ある入試が実施されるようになってきました。

本校の中学生の募集は、教科の筆記試験を中心とした一般入試枠と、出身小学校からの推薦枠があります。

推薦枠の募集として、私立甲南小学校から三〇名弱、二〇一七（平成二九）年度入試より、私立須磨浦小学校から一名があります。

本校の二コース制導入以降の一般入試枠の生徒募集状況は次の表の通りです。

二〇〇八（平成二〇）年度入試より、Sアドバンストコース一クラスでスタートした中学入試ですが、翌年に結果としてSアドバンストコース二クラスの合格を出しました。正式には、二〇一〇年度入試より、Sアドバンストコース二クラス、スタンダードコース三クラスの募集となり、以降年次進行で六カ年五クラス体制に移行しました。

統一入試日の入試科目として、四教科（国語、算数、理科、社会）を課すのは一部の女子校のみになり、男子校、共学校を含むほとんどの学校が三教科（国語、算数、理科）の受験に推移していきました。そのため、受験勉強自体を三教科に絞る受験生が増加しました。本校では二〇一一年度入試より、四教科の受験をした上で、判定得点として、四教科の合計点と三教科（国算理または国算社）の合計から算出した得点のうちの最高の点数を採用する方式をとりました。

二〇一七年度より、出願方法を郵送からインターネットに変更し、合格者発表もその翌年から各受験生がインターネットで合否を照会する形に変更しました。これにより事務手続などの省力化が実現しましたが、合格発表の掲示板の前で繰り広げられる受験生の歓喜と落胆が交錯する風景は消えていきました。

八．卒業生の進路実績

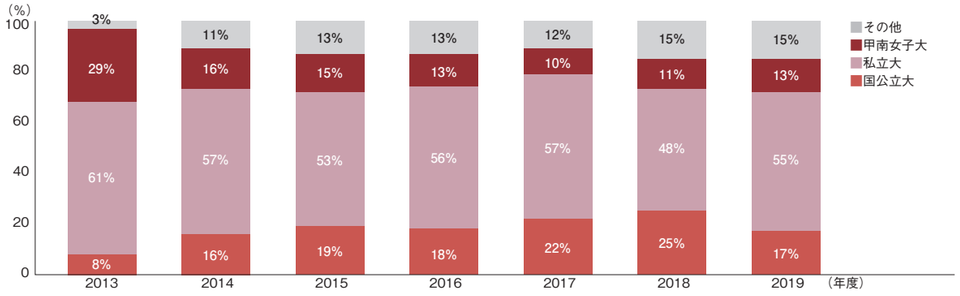
二コース制に移行後、明確に外部（国公立大）受験を謳っているSアドバンストコースの生徒のみならず、スタンダードコースの生徒も外部受験を目指すという傾向が強まりました。中学入試でSアドバンストコースからスタンダードコースへ移行合格した生徒の外部進学志向や、行事や部活動など両コースに共通した学校生活を通じて「受験・進学」に対する話題を共有していることがその原因であると思われます。

グラフは、二〇一三（平成二五）年度から二〇一九年度の入試における、進学先の推移を表したものです。二コース制の第一期生は二〇一四年度になります。

■ 2コース制以降の中学入試（生徒募集の変遷）

年度＼日程	スタンダード A入試 1次	スタンダード A入試 2次	スタンダード B入試	Sアドバンスト A入試 1次	Sアドバンスト A入試 2次	Sアドバンスト B入試	合計	備考（Sアドの○は移行合格あり）
2008～2009	105	–	–	35 ○	○	○	140	2009年度はSアドバンストを2クラスとして合格を出した
2010	75	–	10	60 ○	–	–	145	Sアドバンストを2クラスに変更
2011～2014	75	–	15	65 ○	–	–	155	2012年度よりA入試1次で3科判定も行う
2015～2017	75	–	15	65 ○	–	○	155	B入試のスタンダード単願者の合格数は10以上
2018	90			65 ○	–	○	155	B入試のスタンダード単願者の合格数は5以上
2019～2020	80		10	65 ○	○	○	155	

■ 進学先の推移



第三章　大学・短期大学の歩み

第一節　大学の開設

教授　米田明美

学を代表して、世界の女子大学に伍して行ける大学として発展してほしい。一般に日本の女子大学はレベルが低い、是非国際的な、洗練された大学になってほしい。米国のみならず、欧州にも数多くの姉妹校を持ち、国際的な学生交流を行い、世界の文化交流に寄与してほしい。甲南ならば、それが可能であるから、特に要望するのである」という声を受けてのことであったのです。

一九六三年発行の『大学案内　一九六四年』最初の頁には、理事長（阿部孝次郎）・学長（山本栄喜）と学舎から見た遠望の写真とともに、甲南女子大学開学の意義を「甲南の道」と称し、高らかに述べています。学園沿革史の後、

「この甲南建学の伝統のおのずからなる成熟であり、また、時代と社会の強い要請にこたえたものである。本学においてはこの甲南の道を基調として、広く知識を授け、深く専門の学術を教授研究し、誠実にして品位ある人格を養うとともに、教養高い女性を育成し、もって国家、社会の進運に寄与することをその目的としているのである。」

そして次頁以降では、学士の称号について「文学部を置き、国文学科、英文学科の二専攻部門を設ける」「四年以上在学し、所定の課程を修め、単位を取得したものには、文学士の称号を与える」と記され、また「各専攻には教職課程」をおくこと、そして「所定の教育課程を修了したものには中学校教諭一級普通免許状および高等学校教諭二級普通免許状が各専攻科目について与えられる」が書かれていました。四年制大学開設時の学科定員は、両学科とも一〇〇名でした。

そして英文学・国文学の別なく「美しい日本語」と「英会話」を本学の柱とするカリキュラムが組まれ、学内・学外から



大学案内 1964

一九六四（昭和三九）年四月、国文科・英文科を持つ甲南女子大学が発足し、四月二一日、第一回甲南女子大学と第九回短期大学の入学式が挙行されました。甲南女子学園建学四四年目、終戦から一九年目の出来事でした。折しもわが国最初の東京オリンピックが開催されるので、国民全体が新しい時代の訪れに歓喜していた年でもありました。

講堂はまだ工事中でしたので、入学式は、現在の第一学生会館で挙行されました。大学文学部の入学生数は一八二名、短期大学一年六三名、二〇日に入学式が行われた短期大学からの編入学の国文学科三年生は四八名、二年生二三名、英文学科は二年生六七名でした。学生たちは、全員田中千代氏デザインの濃紺の制服[※1]に身を包み、荘厳な雰囲気の中希望にあふれた式でした。

既に阪神間では、神戸女学院・武庫川学院が四年制の女子大学を次々と開学していました。その中で、本学の目指す女子大学像について、大学初代学長の山本榮喜は、甲南女子大学学則第一条に、
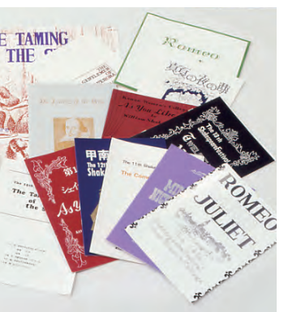
「本学は個性尊重・全人教育の伝統を基調として、広く知識を授け、深く専門の学術を教授研究し、誠実にして品位ある人格を養うとともに、教養高き女性を育成し国家社会の進運に寄与することを目的とする」

と甲南女子大学の教育方針を掲げ、他の女子大学との差異、本学の独自性を高らかに表明しています。実は前年の一一月に、大学設置審議委員が現地審査の際に、審議委員からの要望として、「甲南女子大学は、日本の女子大


公開講座


文学散歩 犬養孝教授


開学式



第1回からの
シェイクスピア祭のプログラム

多彩な講師を招く講演会も開催されました。講堂ができあがってからは、全学生が一同に集い、著名な講師を招いての講演を聞き、次週はその講演内容に関し、クラス毎に討議を行い、知識を深めていったそうです。毎年毎月のようにその道の一流の学者・識者を招いての講演を行い、学生たちは熱心に聞き入っていたそうです。

国文学科では、短期大学でも行われていた文学散歩を充実させました。当初は学年を超えての有志旅行として、一九六五年は伊勢・志摩めぐり、一九六六年三月は熊野・那智方面、一九六七年は南房総と毎年行っていました。この旅行では文学調査の意味合いもありましたが、一年生は上級学年と対話ができる絶好の機会であり、知識教養以外の面でも先輩方の立ち振る舞いや言葉遣い、優しさに触れ、大いに学ぶこと多かったそうです。また学科独自の講演会も開催されました。

一方英文学科では、会話の時間を多くとり、Language Laboratory（語学視聴覚教室）の設置や多数のタイプライターを準備するなど、読めても話せないという従来の在り方を改め、語学基礎力の充実に力を入れました。そのためにネイティブスピーカーの専任教員をイギリス人・アメリカ人各一名ずつ配置しました。英文学科でも学科独自の講演会が開催されました。第一回目は尾崎寄春氏の「ロミオとジュリエット」でした。

さらに独自のもので、他大学の追従を許さぬもの、そして学生に夢と自信を与えることのできる行事として、和知誠之介教授の提案で、原語によるシェイクスピア劇を演じることになりました。学生が台本作りから大道具小道具衣装まで自分たちで造り、英語でシェイクスピア戯曲を演じるシェイクスピア祭が一九六六年「お気に召すまま」で開催されました。このシェイクスピア祭は、毎年続けられ、現在五五回目となっています。[※2]

同年一一月一〇日に、甲南女子大学開学式が行われました。村野藤吾氏の設計により、六甲山麓の広大な土地に建設された白亜の校舎群、開架式図書館や講堂など、当時の大学としては素晴らしい内容でした。

大学の評判は阪神間だけでなく全国におよび、特に名古屋以西から入学を希望する受験生のため、一九六七年には大学近くに、清心寮（一二二名収容）が竣工しました。[※3] 大学全体で夏休みには、北海道旅行、信州旅行、冬は北海道旅行が企画され、学生と教員、学生同士、学年や立場を越えた親睦が図られました。

また一九七一年には、図書館職員を養成する司書課程を設置しました。さらに同年夏、広く地域住民のために、第一回国文学夏期講座を開催しました。これは大学の講義を気軽に聞くことが出来ると大変好評で、一三年間続きました。[※4]

一九七二年、五月一〇日に山本榮喜学長の退任式が行われ、第二代学長、第三代短期大学学長に鰺坂二夫が就任しました。山本は一九五八年から一四年間の任期中に、日本中が敗戦後の経済的に困難な状況であった中、女性の地位向上と女子教育拡充のため甲南女子大学開学、そして教育基盤充実のための甲南女子中

第二節　大学の発展

教授　米田明美

鯵坂は京都帝国大学文学部教育学科を卒業し、京都大学教授を退官後、本学学長に就任しました。鹿児島の教育一家の出身で、叔父に玉川学園（玉川大学）の創立者の小原圀芳氏、実弟に明星大学学長を務めた児玉三夫氏がいます。文部省教育職員養成審議会の会長も務め、教育学の権威で、教育行政にも明るい方でした。着任後、大学の財政基盤が寄付金頼みであることを憂慮し、今後の健全な大学運営を計るため、様々な変革を主張しました。折しも戦後のベビーブーム後の高校生たちが次々と大学進学を目指し、女生徒も進学先を短期大学や四年制大学にシフトし始めた頃で、文部省も各短期大学に定員増を求めていました。学生募集において、非常に有利な時代でありました。

一九七五（昭和五〇）年に、文学部に人間関係学科（心理学専攻・教育学専攻・社会学専攻）を定員一〇〇名開設し、そのために五号館を竣工しました。この人間関係学科の構想は、鯵坂が就任した時から、第三の学科設置が模索されていました。多様な研究領域が構想された中、種々の検討を重ねた結果「人間科学」の領域を新学科の主要分野とすることに落ち着きました。そして当時としては珍しい学科名「人間関係学科」とし、社会教育主事・博物館学芸員課程もカリキュラムに含めました。

教育と研究の体制についてはつぎのように記載されています。

「人間関係学科は、「人間の学」としての総合的な人文科学の構成を目ざし、同時にその研究と教育という使命を果たすため、三専攻分野の原論を柱とし、人間科学論の展開と学科を構成する授業科目との相関を構造的に発展させようとしている。すなわち、

1）個人と集団との行動特質を研究する心理学専攻

2）人間関係、集団組織とその変動などを研究する社会学専攻

3）人間の発達と陶冶およびその計画などを研究する教育学専攻

上記三専攻分野とその研究部門が用意され、哲学や史学的分野も参加して多角的な人間研究への道がひらかれている。

人間関係学科は、広い視野をもって激動する社会に対応していけるような人間形成を目ざしており、卒業生にも積極的な社会活動を期待している。

主な活動分野としては、児童相談所、各種福祉施設におけるケースワーカー、指導員、家庭裁判所調査官、教育研究所などにおける心理判定員、カウンセラー等。教育分野では社会教育主事（一年以上の経験により資格取得可）、あるいは学校カウンセラーになることもできるし、さらに調査、広告会社やマスコミ関係への進出も可能である。その他取得可能な資格としては博物館学芸員のそれがあり、この方面でも大いに活躍が期待される。もちろん民間企業においても十分実力を発揮することができるであろう。」

また活発な運動部のクラブ活動を応援するために、体育館（猪崎記念体育館）を竣工、七月には、学生たちの研修場所として、長野県大町市日向山高原に「黒部山の家」[※1]を竣工しました。

一九七六年には、大学新図書館（阿部記念図書館）が竣工。全館完全開架式で二階中央に位置する閲覧スペースは三階まで吹き抜けになっており、周囲を書架が囲むという斬新なデザインでした。あまりに斬新なデザインに、鯵坂の「学生には贅沢すぎないか」という声に、設計者の村野藤吾氏は「教育にはゆとりが必要でしょう」と答えたという逸話が残っています。同年、小寺敬一氏の別荘を譲り受け、六甲山学舎と名付け、学生たちのセミナーハウスとしました。[※2]

また当時の女子大学では非常に珍しい、大学院を設置しました。一九七五年、大学院文学研究科（修士課程）国文学専攻・英文学専攻を開設。一九七七年に大学院文学研究科博士後期課程国文学専攻・英文学専攻を開設し、少しずつですが他大学からの進学者もありました。

一九七八年には文学部に定員四〇名でフランス文学科を開設します。国文学科・英文学科の両学科の定員を二〇名ずつわけてもらっての出発でした。この学科は、創設六年を経て一九八四年には、当時女子大学としては非常に稀な、大学院後期課程まで備えた教育が行われるようになります。小人数ゆえ教員と学生の距離が近く、学生たちの意欲と活気に満ちた学科だったとのこと。一九八二年には、第一回フランス演劇祭を開催しています。

この後、各学科とも定員増が認められ、一九七八年は国文学科・英文学科とも一三〇名、一九八〇年には人間関係学科一四〇名、一九八五年には二〇〇名に、一九八六年は、国文学科・英文学科とも更に臨時定員増が認められ各二〇〇名となります。学生数の増加に伴い、一九八八年に芦原講堂を竣工し、一九九二年にはその芦原講堂内にデンマーク製のパイプオルガンを設置し、披露のため演奏会が開催されました。同年には八号館を竣工します。またスクールバスの乗降に学生が溢れることから、スクールバス乗り場専用の土地を購入、整備しました。

その間、一九八一年には三笠宮殿下妃殿下が、特別学術講義のために来学、一九八五年には、当時の皇太子殿下妃殿下（現在の上皇上皇后）の行啓を仰ぐという光栄に預かっています。


清心寮


人間関係学科増設（心理学・社会学・教育学専攻）5号館竣工


体育館（猪崎記念体育館）


黒部山の家


六甲山学舎


三笠宮殿下妃殿下の特別学術講座



フランス文学科案内のパンフレット

学校・高等学校の校舎移転という大事業を次々と挙行、成し遂げました。

※1　田中千代…日本最初のデザイナー。

※2　二〇二〇年四月に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染防止のため、中止となる。

※3　清心寮は、一九九五年の阪神・淡路大震災後の一九九九年に閉鎖、その後取り壊され、その地はグランドとなった。

※4　夏期講座は一九七一（昭和四六）年から一九八四（昭和五九）年まで一三年間続いた。その後公開土曜講座（春季・秋季）として同年から一九九〇（平成二）年まで、全学科の教員による講演が行われ、多数の地域住民の参加があった。（『甲南女子学園七十年のあゆみ』二一五頁参照）

第三節　短期大学部の発展

教授　米田明美

短期大学は、家政科と国文科を有していましたが、一九六四年の大学開学の三月に短期大学国文学科は廃止、大学へ移行しました。鯵坂は、まず一九七四（昭和四九）年に短期大学を短期大学部に改称します。

その短期大学部には、新しく英語科を開設しました。入学定員は一二〇名でした。英語科のための校舎として二号館を建設します。英語科は、「実際に役立つ英語」志向を強く打ち出し、外国人教員による「オーラル・イングリッシュ」ＬＬ教室での「オーラル・イングリッシュ演習」その他「時事英語」「貿易英語」など特色ある科目を揃え、英語科教員免許状取得も可能でありました。

実学を中心に据えていたこともあり、受験者が殺到し、一九八一年には定員増の認可が認められました。定員が一〇〇名になったにも関わらず、翌年には志願者が一〇一六名という全学最高の人数となり合格倍率は推薦入試で三・三倍、一般入試は六・六倍という高倍率となりました。また就職率も常に九〇パーセントを超え、就職先は当時のトップ企業（有名都市銀行・一流商社など）でした。一九八六年はさらに臨時定員増が認められ、定員が二〇〇名になりました。短期大学部から大学の文学部英文学科へ編入する道もあったこともあり、人気は高く専任教員も六人から九人まで増員しました。

家政科は、一九五五年に定員四〇名で開設、五六年の入学者は四九名でした。当初から家庭科教員免許状取得できるようカリキュラムが組まれていました。二年後の卒業式では、四九名全員卒業し、そのうち三八名は教員免許状を取得しています。本学の目指す「家政科」は料理・裁縫の花嫁学校ではなく、住居や家族、家政管理にまで及び、時代を先取りした内容だったのです。大学開学の一九六四年に、今の森北町に移転しました。

一九七四年に短期大学を短期大学部に改称し、一九八一年には定員増が認められ一〇〇名となり、一九八四年は「食物栄養専攻」（定員五〇名）「生活科学専攻」（定員八〇名）を設置、栄養士養成課程認可のために七号館を竣工します。学生たちに広く学んでもらうために、講演会や海外研修旅行も取り入れ、実に贅沢なプログラムが用意され、学生たちも熱心に取り組んだということです。一九八六年は臨時定員増で定員一五〇人となり、一九八八年には生活科学専攻に「衣料管理士」「秘書士」


皇太子殿下妃殿下（現在の上皇上皇后）の行啓

※1　その後二〇〇二年に閉鎖。
※2　一九三四（昭和九）年に建築された別荘で、甲南女子学園の所有となったが、二〇〇〇年に閉鎖。二〇〇八年にナショナル・トラスト方式でアメニティ協会が購入、「ヴォーリズ六甲山荘」。


タイプ教室


LL教室

第四節　大学の改組

教授　米田明美

一九九二年に八号館メディアセンターを竣工しました。

一九九五年一月一七日の未明、兵庫県神戸市と淡路市を中心とするマグニチュード七・三の大地震がおこり、本学を始め神戸市街地は大打撃をうけました。阪神淡路大震災です。六四三四名が地震で倒壊した建物・火災で亡くなり、本学の学生一人も犠牲になり、保護者四名卒業生二二名の尊い命が奪われました。校舎の被害も甚大でしたが、ライフラインも絶たれまだ携帯電話が普及していない中、教職員一同学生の安否確認に奔走しました。他にも期末試験の中止とそれに対する対応、入学試験の延期と試験場探し、被災した受験生対象の特別入試と次々と難題が待ち構えましたが、予定通り卒業式は芦原講堂で行い、四月には入学式を挙行しました。

不景気の余波が続く一九九九年に、第四代学長・第五代短期大学部学長に宮城宏が就任。宮城は、学内教員による選挙によって選ばれたはじめての学長でした。学長任期は三年、二期計六年までという取り決めになりました。家族社会学を専門としていましたが、一方で京都宇治の平等院の代表役員住職でもありました。この頃の大学の学生総数は（大学院生も含めて）約四七〇〇名、専任教員数も一〇〇名に近く、毎年一五〇〇名弱の新入生を迎える規模になっていました。早速四月には、学生による授業評価アンケートを認め、大学の教育環境改善を進めようとしました。一九九五年四月からは、今まで通年単位だった講義が、前期後期でそれぞれ講義を完結し、試験が実施され単位が認定されるセメスター制が導入されました。また時代を反映し、コンピュータ実務の科目を充実させるため、課程を設置します。被服実習の授業は、一クラスの定員四五名が五クラスもある盛況ぶりだったそうです。卒業生の中には、食物栄養専攻は栄養士の資格を活かし、病院の栄養士として活躍するものも出、生活科学専攻ではアパレルや衣料関係の会社に就職し、繊維関係の品質管理の業務に就くなど、社会で活躍する人を輩出してきました。

多くの卒業生を社会に送り出した両学科でしたが、女性の意識変化とともに、受験生獲得に苦戦するようになってきました。一九八六年男女雇用機会均等法が施行され、女子学生の就く職種が多様化してきました。加えて一九九〇年から好景気の反動ともいえる所謂「バブル崩壊」が始まり、景気は後退局面に入りました。一方で一八歳人口の減少は加速し、短期大学進学者の減少がみられるようになり、二〇〇〇年前後から全国で短期大学の閉鎖、短期大学から四年制大学への転換がはかられるようになってきました。四年制の共学大学が多数創設され、女子大離れや共学大学進学志向が増えてきました。その結果、女子大・女子短期大学の中には共学に移行する大学も増えてきました。本学においても、二〇〇〇（平成一二）年には短期大学部各定員を一〇〇名とするも一二月には募集停止を決定し、短期大学部は二〇〇二年閉学しました。英語科は大学文学部英文学科に、家政科は二〇〇二年からは人間科学部の人間環境学科の中に組み入れられました。ですが本学において、短期大学部が社会で活躍する人材を多数育成してきた功績は、実に大きなものがあります。卒業生の中には、教員はもちろん、結婚・子育てをしつつ仕事を続け、社会の重要な地位で活躍されている人も多いのです。


英語科校舎として建設中の2号館


家政科実習風景

期大学部学長として塩原勉が就任しました。一九九七年頃から日本を代表する銀行の経営破綻、合併が相次ぎ、連鎖を防ぐため公的資金が投入されるという時代でした。企業は雇用を圧縮するために新規採用を見送ることが増え、学生にとっては卒業しても企業に就職できない「就職氷河期」に突入しました。一旦就職内定がもらえた企業からその後「内定取り消し」が届く学生もいて、社会問題になりました。このような社会状況の中、大学にも変革が求められました。一九九八年は、女子大学数は全国で八二校とピークを迎えましたが、女子大学の学部は一～二学部がほとんどで、しかも文学部と家政学部が中心でした。他に専門家育成のための女子大学（医学・看護・体育・音楽）なども創設されるようになり、共学大学への女子学生志向とともに、本学も旧態依然の短期大学部と文学部だけの構成では、時代の流れから取り残される恐れがありました。そこで二〇〇〇年に、短期大学部の募集停止・閉学に踏み切りました。と同時に文学部にある人間関係学科の募集も停止し、翌年新たに人間科学部として心理学科（定員九〇名）・人間教育学科（定員八〇名）・行動社会学科（定員八〇名）・人間環境学科（定員八〇名）を含み新たに学部として開設しました。ここに文学部と人間科学部という二学部制が発足したのです。


コモンルーム

　また文学部においても大きな改組がありました。二〇〇一年に多文化共生学科（定員九〇名）を開設します。グローバル社会へと移行しつつある時代において、「違いを越えて共に生きる」ことをキャッチフレーズに、誕生しました。この学科名称は当時斬新で時代を先取りしており、その後多くの大学がこの「多文化共生」という名称を冠した学部学科を開設しています。次いで他の学科も時代に合わせ、名称を変更しました。国文学科は日本語日本文学科に、英文学科は英語英米文学科に、フランス文学科はフランス語フランス文学科とし、より学科での学びが伝わるように考慮しました。



資格サポートセンター

　同年、各学科にコモンルーム（common room）を開設しました。コモンには「共通の」「共同の」「普通の」「公的な」などの意味があり、学科単位で学生と教職員がコミュニケーションをとることができ、授業のない空き時間や放課後の学生たちのおしゃべりの場だったり、教員に気軽に質問したりと、今でも学生の心地よい居場所となっています。このコモンルームという学生の居場所は、全国に先駆けて設置され、その後全国の大学からの見学が絶えませんでした。

　また学生が安心して学生生活を送れるよう、セクシャルハラスメント委員会が設置されました。また学生と保証人と教職員三者のコミュニケーションを緊密にするために、毎年秋に教育後援会が開催されるようになりました。学生の居場所作りも兼ねて、旧中央講堂の跡に五階建ての九号館を建設しました。マルチメディアの機能と劇場の機能を持つ教室を有したインテリジェント・ビルです。この九号館には就職課も入り、学生の就職支援にさらに力を入れることとしました。さらに学生のニーズにこたえる形で、海外留学、語学研修制度を充実させ、キャリア教育も行い、資格サポートセンター設置に向けて準備も進んでいきました。

　二〇〇四年には、「語学センター」[※1]「資格サポートセンター」が立ち上がります。そして二〇〇六年、当時の小泉内閣の規制緩和をうけて設けられた届け出制度により、学部学科改組が容易になった状況を踏まえて、文学部・人間科学部それぞれに改組を実施しました。文学部では全く新しい学科を構想して、フランス語フランス文学科を「メディア表現学科」に改組しました。人間科学部においては、人間教育学科における資格課程の需要をうけて、保育・幼児教育一体の資格コースを持ち、併せて子ども学を中心にその周辺領域もふくめた学際的な新学科「総合子ども学科」に拡充改組することとしました。幼稚園教員免許課程、保育士養成課程、さらに小学校教員免許課程を置きました。この学科の充実強化のために、二〇〇八年に社会福祉法人「甲南愛育会」を発足、翌年「甲南保育園」（二〇一六年に幼保連携型の認定こども園として「甲南こども園」に移行）の設立を行いました。二〇〇七年には更なる一八歳人口の減少により「大学全入時代」が到来すると言われ、その前に数々の取り組みを行っていたのです。


甲南こども園

※1　二〇〇九年に閉鎖。

第五節　大学の新しい発展

教授　米田明美

　次々と改革を行っていきましたが、長く続いた景気後退で、大学を卒業しても就職できない学生が多数現れるという経済状況の中、「資格」取得を目指す方向に受験生の意識が変化していきました。高校生は、就職に不利か有利かで学科を選択するようになり、女子学生の多くが共学大学進学を望むようになります。そのため、本学の一部の学科は二〇〇五年に定員割れを起こし、定員数を減らしてもまた定員割れという悪循環に陥り、受験雑誌の評価も不合格者がほとんど出ず難易度が設定できないF（ボーダーフリー）が付けられることになりました。加えて近隣の住民の方々や卒業生から、一部の学生の服装やマナーに関し、注意の声が寄せられるようになりました。その中で、二〇〇五年に第五代学長として坪内良博が就任します。


看護学科生のユニフォーム

　坪内は、まず看護リハビリテーション学部新設の準備を開始しました。本学にとって三番目の学部新設です。この学部の設置に関しては今までの文系学部とは雰囲気も異なる故、学園内外からも懐疑的な意見が多数出されました。看護の設置経費があまりに膨大なこと、教員のリクルートの難易度が高いことなど、中小女子大学には不利な要件が多かったからです。それ故当時関西の有名女子大学に看護

学部（学科）を有する大学は、一校もありませんでした。その中で坪内は学内の様々な意見を取りまとめ、新設に向けての準備に取り掛かることにしました。医療系学部の法定の実習施設を確保するため、開学時に短期大学部家政科のために建設された三階建ての旧一号館を取り壊し、看護リハビリテーション学部専用棟として七階建ての新一号館が建設されました。

『大学案内　二〇〇七年』には、

「女子大学から女性大学へ
女性のライフキャリアを
サポートする
そこにいる誰かに。役に
立てる〝私〟でありたい」

と看護リハビリテーション学部誕生のキャッチコピーが登場します。看護学科と理学療法学科の二学科からなり、看護学科は養護教諭一種免許状が取得でき、決められた単位を修得すれば看護師と助産師・保健師の国家試験受験資格が与えられ、理学療法学科では理学療法士の国家試験受験資格が与えられます。

本学では初の医療系学部となり、受験者の動向が心配されましたが、前年のオープンキャンパスは大盛況で、入試結果は高倍率になりました。その波及効果もあり、次第に他の学部学科の志願者減に歯止めがかかりました。その後関西の有名女子大学が、本学に倣い次々と看護系の学部学科を開設、そのため本学から看護系教員が多数引き抜かれるという事態もありました。

翌年、再び学科名称を変更し、各学科は更に幅広い分野を学生に提供することになりました。文学部の日本語日本文学科は日本語日本文化学科となり、ホスピタリティコースを設けます。英語英米文学科にはＡＮＡルームが開設されました。多文化共生学科は多文化コミュニケーション学科に、人間科学部の行動社会学科は文化社会学科に、人間環境学科は生活環境学科となりました。

二〇〇一年に就任したパナソニック副会長の松下正幸理事長は、学部新設だけではいずれ限界がくるということを見据え、企業出身者を積極的に職員として採用し人事制度を見直すことで事務組織の意識改革・機能向上を図り、教員組織と事務組織が手を携えて進んでいく「教職協働」の体制づくりを目指しました。学内の意識向上を図り、教職員の意識改革を行ったわけです。二〇〇七年には、大学教育活性化プロジェクトを立ち上げ、大学の理念、ブランディング、学生募集関連、カリキュラム、社会貢献、学生サポート、就職・キャリアなどにかかわる諸問題のすべての点検がはじまりました。二〇〇八年には大学認証評価の受審を受け、二〇〇九年から教職員全員参加型で、あるべき本学の目標を立て、それを目指すという第一次中期計画作成へと進んでいきました。この中期計画は三年ごとに作成していきます。卒業生からお叱りをうけた学生のマナーに関しても、教職員の努力の結果、目に見えて良くなっていきました。

二〇一一年には、第六代学長として松林靖明が就任いたしました。松林は、今までの学長が教育学、社会学を専門とする中、早稲田大学大学院文学部出身で、軍記物語が専門でした。本学在任期間は長く、生え抜きといってもよいでしょう。本学の危機（定員割れ）を身をもって経験し、大学の将来を憂いていました。そして看護リハビリテーション学部の次の学部として、あらたに医療栄養学部開設の準備を着々と進めてこられました。学内では第二次中期計画の取り組みが開始しました。掲げたテーマは三九項目ですが、その一部が『大学だより二〇一二』に北市哲朗常務理事が記した「大学の未来を拓く第二次中期計画」に挙げられています。二〇一四年に松下理事長の引退を受け、中内仁が理事長に就任し、その後の中期計画を引き継いでいきます。

ところが松林は、計画を次々遂行していく途中、新学部のための一〇号館の完成を見届けることなく、二〇一六年四月二〇日に病のため逝去されました。その一〇日前まで学長室で勤務されており、突然の出来事でした。七月に学園葬が行われました。


10号館


1号館


ANAルーム



看護リハビリテーション学部広告

第六節　未来に向かって

教授　米田明美

その後七月一一日に理事会の指名をうけ、第七代学長に森田勝昭が就任しました。森田は、学生中心の教育、「教育の大学」とすることを目指します。学内の改革も第五次中期計画をまとめる方向まで進んできました。二〇一八年には医療栄養学部の開設、とともに一〇号館も完成。一〇号館には、医療栄養学部のための様々な実験室とともに、二階のクローバーコモンズ横には、学生たちの願いであったコンビニ（ファミリーマート）を誘致し、自由に学生たちがグループ活動や、議論、おしゃべりもできる場を設けました。クローバーコモンズ内で自由に使えるノート型パソコン（四二台）も好評です。



10号館内クローバーコモンズ

医療栄養学部では、栄養士・管理栄養士・栄養教諭一種免許状、また任用資格ですが食品衛生管理者、食品衛生監視員の資格が取得できるようになりました。チーム医療を担う栄養サポートチームのリーダー育成をめざし、卒業生には、健康寿命延伸のための機能性食品開発、健康関連産業など多くの民間企業での活躍を期待しています。また看護学研究科博士後期課程が開設、一貫した教育で研究者や大学教員養成も可能になりました。

そして「学園創立一〇〇周年」を迎える二〇二〇（令和二）年四月、文学部の英語文化学科を国際英語学科とし、同じく多文化コミュニケーション学科の両学科を「国際学部」として新たな学部として立ち上げました。五番目の学部となります。「グローバルな未来に羽ばたくための〝つばさを〟身につけよう」とし「じぶん色のつばさで羽ばたく」を目標とし、歩みだしました。



看護学研究科博士後期課程入試案内



国際学部広告

この二〇二〇年は、東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定の年でした。世界中がその祭典を待ち望んでいました。ところが、前年年末に中国武漢から感染が広まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が、全世界に感染拡大して、治療薬や治療方法も模索の状況で、世界中で多くの感染者・死亡者が出ることになりました。日本政府からは緊急事態宣言が発出され（四月七日に東京と大阪を含む首都圏対象に発布され、一六日に全都道府県対象となり、五月二五日に全面解除）、日常生活は混乱をきたしました。その間活動自粛となり、経済活動もストップ、多くの企業がテレワーク、在宅勤務そして休業を余儀なくされました。

子どもたちへの教育に関しても、幼稚園から大学に至るまで、その影響は計り知れません。日本全国各地の大学で、二〇一九年度の卒業式、二〇二〇年の入学式も中止となりました。本学も同様です。楽しみしていた式が中止になった学生からは、悲痛の声が寄せられました。

二〇二〇年前期、ほとんどの大学が、感染拡大防止のため学生の大学への登校禁止、オンライン（遠隔）授業という前代未聞の出来事となりました。もちろん東京オリンピック・パラリンピックも一年延期です。本学でも、五〇年以上続いた伝統あるシェイクスピア祭が中止、創立一〇〇周年関連の記念行事やイベントは一年延期。学生たちのクラブ活動も前期は中止せざるを得ませんでした。どの大学も対策に追われ、本学も臨時休校、キャンパスへの全面立ち入り禁止、オンライン授業開始と次々対策を講じていきました。また五月にはオンライン授業のための学修環境整備・充実に充ててもらうために全学生に「オンライン授業環境支援金（一人一律五万円）」を給付することとし、手続きが進められました。加えて保証人の家計急変に伴う学生支援として「緊急特別奨学金（返還不要　二〇〇名を対象に三〇万円支給）」「緊急特別無利子貸与型奨学金」「学費延納制度」を設けるなど、学生の学びの継続を支援するため、矢継ぎ早に大学独自奨学金の整備を行ってきました。（詳しくは追録をご参照ください）

後期は、全国的に感染者数の減少がみられることから感染拡大防止に努めながら、オンデマンド授業と対面授業の併用で行われることになりました。学生の元気な姿がキャンパスで見られるはずです。まだまだコロナ前には戻っていませんが、学生たちへの学修の機会を絶やすことはできません。勉学はもちろんのこと、就職活動もまったなしです。この年に在学していた学生たちの未来のためにも、本学は学びの機会を提供し続け、困難に立ち向かう学生たちを希望へと導いて行かなければなりません。

九月一六日の全教員が集う全学教授会で、森田学長が述べた言葉を締めくくりとした「今年ほど大学の存在が問われた年はありません。本学にも学生や保証人から、多くの批判が寄せられました。それらは大学教育の本質にかかわるもので、その声に真摯に答えていきたいと思います。私たちが変わる、変える、そして大学を変えるのです。

次の三点を皆様にお願いしたい。

一、質の高い教育をお願いしたい。

今まで以上に教育の質を向上させ、対面授業・オンライン授業両者のメリットを活かして、新しい教育を目指してほしい。私たちはすでに、感染症対応から新たな大学教育創出へ向かっているのです。

二、学生の不安や心の揺らぎに寄り添って欲しい。

この半年、学びのコミュニティが失われました。学びの場を構築し、学生と教師がしっかり交流し、学生第一主義を実現してください。

三、教職員の責任が問われている。

各自何ができるのか、責任を果たしているのか。私たちは次世代の社会の基盤を支えていく学生を育てている。一人一人が責任をもって教育に取り組み、新しい教育を作り出しましょう。」

（二〇二〇年　九月二〇日　記）

安宅彌吉　その人

第一節　安宅彌吉

中・高校元教諭　三宅広明

はじめに

甲南女子学園の前身、甲南高等女学校が誕生したのは一九二〇（大正九）年のことでした。

学園の『創立五十周年記念誌』（一九七二年）には、「甲南高等女学校は、甲南小学校と連絡する学校として、前年開校した甲南中学校とともに、住吉村や付近に在住する関西財界人から設立の要望多く、創設首唱者安宅彌吉が中心となり、久原房之助、岩井勝次郎、伊藤忠兵衛、平生釟三郎、田邉貞吉、その他多数の財界人の協力を得て創設したものである」と記されています。また『甲南学園の五〇年』（一九六九年）には、一九一九（大正八）年四月二〇日の甲南中学校創立委員会の席上で、安宅彌吉が高等女学校設立の意向を表明、大方の賛成を得た、と記されています。

つまり、学園設立の中心を担ったのが安宅彌吉であることはまちがいなさそうです。では、安宅彌吉とはどのような人物で、学園創設にどのような思いをもっていたのでしょうか。


甲南女子学園所蔵の肖像画

一．学園での安宅彌吉

安宅彌吉は、設立当初は理事として、一九二六（大正一五）年からは甲南小学校、甲南中学校の理事長でもあった田邉貞吉の後をついで二代目の理事長となり、一九四六（昭和二一）年六月に病気で引退するまでの二六年間甲南高等女学校を支えてきました。その彌吉について、長い間学校で身近に接した校長の表甚六は、「回顧三十年」（『創立三十周年記念誌』）の中で、安宅を偲ぶ文章を書いています。

先生に接していた二十三年の間に、私が最も感心していたのは、本校財団の会計元帳の収支を全く一人で記載整理せられていたことで、（中略）御本職の御仕事が多忙な上に、大阪商工会議所副会頭としての用務も絶えないのに、煩瑣な帳簿を自分で引き受けられ、二十五年の間忠実に、巧みな細字で綿密に記載せられていたので、責任感の強い方だと思っていた。[※1]

財団唯一の仕事としては学校の特別会計の不足を補うことであった。その補充金はどうもすれば基金を脅かす形勢になるので、それ以上の臨時支出を申出ることは私としては甚だつらかった。然し必要上やむを得ぬものは遠慮なく相談した。先生は支出方法を案ぜられて、不足分は自分が立替えるから設備されたしとて申出を快諾せられる。（中略）私が申出たものは一々理事会に諮られず即座即決せられるのが常であった。

さりながら、借地料を決定するとか、校地移転候補地の決定とか、校地買収とか、校舎増築とかの重大事は決して専断せられず、他の理事の意見を徴せられて慎重に研究された。問題によっては理事方の意見は必ずしも一致せぬことがあるので、事によると荏苒（じんぜん）月日を費やすこともあった。

先生は雄弁家であった。平素学校へは度々来られなかったが、観菊会とか、運動会とか、そうした催し事のある時は繰り合せて出席せられ、卒業式には必ず臨席せられた。その時は理事長としての告辞をせられる、なかなかの名演説で長時間にわたる。（中略）軽妙な弁舌で卑近な例話を織りこんで、前後左右から卒業生の箴となることを説かれた。その流暢さには皆感心したものである。

また『創立三十周年記念誌』の座談会には、卒業生と教師から見た彌吉の印象が記されています。

「校長先生に御用がおありだったものですからちょいちょい学校へおいでになり校長室でお話なすったり、学校を歩かれたり、生徒の学習をご覧になったりして、たいへん親しみがございました。（中略）時には御冗談なども仰いましたし、まことに寛いだ気持ちでございました。」

「この学校はあなた達の学校だ、ということを安宅さんはいつも仰いましたわ。」

学校のことが気になって、ときどき学校に顔をだしていたようです。校長らと話をして財団の会計を確かめるだけではなく、校内を歩いたり、教室に入って授業を眺めたり、なんだか学校と関わることを楽しんでいるように感じられます。「この学校はあなたたちの学校だ」といつも話していたとありますが、表によると、これは安宅の持論で、「学校は公有物だから一個人の私すべきものではない。理事の学校だとか、安宅の学校だとかいうものがあるが間違っている。皆で学校を盛り立つべきだ」ということで、卒業式の時など保護者や卒業生、生徒が集まる場所で機会あるたびに話していたといいます。学校は公共のものであって、教職員、生徒、保護者など「皆で学校を盛り立つべきだ」と、ことあるごとに話していたというところに、彌吉の考えと学校に対する姿勢がうかがえます。

二．彌吉の教育観

彌吉は学校を作り、運営をしていったけれど、教育の内容や方法についての研究者でも実践者でもありませんでした。ただ実業家としての立場から、自分の経験による教育に対する感想や思いはしっかり持っていました。その彌吉が「国民教育について」という講演を一九三六（昭和一一）年にNHKの放送で行っています。[※2]一九三六年というと二・二六事件の起こった年であり、日本の社会全体が軍国主義に流れていった時期にあたります。

そこではまず「国民教育」のうち、六年間の義務教育課程の尋常小学校に対する私の希望として四点をあげています。

第一は、知育偏重、詰込み主義になっていて、とくに四年生以後の児童の負担が重すぎるのではないかということ。教科書のみならずたくさんのことを無理やり詰め込んでいるのではないか、「できるだけ大綱即ち概要に通ずる主義で、煩瑣な教育をやらぬ方がよいかと思います」といいます。理解しているか否かにかかわらず、ただ暗記していればそれで「知識」を得たことになっていて、「国民常識」として、血となり肉となるものになっていないのではないか、よく消化して利用のできる知識、つまりよい意味の常識となるよう教えてほしいというのです。

第二は、日本の国民は、個人道徳は重んずるが、社会道

徳という点で劣っているのではないかということ。つまり社会的礼儀と規律ないし秩序を重んずる点において欠けている所がある、この点を修身の時間だけでなく全学科、全学校を通じて指導していただきたいといいます。

第三は、「今後の日本は国防と産業の両全主義で行かねばならぬ時代ですから、小学教育においても、産業、経済に対する知識を従来よりもより多く教える必要があると思う」ということ。

その例として、アメリカの生糸の相場が信州の山奥の農家の繭の値段に影響すること、また保護貿易によってオーストラリアの羊毛が日本に来なくなると、紡績会社ではアンゴラ兎の毛で混紡をやろうということになり、農家でのアンゴラ兎の飼育という問題が起こることなどをあげています。そしてこのような「国際的問題に対する教育は、いまだに島国根性が抜けきらぬと言われている我が国民に対して眼を開き、遠大なる理想と他の国民に劣らぬ気魄とを養わしめることにもなるでありましょう」といいます。

第四は、最近若者の体格低下が起こっているのは学校教育の問題ではないかということ。ここでも知育偏重、詰込み主義が問題にされ、同時に体育の授業が「競技万能」に陥っているのではないかといい、「古来の武道を加味した日本人の体格に適当した運動方法を考慮し、運動が徳育の補完ともなるように心がけることはできないものでしょうか」と述べています。

そして尋常小学校に続く学校、つまり高等小学校、中学校については、実業教育をもう少し徹底的にやるべきだといい、英語は会話とライティングを重視すべきだし、漢文はどうしても必要だと、語学の重要さを強調しています。

実業学校については「あまりに近視的、実利主義的な商人を作りださないように、高潔なる責任を重んずる商人として、俺は町人だ、町人道をもって誇りとするんだというような人を世に出してほしい」と語っています。

最後に女学校について、高等普通教育を受ける女子が多いのは慶賀すべきだとして、その教育内容に触れています。中途半端な幾何とか代数を教えるより、思考能力を養うためなら、小学校の算術のもっと進んだものを教えるほうがより実用的でよくないか、もう少しそろばんや家計簿記などを取り入れるのもよい方法。欲をいえば、物理、化学等もあまりに理論的なものよりも、できれば家事経済に直接参考になるように編成した教科書を用いてほしい、体育は程度を越さないように等々。彌吉自身、実業家としての立場からと断ったうえで、実用的な学びを通したあるべき教育を語っています。

これらの話からうかがえるのは、偉い人になるための知育偏重の教育ではなく、人として、普段の生活を生きていくための力になる教育を大切にしてほしいという彌吉の思いです。ただし甲南高等女学校における実際の教育については、自由主義的な表校長の教育観を信頼して全面的に任せていたようです。そこに彌吉の器量の大きさがうかがえます。

三、彌吉の生涯

安宅彌吉は、一八七三（明治六）年四月、石川県金石（かないわ）町（現・金沢市）に八人兄弟の七番目として生まれます。[※3] 生家は肥料商を営み、かたわら農家や商人に資金を貸して利息を得る金融も行う地域の素封家でしたが、彌吉の父、三代目又吉が仕事ひと筋に働き家業を栄えさせたといいます。一家総出で働くことが当たり前の家庭で彌吉は又吉の生き方に影響を受け、幼時から信仰心厚く育っていきます。

彌吉は小学校では算術が得意で成績優秀、石川県専門学校に入学しますが学制改革で廃校となり、新設された第四高等中学校に通うようになります。

又吉は彌吉が工科大学にすすみ、養蚕製糸の事業を起こすことを願っていましたが、彌吉が一六歳の春に病で亡くなりました。

そんなころ新聞で金石出身の豪商銭屋五兵衛の伝記を読んで強く惹かれ、貿易商として日本一の富豪になることを夢見て一八八九年に上京します。たまたま新聞広告で東京高等商業学校（現・一橋大学）が学生募集をしていることを知り、仮入学から入り、ひたすら勉強に励んで本科生になります。高商時代は石川県出身学生のための寄宿舎、久徴館に入っていましたが、その中に鈴木貞太郎（大拙）がいて、禅に関心を持つようになり、鎌倉の円覚寺に参禅に通うようになります。一八九五（明治二八）年に卒業し、就職は、友人の紹介で大阪の日下部商店に入ります。

日下部商店は小さな個人商店でしたが、当時大阪財界の有力者だった松本重太郎が支援していました。彌吉は就職するとすぐに香港に行き、日下部商店の香港支店（日森洋行（ヤッシャム））をまかされ、将来の独立をめざしてひたすら働きました。一八九九年に日下部店主が亡くなり独立しようとしますが、松本重太郎に説得されて、香港支店は日下部商店とは別経営として彌吉が掌握し、純益の五割五分をとることで日下部商店に残ることになりました。

彌吉は、ジャワで砂糖を扱う華商建源（キェングン）号からの砂糖の仕入れに成功し、砂糖輸入の最大の会社であった日本精糖が扱うジャワ原糖の指定業者となり、日森洋行は軌道にのるようになったといいます。当時ジャワから直接仕入れて日本精糖に売る指定業者は三井物産とイギリスの会社しかなく、指定業者になるために、彌吉は一人で直接ジャワの建源号当主と会い、信頼を得て商談を成立させています。

ところが一九〇四年、日露戦争の勃発により株価が暴落し、彌吉の後援者でもあった松本重太郎は大打撃を受け、彼の持っていた銀行や企業が倒産、その手形を抱えていた日下部商店も倒産し、別経営であったにもかかわらず彌吉が経営していた香港支店も閉店に追い込まれます。彌吉は出資していた金を失いながら、日下部商店の整理に力を尽くしています。

このとき彌吉は結婚して子どもが生まれたばかりの三二歳。夫人の持参金と自分のためた金四万円をもとに大阪にある自宅を店舗として「安宅商会」をスタートすることになります。香港では「日森洋行」の名を引きつぎながら新しい仕事に取り組んでいきます。いたずらに事業を拡張せず、つねに企業体力にあわせた「蛙とび商法」で順調に業績を上げ、一九〇九年には資産は三五万円（現在の一〇億円以上）となりました。ところが、この年、日本精糖などが合併してできた大日本製糖が拡張路線によって破綻、その手形三六万円をもっていた安宅商会は倒産の危機に陥りました。安宅以外に手形をもっていたのは大企業と銀行ばかりで、負債を割り引いて均等に返済されたのでは立ちゆかず、彌吉は債権者会議で窮状を訴え、取引銀行の信頼によって何とか切り抜けています。

このような浮き沈みの経験から、第一次大戦の直前、戦時となれば何がおこるかわからない、順境のときに財産を整理しようと、当時もっていた大阪・東京・香港・大連の四店舗のうち香港と大連の店を当時の大商社鈴木商店に譲渡しています。大戦中は価格が高騰して大いにもうけましたが、事業の拡張を抑えていたためにその後の厳しい戦後恐慌を乗り切ることができたようです。

彌吉は、第一次大戦後の一九一九（大正八）年に安宅商会を株式会社に改組し、社員に株を与えています。これは当時としては珍しいことで、「経営者と社員は運命共同体でなければ事業は発展しない。共に繁栄をめざせばともに潤う」という考えによっています。倹約はするが人助けにはカネを惜しまない、「情誼に厚く周囲の人間を大事にする」人といわれていたようです。そして一九二〇年からは甲南高等女学校の設立に参画して、資金を学園に寄付するようになります。

一九二六年、安宅商会は八幡製鉄所の入札指名業者となり、以後鉄鋼業界で大きな地位を占めることになります。その間彌

吉は、一九二二年には大阪商業会議所（現・大阪商工会議所）の副会頭に、一九三五年には会頭になり、一九三九年には勅選の貴族院議員になっています。

彌吉は、一九四二（昭和一七）年、社長を次男の重雄に譲り、翌年社名を「安宅産業」と改めました。彌吉は相談役と肩書を変えながら、実質は社長時代と変わりなく仕事をしていましたが、一九四三年に脳卒中で倒れます。その闘病中に、読んだ本や古い覚書から『備忘録』をまとめています。

終戦の少し前、京都の円福寺に疎開してしばらくの室住まいをしますが、当時を知る仏教学者の古田紹欽は、「日々の暮しは禅僧の生活のように思えた」と述べ、この円福寺での起居が「翁の晩年の生活に安住を与えた」のではないかと記しています[※4]。その後住吉の安宅邸は終戦の二日前の空襲で焼けてしまい、彌吉は京都の平野神社近くの家に移り、そこで一九四九年二月に七七歳で亡くなります。

四．社会的奉仕としての育英事業と学園設立

彌吉が甲南高等女学校の設立の中心となり、しかも設立後、病気で引退するまで二六年間にわたって理事長など学園の経営責任者を務めたのはなぜなのでしょう。

ここには三つの要因が考えられます。一つは前に述べたように、自分たちの子どもの教育の場としての学校づくりという面です。自分たちが生みだしている新しい市民社会の価値観を大切にした学校を作りたい、という思いがあったのではないでしょうか。この時期には、大正デモクラシーの風潮があり、デューイなどの体験を大切にする新しい教育への志向が強まるという背景もありました。そしてそれを受け入れるだけの土壌が甲南の生まれる阪神間にあったという事も彌吉たちの学校づくりを後押ししました[※5]。

二つは、彌吉が、経済的に豊かな者の社会的義務として社会貢献を考えていたことです。このことについて、彼自身が『回顧録』の中で育英事業について詳しく述べています。彌吉は信仰心の厚い環境の中で生まれ育っており、自分の故郷の氏神（大野湊神社）や菩提寺（本龍寺）への寄進を続けていましたが、それだけではなく、江戸時代に貿易で財を成した同郷の銭屋五兵衛にあこがれて都会に出て、何もない所から努力して事業を起こし成功した者として、同じような思いを持った若者に対して援助をすること、社会奉仕をすることを当然のように感じていました。

また、自分の次兄が商売を学ぼうと意欲をもって大阪に丁稚に行ったとき、あまりに厳しい待遇で栄養不良と脚気になって金石に帰ってきたことが念頭にあって、自分たちと同じような境遇にある人たちを助けたいという思いから育英事業と丁稚制度の改良をつなげて考えていました。

> 大阪の丁稚制度といえば、（中略）今日といえどもまだ使用者本位の制度にして、被使用者の教育とか養成とかいうことに全く無関心なるのみならず、殊に保健上に関しては豪も注意を払われず。いうに忍びざる粗食をあてがい、酷待到らざるなく、もし地方中産階級以上の子弟にして大阪に出で、丁稚奉公より勤め上げんとするも、栄養不良と過度の勤労のため、身体を害し、永年勤続する者ほとんどまれなり。（中略）今回いよいよ郷党子弟の教育に手を染むるや、併せて丁稚制度の改善をもこれに結びつけんがため、まずその方法として、丁稚はなるべく郷里より採用し、三か年だけ店の丁稚として使用し、この間実業補習の夜学に通わせて教育を授け、三年後には全然店を退かしめ、給費生とし甲種商業学校に入学せしめ、而して優等の成績を以て卒業せし者は、進んでこれを高等商業に入学せしめ、これら卒業生は自分に対して一切義務を負うことなく、各々その志す所に随うて就職せしむる仕組みなり。[※6]

ここには育英事業を、たんに富豪の社会的貢献として義務的に捉えるのではなくて、自分の体験から生まれた理想主義的な構えを感じることができます。と同時に、「自分は極めて微力なる者なれども、社会に必要なる人物たる訳なれば、其処に自分生存の大なる意義を生じ、一生を酔生夢死に終わらしめざることを得て、自ら人知れざる慰安となり得る所なり」と述べていて、人のためになすことが自分のためになるという自然で大らかなやさしさも窺えます。

この社会的奉仕への思いは一時的なものではなく、ずっと継続しています。一九四三年に病気で倒れた後に『備忘録』で、「志したことの十ノ一も達成しないで人生を終わるような気がして、まだ育英なり、社会事業方面に幾分のことをしたいものだと心残りがあるのである」といい、また「学資を出してあげても貴方は何の義務も持ちません、ただ一つのお願いは善く正しき紳士になって下さる事、名高い人にならなくてもよい立派な学者になることはいりません。どんな職業を選ばれてもどんな生活をなさっても」と述べています[※7]。このような願いを込めた社会的奉仕への思いが、甲南高等女学校の設立と運営にもうかがえます。

三つは、時代的な背景が考えられます。学園の設立を決めた一九一九年は第一次世界大戦が終結した次の年です。四年にわたる戦争中、疲弊する西欧にかわって日本は大戦景気に沸き、成金とはやされる金持ちが続出した時期でもあります。日露戦争中の一九〇四年に創業した安宅商会の場合も、需要の高まりとともに物価が急上昇して利潤を増やし、大戦勃発の一九一四年の資産が八〇万円であったのが、一九一八年の上期だけで一六〇万円の純益をあげています。財界では経済的な余裕が生まれて「富豪の社会的貢献」が問われることもあり、社会的奉仕への意欲を持っていた彌吉にとっても、それが可能な時代でもあったのです。

ただし、戦後の一九二〇年には揺り戻しとしての恐慌が起こり、一九二三年には関東大震災による社会・経済の混乱が起こっています。それでも彌吉の社会的奉仕の意思は揺らぐことなく、これ以後長く学園の経営にあたることになります。

なお彌吉は、一九三七年から二年間大阪貿易学院（現・開明中学高等学校）の理事長も務めています。大阪貿易学院は、大阪商業会議所が外国との貿易に携わる人材育成のため英語・中国語・ロシア語の語学教育に重点を置く専修学校として設立したもので、商業会議所の会頭が理事長を務めていたのです。

五．彌吉と大拙

彌吉の社会的奉仕の考えは、「富豪の社会的貢献」として無理に頑張るというよりは、彌吉にとって人として自然な理想の実践ではなかったのかと思われます。それは、鈴木大拙がアメリカに渡った一八九七（明治三〇）年のころから資金援助を続けていたことからもうかがえます。大拙は後に禅の思想を西欧に伝える仕事をした思想家ですが、一八九七年というと彌吉はまだ二三歳、高商を卒業して日下部商店に入って二年目でした。将来の独立を夢見て節約しながら資金をためている時代で、決してゆとりのある生活ではなかったにもかかわらず、その頃から一貫して支援を続けていたのです。

さて、彌吉の遺骨は鎌倉の東慶寺、故郷金石の本龍寺、西宮の海清寺の三ヶ所に分骨され、それぞれに墓が立てられていますが、このうち東慶寺は彌吉が高商の学生であった頃に禅修行のためによく通った円覚寺の近くにあり、鈴木大拙、西田幾多郎たち[※8]の墓が並んでいます。その寺のなかに鈴木大拙が草した彌吉をたたえる石碑があります。

> 自分が今ここに君の遺徳をたたえようとするのは、我が国の文化・教育の面に尽くされた君の功績のゆえ

「学問をやれば貧乏するにちがいないから、わしが金を儲けたならば、君の好きなことを何でも助ける」と言ったのです。（中略）とにかく、安宅君との関係は、私達が二十歳前後の時から五十年ですね、五、六十年の友人仲間で、あれくらいよくつき合った人は無いようです。

おわりに

甲南高等女学校の校舎は一九四五（昭和二〇）年六月五日の空襲で完全に焼失してしまって、その復興資金を集めるのに、翌年七月二五日に魚崎小学校を借りて音楽会を開いています。ヨーゼフ・ローゼンシュックと厳本真理を招いたブラームスとベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタのコンサートでした。ローゼンシュトックといえば戦争中にドイツから逃れてきて、現在のＮＨＫ交響楽団を鍛えた世界的な指揮者として知られています。当時の第一級の音楽会が甲南女子の復興の目的で行われているのです。生徒たちは街頭や駅に立ってこのチケットを売ったという話が記録されています（『創立五十周年記念誌』[※10]）。それでどれだけの資金が集まったのかはわかりませんが、普通であれば招聘するだけでも多額な費用がかかるはずで、それが復興資金集めを目的としたコンサートだというのだから驚いてしまいます。この催しは彌吉の長男の英一の助力によって実現しています。[※11] そしてこの年に、安宅彌吉は甲南女子学園の理事長を引退しました。

以上、さまざまな面から安宅彌吉について見てきましたが、今日、甲南女子学園の中で彼の足跡はどのような形で残っているのでしょうか。中高の講堂が安宅講堂と名づけられてはいますけれど、学園の中では、ほとんど語られなくなってきているように思えます。出身地の金沢では「金沢ふるさと偉人館」に「近代日本を支えた偉人たち」として彌吉の資料が常設展示されています。実業家として成功しただけでなく、育英事業に力を尽くし、鈴木大拙たちの学問を支えた人として顕彰されているのです。

彌吉が生涯をかけて育て上げた安宅産業は、彌吉の死後十大商社といわれるまでに大きく成長しましたが、一九七七年になくなってしまいました。[※12] しかし、彼の創設した甲南女子学園は発展して一〇〇年を迎えました。私たちは本学園設立の功労者としての彌吉について記憶しておく必要があるのではないでしょうか。

※1「財団法人甲南学園甲南高等女学校」が設立認可されたのは一九二一（大正一〇）年三月のことであったが、当初の財団運営の様子を表は次のように述べている。
「財団の任務は本校を設立するにあった。その他には何の事業も経営しない。本校一校のみの経営であるから仕事は拠金を募集し、本校の経営を援助すればよい。」
「（高等女学校）設立当時の財産は二十七万余円でこのうち二十万円を基本金とし、その金利と一般寄附金とで学校を経営したのであった。」
「普通ならば授業料その他学校の収入は一度これを財団会計の収入にして、学校は予算を組んでその支出は一々財団から受入れるのであろうが、本校のはそうではなく、学校の会計はこれを特別会計と称し、財団とは全く切り離して収支を自由にし、その不足分を財団から受入れる建前であった。もっとも校舎の建設とか教職員退職金のような臨時の支出は全部財団の支出であった。本校は生徒数が少ないから到底生徒の授業料や入学金等では経常費さえも賄えぬ。されば毎年財団から不足金を補ってもらうのであった。例えば昭和二年度経常費四万二千円、不足一万五千円でこの不足金を財団から受入れることになっていた。（中略）毎年平均二万円程度ずつの補助になっていたであろう。」
基本金は文部大臣の認可を経なければ使えなかったというから、毎年平均二万円の「特別会計」の補助の多くを彌吉が何とかしていたのは間違いないだろう。ちなみに財団は、一九四八年に名称変更して「財団法人甲南女子学園」となっている。

※2『備忘録』下p.391　この年、彌吉は日本商工会議所副会頭に就いていた。

※3 彌吉の人生について、彼自身が書いたものとしては自伝的な『回顧録』（一九二二年）と『備忘録』上（一九四四年）下（一九四六年）がある。ほかに安宅産業が崩壊した一九七七年以降に書かれた、邦光史郎『安宅一族』（サンケイ出版）や綱渕昭三「安宅弥吉」『日本の商人7国際商戦の先駆』（TBSブリタニカ）などいくつかのものがあるが、概ね彌吉による二つの本をよりどころにしているように思える。また森清『大拙と幾多郎』（岩波現代文庫）は、彌吉と鈴木大拙、西田幾多郎たちの友情と交流を描いていて彌吉のパーソナリティがよくわかる。

※4 古田紹欽「安宅自安居士を偲ぶ」（『鈴木大拙全集26巻』月報）

※5 竹村民郎は、「『阪神間モダニズム』の社会的基調」『関西モダニズム再考』（思文閣出版）の中で、「甲南高等女学校創設のころ」について、本校を「阪神間の学校」のシンボルとして紹介している。

※6『回顧録』p.246

※7 安宅彌吉についての講演会が、二〇〇八年に金石で開かれている。そこで安宅奨学生の集まりである一樹会の人たちが「安宅彌吉との思い出」について語っていた。その話は彌吉が眼前に浮かぶような思い出話であり、大変興味をひかれた。安宅奨学生というのは、故郷の金石小学校を卒業した優秀な子どもを毎年三人ほど学校から推薦してもらい、大阪と東京の安宅商会で三年間ほど丁稚のような仕事で預かり、見込みのある子に奨学金を出して中学にやったというものだ。月二十六円で、生活するに十分な額であったという。その奨学金で学校を卒業した後は、安宅商会に入っても、故郷に戻っても構わないというものであったようだ。
卒業するときには、「盆、暮れには中元や歳暮はいらない。どうしてもというのであれば米を送れ」と言ったらしい。丁稚として預かった子どもたちの食糧ということのようだ。
阪神大水害のときは、彌吉の住吉の家が砂に埋まって、一年以上大阪に逃れてきて私たちと一緒に暮らすことになりました、と楽しそうに語っていた。「恩着せがましいことはいわない、素晴らしい、偉い人だった」という話は実感のこもったものであった。

※8 西田は大拙と同じく第四高等中学校の先輩にあたり、彌吉は、大拙を通して一時経済的な援助をしている。
森清『大拙と幾多郎』p.256

※9 赤松彬「鈴木大拙さんと安宅弥吉翁のこと」（『鈴木大拙全集第15巻』月報）岩波書店

※10『創立五十周年記念誌』p.61には「ブラームスの協奏曲イ長調、ベートーベンの協奏曲二番、二長調などとプログラムに見える。」と書かれているが、「協奏曲」は「奏鳴曲」の誤植ではないかと推測される。

※11 安宅英一については伊藤郁太郎『安宅コレクション余聞　美の猟犬』（日本経済新聞出版社）。

※12 NHK取材班『ある総合商社の挫折』（現代教養文庫）、日経新聞『崩壊ドキュメント安宅産業』（日本経済新聞社）、松本清張『空の城』（文藝春秋社）など。

＊名前の表記について。『創立五十周年記念誌』や、彌吉に関する書籍では「弥吉」の表記が多いが、自身の著した『回顧録』『備忘録』では「彌吉」となっており、本文の地の文では「彌吉」とした。引用の場合はその原文の表記をそのまま使ったので「弥吉」となっている場合がある。

第二節　安宅彌吉の遺産（抄録）　安宅彌吉の孫　工学博士（東京大学）　安宅光雄

序　彌吉の生涯の誇り

安宅彌吉は六〇歳に達した一九三三年、生涯を振り返った文章を書いています。

そこでは「自分は生まれてきて無駄ではなかった、いま死んだとしても、この世に生まれたことを感謝しながら死ねると思う」と言い、その根拠として、自分が他人のために尽くすことができた例を三つ挙げています。すなわち（一）給費生制度を作り、郷里である金石出身で小学校の成績が優秀であった者の進学を助け郷土に幾分かでも恩返しした、（二）学校の世話をしている、（三）友人を助けて大乗仏教を西洋に伝えることに努力しつつある、の三つです。

このうち（二）の「学校の世話」は甲南高等女学校の創設と運営を念頭に置き、（三）は鈴木大拙氏への支援を指しています。

七一歳になって出版した『備忘録 二』でこの文が読めます（P7）。

自分の生涯に意味があったと彌吉に誇りをもたせた三つの事業は、彼が死んで七〇年を経た今日でも幸いにしてなお存続し成果を挙げ続けています。すなわち（二）の甲南高等女学校は甲南女子大学へと発展し創立一〇〇周年を祝うところです。（三）の鈴木大拙氏による東西の橋渡しは、大拙自身が創設した鎌倉の松ヶ岡文庫に加え、金沢市に鈴木大拙館が開設され多くの内外の訪問者を集めています。（一）の給費生は最終的に一五〇名に上り「一樹会」を結成されました。年齢的に最後の方が数名だけご存命の状態に至っていますが彌吉の墓や頌徳碑の維持に全員が寄与されました。

彌吉は「たいていの仕事は死んでしまえばすぐ忘れられる」としつつ、「何かその人でなくてはならぬ仕事をせねばならぬ。世道や人心に益するところがなくてはならぬ。後に残る仕事をせねばならぬ。」と言います（P19）。また老いを感じると「この世に出てきた甲斐のある仕事を何とかして後に残したいという心持が切なるに至った。」とも述べています（P52）。

甲南高等女学校の創設を中心に、以下、彌吉に誇りと生きがいを与えた事業を紹介して行きます。

一　甲南高等女学校と安宅彌吉

一・一　甲南と安宅彌吉との係わり

彌吉を甲南と結びつけたのは平生釟三郎です。彌吉は東京高等商業学校を卒業しており平生の後輩だったので自然な交流がありました。甲南学園は一九一二年財団法人として認可を受け、まず幼稚園と尋常小学校を運営します。平生を含む理事の多くは当時の兵庫県武庫郡（現在の神戸市東灘区）住吉村に拠点がある人たちで、彌吉もそうでしたが初めは参加していません。

『平生釟三郎日記』一九一五年八月六日の条に、平生と彌吉との昼食後の話が甲南学園維持問題に及び「彼はついに維持員の一人として最少の分担をなさんことを申告するに至った」と平生が書いています。平生の熱意ある取組みと勧誘説得の結果として、甲南に対する彌吉の認識や責任感が高まり、金銭的拠出を申し出たことの記録で関与を開始した日にちが正確に伝わります。三週間ぶりの降雨をもたらした低気圧が去り大阪の最高気温が三二℃を越えた快晴の金曜日のことでした。

この後しばらく、彌吉は学校経営の様々な側面（財政・人事など）を実地に即し学んでいきます。甲南中学校設立が課題となり彌吉は一九一八年に中学校設立基金三万円を拠出し翌年春の開校と共に理事の一員になり、学校経営とはいかに行うものかという経験を深めていきました。別稿の三宅先生の原稿を参照すると、三万円というのは現在の一億円以上に相当するようです。

一・二　甲南高等女学校の創設

平生釟三郎は七年制中高一貫教育や大学設立まで含めた長期的展望をこの頃から提示し構想面で甲南学園をリードしていました。ところが女学校設立にだけは積極的でなかったようです。

その深い理由までは分かりませんが、住吉村に既にあった別の女学校のことを依頼されたという記録もあります。大学設立に至る遠大で困難な構想があったので自分の財力や精力が分散することを恐れたのかも知れません。一方で一九〇九年一月生まれの彌吉の長女・登美子は甲南尋常小学校に通っていましたが女学校に進学する時期が一九二一年春に迫っていました。小学校は当時男女共学ですが甲南中学校に女子は入れません。彌吉には登美子の通う良い女学校が近くにほしいという強い願いがあり、この願いを共有する他の住民たちもいました。

もし平生がその気になりさえすれば、甲南高等女学校の創設に係わることは自然であり誰も反対しなかったでしょう。ところがその役回りは彌吉のところに来ました。平生は彌吉が甲南学園に係わる端緒と学校経営の実務的経験を与えたのに続けて、高等女学校設立を単独で行うチャンスまで提供してくれたことになります。彌吉は甲南高等女学校設立を主唱して実行し、登美子はそこに入学・卒業します。

理事会レベルの議論としては一九一八年六月三日の甲南中学校設立準備会で女学校併設も議題となりました。しかし「二兎を追って挫折する恐れを排除するため、まず中学校問題を先決し、その基礎が固まるのを待って女学校問題に及ぶ」ことを決めています。つまり「後回し」と正式に決定した事実があるのです。一九一九年四月、甲南中学校が開校し、平生は四月二七日、財力のあった久原房之助に報告しに行きました。この際、久原の質問に対し女学校設立には「経費として約三〇万円が必要」と答えていますが、具体的な計画やスケジュールを明言していません。

これに対し安宅彌吉は甲南高等女学校創設を主唱し単独の努力と寄付呼びかけによりスピード感をもって一九二〇年には誕生に至らせています。併行して校舎の建設を進め一九二一年一一月二七日には新築校舎落成を祝い有吉忠一兵庫県知事臨席のもとで式典が開かれました。彌吉は一九一九年に甲南高等女学校設立のため二万円を寄付し、翌年以降も社会貢献一般のために総額五万円ずつ毎年拠出していくことを期していました『回顧録』（一九二二）p.250。周りに拠金を実行させた証拠として、筆者の亡父・重雄が五〇〇〇円を寄付したことへの一九二〇年六月付けの感謝状が残っています。発行しているのは理事会計監督である安宅彌吉で、その次が理事長の田邉貞吉の名前です。

登美子への愛情という動機はあったにせよ「女子の高等教育という理想」と実行力との双方を彌吉が兼ね備えていたことは疑いないでしょう。この歴史の巡り合わせにより、甲南女子学園創立一〇〇周年に当たり、彌吉が唯一の創設者と見なされる栄誉に浴することとなっています。換言すれば甲南大学を含む甲南学園の創立一〇〇周年とは別にお祝いする理由が設立経緯の中にあるのです。甲南女子大学の独自性、独立性、特徴と言って良いかも知れません。



安宅彌吉・静子夫妻（奥）と、左から長女・登美子、次男・重雄、長男・英一。登美子が甲南高等女学校に入学した1921年前後に撮影。



感謝状

甲南高等女学校設立ニ際シ深厚ナル御情誼ヲ以テ金参拾五万円御醵出ノ趣奇特ニ被存候依テ茲ニ感謝ノ意ヲ表シ謝状并ニ記念品ヲ贈呈候也

大正九年六月廿日

甲南高等女学校
理事長兼理事 安宅彌吉
理事 田邉貞吉

安宅重雄殿

甲南高等女学校設立のための基本金醵出に対する感謝状。安宅重雄は彌吉の次男で当時満8歳なので、実際に自分で支出できたわけではない。しかし彌吉が周りから醵金を集めて回り基本金を作ったことが伝わる。

二　彌吉の側の事情

二・一　彌吉の財力事情

一九一四―一九一八年の第一次世界大戦により日本は未曽有の好景気に沸きました。運搬手段を提供する海運業を筆頭に、彌吉が従事していた貿易業も戦争特需により欧米諸国から多大の収益を上げることができました。これが、甲南高等女学校創設を独力で行うことを可能にした彌吉の財力の背景です。彌吉は一九〇四年に個人商店を設立しており、収益は意のままに使える立場にありました。大企業

の組織でなかったゆえ行使できた自由度とも言えます。

彌吉は一九二二年に『回顧録』で商業的な成功のいきさつを述べそれを周囲に幅広く配りました。苦労や失敗や失意も多いが一段落をみた成功譚です。従来の彌吉像は、彌吉自身がそこに記した文章を他者が再構成した面が強いと思います。もちろん本人以上に事実を知っている者はいないので、事実を述べる企業史や経済史としてはそれで十分です。ただ商業以外への関心は彌吉自身でもまだ客観視できておらず、甲南高等女学校開校のように進行中の事柄に向ける深い思いは言語化していません。ですから再構成する他者へは伝わりません。冒頭に記したように、それから一〇年以上あとに書き二〇年以上経って出版した文章では、事業の成功や金儲けの話はなく「生きてきて良かったと思うのは他人のために奉仕し社会貢献を行った思い出、三件である」と記すのです。

そのうちの二番目である「学校の世話」について具体的に言うと、甲南高等女学校の誕生が一九二〇年、校舎落成が一九二一年です。平生釟三郎によれば、彌吉が甲南学園に最初に私財を提供したのは一九一五年で一九一八―一九年の甲南中学開校にも金銭的に貢献しています。つまり時期的に、第一次世界大戦に起因する財産形成ができた一九一四―一九一八年と甲南への関与はほぼぴったり重なります。資本蓄積が彌吉の手許にあったわけでなく収入を右から左に費消した形です。それには社会貢献を熱心に説く平生釟三郎のような先輩経営者が身近にいて彌吉にロールモデルを示してくれたことの恩恵も大きいのでしょう。平生自身の言葉を借りると一九一八年八月一八日の日記に「金銭はよく集めよく散じてこそ社会国家に効力あり。」「富豪はその存在が社会の公益をなしてこそ尊重すべけれ、然らずんばこれなきに如かず。」です。彌吉にとっては収入が目的とかその使途を熟考のうえ選択したというより、社会貢献のための具体的計画と大きな金額が分かっており、実業による儲けの追求はそのための手段となっていたように思われます。平生からの働きかけ以前に、彌吉が元々もっていた社会貢献への理解と志向については三宅広明先生が生い立ちや経験や理想主義ややさしさの面から好意的かつ周到に別に解説して下さっています。

二-二. 彌吉のその他の財界活動と社会貢献活動

安宅彌吉は一九一七年に大阪商業会議所の会員になっており、この財界活動を継続して第一二代大阪商工会議所会頭（一九三五―四〇年）も務めました。また貴族院議員に選ばれ、関西財界出身で商工大臣に就任した同い年の小林一三に国会で答弁させたりもしています。もちろん主要な目的は大阪の商工業者が困っている問題を国政レベルで訴え解決を図ることにありました。

このほか、安宅彌吉は仏教学者・仏教哲学者である同郷の鈴木大拙と学生時代に知り合い大拙の生活と研究と著作出版活動を一九四九年に死ぬまで五〇年以上にわたって助けました。大拙が京都の大谷大学教授に就任するとベアトリス夫人らと住むための西洋館を近くに彌吉が建てて提供しました。その後の住まいであり研究拠点であった北鎌倉東慶寺境内の松ヶ岡文庫は彌吉らが第二次世界大戦の戦時中に建てたものです。大拙は禅をはじめとする仏教の考え方について英語で解説し、更に東洋思想を西洋人に知らせたいという大望のもとに紹介し、この点で東西の橋渡しという大きな役割を担うこととなりました。金沢経済同友会が金沢市に要望したことがきっかけで二〇一一年金沢市に鈴木大拙館が開設されました。この館は「大拙についての理解を深めるとともに来館者自らが思索する場として利用すること」を目的としており、金沢を訪れる内外の観光客をひきつけ続けています。大拙の影響を受けたり作品中で使ったりしている文学者には芥川龍之介、村上春樹、玄侑宗久、J・D・サリンジャーが含まれ、大拙に影響されたと明言している美術家に横尾忠則、音楽家にジョン・ケージと一柳慧がいます。すなわち大拙は著作・松ヶ岡文庫・鈴木大拙館を通して活発な影響を現代社会に与え続けていると言えます。

安宅彌吉が行った社会貢献には鈴木大拙の活動の意義を早くから認めて終生の友人として援助したことが含まれ、東慶寺の墓所には大拙夫妻と彌吉夫妻が隣同士の墓で眠っています。

二-三. 彌吉の言葉

あと、彌吉の遺産に自身の語った言葉や講演録が含まれるでしょう。甲南高等女学校で理事長として語った卒業式告辞は第七、八、九、一〇、一七、一八回のもの（一九三一年春から一九四二年春まで）が記録に残っています。これらはどこまで今日の若者の心に響くか、参考になるか分からないので、文字として残っているものがあるという指摘にとどめて置きます。

本稿の内容全体に関係することですが、彌吉には年下で若い人たちに語りたいという意欲があります。学校での良い教育を支援し、家庭では細心かつ丁寧な養育が望ましいと考えます。同時に大拙が目指したような東西の橋渡しとか英語での発信とか一流の目標やレベルも大事なことです。彌吉のこれらの関心と目標は、おそらく甲南女子大学や甲南女子中学校・高等学校が今日でも目指しておられるところと重なるのではないでしょうか。

結語

彌吉の遺産

彌吉が創業した安宅商会は、安宅産業と名前を変えたが残念なことに事業につまずき消滅しました。もう四〇年余り昔の話です。そのことの影響で思わぬ苦労をされたり迷惑を蒙ったりされた方々がたくさんおられると思います。

給費生の方々約一五〇名は幸いなことに金沢を中心に堅実な人生を送られました。甲南高等女学校は甲南女子大学および甲南女子中学校・高等学校として発展し創立一〇〇周年を祝い、優秀な卒業生と在学在校生の層および同窓会組織を有しています。鈴木大拙の名前は広く知られるようになり影響の及ぶ範囲も仏教にとどまらず文学・美術・音楽・哲学・思想・経営・茶道・華道・武道・料理などに広がっています。

彌吉と妻・静子（戸籍名奈良江）が訓育し芸術や音楽の素養を授けた長男・英一は独特の美意識に基づいて東洋陶磁のコレクションを形成し大阪市立東洋陶磁美術館の重要な基礎を与えました。

これらが現在まで残っている彌吉の遺産です。その中でも唯一の高等教育機関であり輩出した人材の数と質の点で圧倒的に重要な甲南女子学園の創立一〇〇周年を心からお祝いし、つぎの一〇〇年へ向けての歩みを祝福したいと存じます。


北鎌倉 東慶寺にある「安宅彌吉夫妻之墓」。筆者の長男　昇と長女（現姓西村）真佑子を入れ2008年初夏に撮影。


金沢市の大野湊神社にある安宅彌吉翁頌徳碑。左の写真は表の面、右の写真は裏の面左下部。文章は鈴木大拙が1957年に書き、文の右上方には彌吉のレリーフがはめ込まれている。2011年9月撮影。


東慶寺境内にある彌吉の頌徳碑。1966年に鈴木大拙の主唱により建立され大拙が文を作り「自安」を揮毫、円覚寺管長朝比奈宗源老師が文を揮毫された。


亡父・彌吉の墓に参る満73歳の長男・安宅英一。この墓は西宮市の海清寺にあり「自安居士」と刻まれていたが現在はない。1974年1月4日撮影。


和服姿の安宅静子。志村ふくみさんの自伝『一色一生』に言及がある。


鈴木大拙館の思索空間と水鏡の写真。鈴木大拙館提供。


鈴木大拙夫妻らのため、大谷大学のそばに彌吉が建てて提供した西洋館のファサード。大拙は1926年初春から1944年初めまでここを自宅とし数々の重要な著作を執筆した。この建物は現存し個人の住宅として使用され続けている。2019年撮影。

学園所蔵の文化財

図書館長　米田明美

貴重書・絵画・特殊文庫コレクション

甲南女子学園は、多くの彫刻・絵画などで彩られています。これらは多くの学生に芸術を身近に感じてもらいたいという思いからです。品性を磨き、教養や知識を広げる機縁となってほしいとの願いから、開学当時から特殊文庫やコレクション、世界的に見ても貴重な書物を収集しています。毎年秋に、様々な企画展示の形で、学生に観覧の場を設け、提供しています。

一、貴重図書類

紙面の都合上、メディアに取り上げられた『源氏物語』『古今和歌集』『シェイクスピア戯曲全集ファースト・フォリオ（初版本）』購入の経緯と解説を簡単に記します。他の貴重書に関しては、一部学園のＨＰ「貴重書ギャラリー」でも紹介しています。

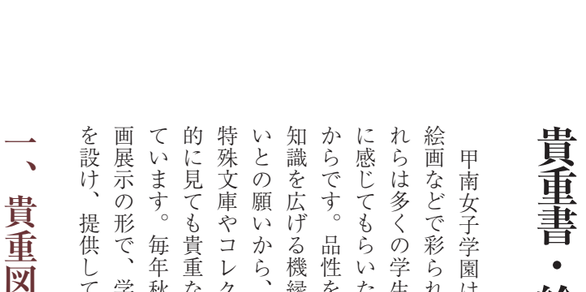
和書

一九七三年に『源氏物語　梅枝』（勝海舟旧蔵）『同　紅葉賀』を購入。この二冊は、源氏物語千年紀であった二〇〇八（平成二〇）年に詳細に調査され、源氏物語古写本群の中では最古級であることが判明しました。かつ幕末の軍艦奉行勝海舟旧蔵本であったことから、メディアで大々的に取り上げられました。

また二〇一〇（平成二二）年、所蔵している『古今和歌集』の古写本が、仮名序真名序の揃う完本としては最古の写本ということで、こちらも大きな話題になりました。

《文学》

○『古今和歌集』（伝慈円筆）二冊　鎌倉初中期書写　仮名序真名序を揃えた完本
○『源氏物語　梅枝巻』（伝藤原為家筆）一冊　鎌倉中期書写【紫式部】
○『源氏物語　紅葉賀巻』（伝藤原為相筆）一冊　鎌倉後期書写【紫式部】
○『詞花和歌集』一冊　室町中後期書写
○『こはたの時雨』（伝後土御門院勾当内侍筆）一冊　室町末期から安土桃山期書写
○『九代抄』（伝姉小路済継筆）二冊　室町中期書写
○『園塵　第一』（伝宗祇筆）一軸　室町後期書写
○『源氏小鏡』三冊　室町後期書写　『源氏物語』の梗概本
○『平家物語』一二冊　江戸前期書写
○『太平記（古活字版）』四〇冊　寛永元年版
○『承久記（じょうきゅうき）』一冊　江戸初期書写
○『曽根崎心中』一冊　元禄一六年版【近松門左衛門】
○『世間胸算用』一冊　元禄五年正月版【井原西鶴】
○『絵本忠臣蔵』一〇冊　寛政一二～文化五年刊【速水春暁斎作・画】
○『椿説弓張月（ちんせつゆみはりづき）』三〇冊　文化四～八年刊【曲亭馬琴・葛飾北斎画】


『源氏物語』（梅枝）

○『修紫田舎源氏』七六冊　天保二～一三年刊【柳亭種彦・歌川国貞画】
○『伊勢物語頭書抄』三冊　延宝七年刊

《本草学》

○『解体新書』初版本　五冊　安永三年刊【杉田玄白他】
○『蔵志』二冊　宝暦九年刊【山脇東洋】
○『一角纂考（いっかくさんこう）』一冊　寛政七年刊【木村孔恭】
○『勇魚取繪詞（いさなとりえことば）』三冊　文政一二年刊【益富又左衛門・小山田與清】
○『除蝗録（じょこうろく）』一冊　文政九年【大蔵永常】
○『鯨志』初版本　一冊　宝暦一〇年刊【梶取屋次右衛門】
○『本草図譜』六四冊　文政一三年～【岩崎灌園】
○『無病長寿養生手引草』二冊　安政五年【山東京山・安藤広重画】

《書簡》

○貝原益軒自筆書状　三葉
○小野蘭山自筆書状　一葉
○有島武郎自筆書簡　一通

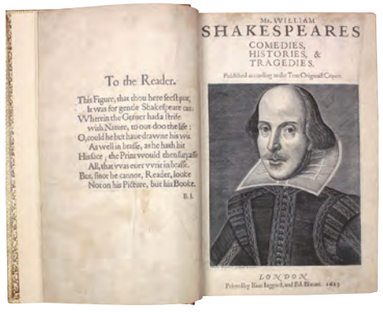
《錦絵・その他》

○掛け軸　「兄の喇嘛（らま）」「雷峯塔」各一軸　福田眉仙画
○掛け軸　「明治天皇御歌（校歌）」一軸　東郷平八郎書
○上方錦絵（役者絵）　七一五枚
○引札　三二枚
○版木　『大日本沙汰文（おやまとすなゆりぶみ）』七枚他に五枚　宝暦八年刊行
○古筆切（伏見天皇真筆・後鳥羽天皇真筆・藤原俊成真筆・藤原定家真筆など）一一葉
○「百人一首カルタ」一具
○双六　一面

洋書

第二代学長鰺坂は古今の貴重な図書類の蒐集に積極的で、まず一九七三（昭和四八）年にシェイクスピア戯曲全集の『セカンド・フォリオ（第二版）』を購入し、一九七八年には念願の『ファースト・フォリオ（初版本）』を購入。これで本学は全集の初版本から第四版まで揃うことになりました。このニュースは当時新聞などで大きく報道され、円高もあって売出価格の三分の一の値段で購入できたと伝えています。現在でも日本でほぼ完全な初版から四版までを所有しているのは、本学園を含め三大学のみです。

シェイクスピアの戯曲が全集というまとまった形で出版されたのは、彼の死後七年を経た一六二三年でした。これが有名なファースト・フォリオ（初版本 二つ折り本）です。シェイクスピア戯曲全集はその後も一六三二年、一六六四年、一六八五年にも出版され、それぞれセカンド・フォリオ、サード・フォリオ、フォース・フォリオと呼ばれ、世界の文化遺産とも言える極めて貴重な書物となっています。



シェイクスピア戯曲全集の『ファースト・フォリオ（初版本）』

《聖書・辞書》

○『（ヨハネス・グーテンベルク）四十二行聖書』（A Noble fragment being a leaf of the Gutenberg Bible）活版印刷の発明者とされるグーテンベルクが、一四四五年頃にドイツのマインツで印刷したラテン語の聖書の一葉
○『英語辞典』初版本　二冊　一七七五年【サミュエル・ジョンソン】

《文学》

○『カンタベリー物語（Chaucer's Canterbury Tales：the monks taleの一部）』八葉　一四七八年【ジェフリー・チョーサー】

○『シェイクスピア戯曲全集』初版本　一六二三年（二つ折り本　The First Folio）～四版【ウイリアム・シェイクスピア】
○『女性の権利の擁護』初版本　一冊　一七九二年【メアリ・ウルストンクラフト】
○『抒情民謡集』初版本（イギリス）　二冊　一七九八年【ウイリアム・ワーズワス】
○『分別と多感』初版本　三冊　一八一一年【ジェイン・オースティン】
○『高慢と偏見』初版本　一冊　一八一三年【ジェイン・オースティン】
○『自然論』初版本　一冊　一八三六年【ラルフ・ウォルドー・エマソン】
○『詩集』初版本　一冊　一八四七年【ラルフ・ウォルドー・エマソンの直筆サイン入り
○『リトル・ドリット』一九冊　一八五五年【チャールズ・ディケンズ】
○『ダーバーヴィル家のテス』三冊　一八九一～二年【トマス・ハーディ】
○『ウォルデン、または森の生活』初版本　一冊　一八五四年【ヘンリー・デイヴィッド・ソロー】
○『ファンショー』初版本　一冊　一八二八年【ナサニエル・ホーソーン】
○『緋文字』初版本　一冊　一八五〇年【ナサニエル・ホーソーン】
○『草の葉』初版本　一冊　一八五五年【ウォルト・ホイットマン】
○『悪の華』私家蔵版　一冊　一八五七年【シャルル・ボードレール】
○『ボヴァリー夫人』初版本　二冊　一八五七年【ギュスターヴ・フロベール】
○『サテュルニアン詩集』初版本　一冊　一八六六年【ポール・ヴェルレーヌ】
○『ロマン的な歌』初版本　一冊　一八九九年【ヘルマン・ヘッセ】
○『A bibliography of William Blake　by Geoffrey Keynes』一九二一年　二五〇部発行の内の一（日本ではこの一冊のみ）
○『ユリシーズ』千部限定エディションのうちの一冊【ジェイムズ・ジョイス】

《児童文学》

○『クリスマス・カロル』初版本　一冊　一八四三年【チャールズ・ディケンズ】
○『アンクル・トムの小屋』初版本　一冊　一八五二年【ハリエット・ストー】
○『トム・ソーヤーの冒険』初版本（アメリカ）　一冊　一八七六年【マーク・トウェイン】
○『ハックルベリー・フィンの冒険』初版本（アメリカ）　九冊　一八八五年【マーク・トウェイン】
○『まぬけのウィルソンの悲劇』初版本　一冊　一八九四年【マーク・トウェイン】トウェインの直筆サイン入り
○『くまのプーさん』初版本　一冊　一九二六年【A・A・ミルン作・EHシェパード　イラスト】ミルンのサイン入り
○ピーターラビットシリーズ『こぶたのピグリン・ブランドのおはなし』初版本　一冊　一九一三年【ビアトリクス・ポター】
○『きつねどんのおはなし』初版本　一冊　一九一二年【ビアトリクス・ポター】
○『まよなかのだいどころ』初版本　一冊　一九七〇年【モーリス・センダック】センダックのサイン入り

《書簡》

○ワーズワス自筆書簡　三六点　他
○トマス・ハーディ自筆書簡　他

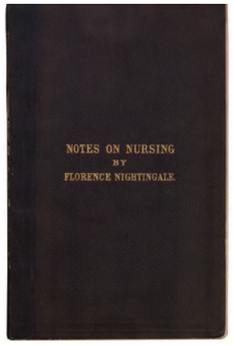
《被服》

○『ジュルナル・デ・ダム・エ・デ・モード』一七九七～一八三九年　全巻揃い


『ジュルナル・デ・ダム・エ・デ・モード』

《医学》

○『看護覚え書：何が看護であり、何が看護ではないか』初版本　一冊　一八六〇年【フローレンス・ナイチンゲール】



『看護覚え書：何が看護であり、何が看護ではないか』

○『病院覚え書』初版本　一冊　一八五九年【フローレンス・ナイチンゲール】
○『スポック博士の育児書』初版本　一冊　一九四六年【ベンジャミン・スポック】

《経済》

○『国富論』初版本　三冊　一七七六年【アダム・スミス】

二、絵画・彫刻

○「海望」【小野竹喬】
○「新雪」【山口華楊】
○「雨後清風来」【堂本印象】
○「裸婦」・「安宅彌吉肖像画」・「阿部孝次郎肖像画」【小磯良平】
○「合奏」【和田三造】
○「献花」【山本幸雄】
○「アパルトマンの窓辺」【笹倉鉄平】
○「森の風景」【J・デュブレ】
○「川辺の風景」【H・C・デルビー】
○「ファッションショー」【藤田嗣治】エッチング
○「大黒天尊像」【平櫛田中】木彫
○「海浜」【富永直樹】塑像
○「点字の聖書」他【荒木高子】陶芸


「点字の聖書」【荒木高子】陶芸

三、特殊文庫・コレクション

■ 学園の文化財(特殊文庫・コレクション)

特殊文庫・コレクション名	内容
寿岳文章文庫	英文学（W. Blakeなど）、書誌学
中西信太郎文庫	英文学（W. Shakespeareなど）
山本修二文庫	英文学、演劇
春日井真也文庫	社会学、宗教学
臼井二尚文庫	社会学
新明正道文庫	社会学
蜂谷昭雄文庫	英米文学、文学一般
森好夫文庫	社会学
Fritz Stückrath文庫	教育学、ドイツ哲学
Earl Miner文庫	英文学
Volkelt文庫	ドイツ哲学、教育学、心理学
William Matheson Collection	ドイツ文学（H. Hesse, T. Mannなど）
本城格文庫	フランス文学
芦原義重文庫	一般教養
野田又夫文庫	フランス哲学
上野益三文庫	博物学、本草学
細川景正文庫	浄瑠璃資料
鰺坂二夫文庫	教育学
本野亨一文庫	ドイツ文学
前野繁文庫	アメリカ文学
松林靖明文庫	日本古典文学（軍記など）
Mark Twain Collection	初版本、研究書
Collection of the American Transcendental Movement	アメリカ超絶主義
Jane Austen Collection	初版本、研究書
William Wordsworth Collection	初版本、研究書
Library of Children's Literature	児童文学
Late Victorian & Edwardian Novels Collection	後期ヴィクトリア朝、エドワード朝小説
Documents on Education in Germany from 1700 to 1870	ドイツ教育学関係
Rudolf Steiner Collection	教育学関係
Classics of Sociology	社会学関係
Ernest Hemingway Collection	初版本、研究書
Theatre Francais avant 1850	フランス演劇
Collection for Johnson's Study	言語学、S. Johnson関係資料
Education : a Collection of Fundamental Books on Education	教育学関係

清友会のあゆみ

清友会　元副会長　柳井容司子（高三〇　大国一七）

甲南女子学園清友会は、一九二六（大正一五）年に発足して、現在では同窓生五万五〇〇〇人を超える同窓会となりました。

今日までの歩みを『清友会創立五十周年記念誌』『甲南女子学園七十年の歩み』の清友会の変遷原稿及び清友会に現存する資料をもとに書き記しました。

清友会は、甲南高等女学校の、一九二五年三月の卒業生三二名の中から、同窓会設立の議が起こり準備期間を経て、翌一九二六年三月に同窓会発会式が行われ、初代会長に表甚六校長が就任し、五名の幹事を選出して発足しました。

一九二七（昭和二）年三月に会誌『清友』が創刊されました。同窓会はこれ以後その歩みを学校とともにし、諸行事にも参加協力を惜しまず活動しました。一九二九年六月四日の校旗制定式には、校友会（生徒会）に「校旗」を贈呈し、校訓の継承を要望しました。運営面では、会務分担を決め、また、定例総会他の同窓会の活動の基礎作りを行いました。

一九三三年四月二五日、東京支部が発足しました。

一九三七年九月に緊急評議委員会を開き、慰問袋制作と出征軍人の留守宅慰問を決定し、一〇月に慰問袋を発送しました。また、会の役割分担として、修養部、奉仕部、後援部、会誌部、庶務部、会計部を創設しました。

一九三八年七月五日に発生した阪神大水害は、母校に壊滅的な打撃をあたえました。母校の移転の問題があがり、ほどなく表校長より学校正門前の土地を同窓会に買い入れてほしいとの申し入れがあり、同窓会で検討を重ね、積立てていた基本金を投じて、母校財団に寄付することとしました。既存の家屋三戸のうち一戸を「清友園」として修築することとなりました。

同窓会から学校財団に対し、指定寄付の形をとり学校名義となりました。

一九四〇年九月に引き渡し完了ののち、同窓会館修築工事に着手しました。一一月の母校創立二〇周年記念式当日に開館式を挙行し、同窓会館すなわち「清友園」の表札を掲げました。

一九四一年、表会長の発案で給品部が開設されました。当初は、学校の事務室で扱っていた校章の販売が主でありましたが、順次、学校指定の品物を揃えていきました。ところが、時局柄、品不足が続き、さらに翌年からは、三割課税が実施されて文房具の販売に支障をきたしてきました。

国内で戦時色が強まり、「同窓会」として対外的な活動も強いられるようになりました。また、時局に対応した同窓会活動を余儀なくされることもありました。同窓生のなかで家族が応召されている方も多く、できる範囲の活動として、留守宅への慰問を積極的に行い、ともに力づけ、励まし合い、助け合って苦境を乗り切ろうとしたのでした。

一九四三年には、一二名の勤労報国隊への割り当てがきました。さらに翌年には、女子挺身隊も組織されました。このような非常時のなかで、同窓生同志や各地区に通信網と隣組をかねた組織がつくられ、同窓生の親睦を深めました。

一九四五年、甲南高等女学校は焼失しました。奇しくもただ一戸焼け残った清友園が甲南女子学園復興の根拠地となりました。表校長のあと着任された池田多助校長は「校舎は焼けたが甲南精神はほろびぬ」と関係者を励まされましたが、経済は混沌として日本国中が大混乱の最中でした。このようななか、母校再建に立ち上がったのが同窓会であり、女子学園復興の根拠地となったのでした。

まず、母校復興拠金の目的で、一九四六年七月に、ジョフ・ローゼンシュトック氏の演奏会を、そして一一月には、巌本真理氏のヴァイオリン演奏会を催しました。

母校復興の原動力となったのは、同窓生全員が総力で取り組んで実施したバザーでした。一〇月に第一回バザーが実施され、また、戦後すべての人が不自由な生活の中、役員、世話係が同窓生の家を探して訪ね、母校のために協力を頼みました。

そうして集められた寄贈品の数々は物不足の状況下で飛ぶように売れました。同窓生の努力が大きな収益金となったのです。このバザーの成功で勇気づけられ、母校に誕生した「甲南女学校復興会」にも協力し、それ以後長く母校復興のため努力することとなりました。

翌一九四七年に第二回バザーを開催しました。そして第三回からは、母の会（育友会の前身）と共催することになり、一九八一年の最後のバザーまで協力を惜しまず続けていきました。資金集めのための催し物を計画実践する一方で、幹事や役員は、校舎建設資金の寄付金募金のため慈善の精神で奔走しました。

一二月、第一校舎の落成式において、池田校長は同窓会に対して、「甲南の復興が成せたのは、当時の役員の努力と驚異的な情熱があったからだ」と、その奮闘と協力に対し、丁重な謝意を表されました。

一九四八年九月、同窓会は、会則を大改正し、それまで通称であった「清友会」を同窓会名としました。第三代会長に就任した沢田静子は、清友会の姿勢を、それまでの母校のための同窓会から「同窓生自身のための同窓会」に一新しました。給品部を再開し、購買部と改め、厚生部（制服部）の設立、文化部の発足など組織の再構成を行いました。設立された厚生部は、同窓生のために福利厚生事業の意を含み生徒の制服の制作に携わりました。文化部は、清友会員自身の修養を目的に発足して各分野で活動しました。

そして、戦中戦後に休刊となっていた同窓会誌「清友」も復刊しました。また、地区毎の連絡網を整理し、「清友会員名簿」の作成に着手し、一〇月に発行しました。

一九五〇年一一月、母校創立三〇周年記念式典が挙行され、清友会より校旗と寄付金を贈りました。

一九五四年、名古屋支部が発足しました。

一九五五年四月、甲南女子短期大学の開学に際し、お祝い金を贈り、一二月母校の食堂建設資金募集に協力するために演芸会を催しました。

戦後唯一焼け残った「清友園」は、あちらこちらに修理箇所が増えてきたため、一九六一年二月に、増改築を決定し、一二月に竣工、引っ越しをしました。そして、翌年一月に落成・祝賀会をしました。池田多助校長より自筆の絵画を、母校からは、机・椅子を寄贈していただきました。

一九六四年、女子大学開学。清友会からお祝いとしてグランドピアノを贈呈しました。開学式において、清友会に対し大学より感謝状が授与されました。

一九六五年、中学、高校の校舎移転の問題と清友園の土地建物の売却の問題が起きました。中高の土地の売却の条件として「清友園」の土地建物を同時一括売却する話でした。幹事会で話し合い、さらに評議委員会で議論の末、清友会の将来を考え、母校の意向に協力することに決定しました。そして、新しい清友園は、当時の鐘紡の寮地を建設場所と決めました。一九六八年二月、新同窓会館として起工式を行い、九月に竣工式と祝賀会を行いました。この年の四月に購買部を中高校舎内に移転しました。

一九七〇年、一一月、「母校創立五〇周年記念式典」と祝宴が挙行され、清友会からも多数出席し、お祝いとして、中高にアップライトピアノ、映写機一式、大学にマイクロリーダーを贈呈しました。

一九七一年、京都支部が発足しました。

以前よりの懸案事項であった、新築された「清友園」の所有権と名義については、一九七六年三月に、母校と清友会双方で確認の文書を取り交わしました。「登記上『清友園』の土地家屋は甲南女子大学に属し第二学生会館と称するが、これを永久使

用する権利を清友会は有する」という内容でした。

清友会は、母校への協力を惜しまない姿勢を変わらず続けてきました。母校行事にも可能な限り参加しました。とりわけバザーへの協賛や運動会への模擬店の出店は長く続けました。

一九七五年六月、清友会創立五〇周年を記念し、翌年春に記念式典などを行うことを決め、「清友会五〇周年記念委員会」を設けました。

委員会は何度も会合をもち、多種の計画案を取りまとめました。記念事業として記念式典・祝宴・記念講演会・清友の歌発表・会員の作品展示・記念親睦遠足を行いました。また、五〇周年記念事業として五〇周年清友会報記念号発行・五〇周年記念募金・母校への記念品贈呈・五〇周年記念誌編纂などの準備にはいりました。

一九七六年四月、「清友会創立五〇周年記念式典」を大阪プラザホテルで開催しました。辰馬久仁会長は、式辞の中で、過去五〇年を回顧し喜びを述べ、「母校関係者や同窓生の協力なくしての今日はない。そして今後の同窓会のあり方として、同窓生による同窓生のための同窓生の清友会を目指したい」と謝意を示されました。学校からのお祝いの返礼に、しだれ桜の植樹と記念アルバムを贈りました。又、五〇周年記念募金を募り、総額二〇〇万円を社会福祉施設に寄付しました。式典後は、祝宴、野坂昭如氏による記念講演会が行われました。また、「清友の歌」の発表も行いました。

翌一九七七年八月に『創立五十周年記念誌』を発行し、五〇周年の記念遠足も行いました。

一九七八年四月には、会則を大幅に改正しました。役員選出の方法を検討し、本部組織の体制を改編して、委員会組織を設けて各委員会の活動の取り組みを進め、それらを清友会活動の中心としました。また、五月に会館増築の地鎮祭を行い、一〇月に竣工式を行いました。

一九八二年九月、第一回ホームカミングデーが開催されました。

一九八三年、清友会会報を初めて海外へ発送しました（二四カ国・四六人）。

この頃、清友園内に資料室を設ける計画が始まりました。

一九八六年、旧師鈴木ミネ先生に二度の寄贈をいただき、清友園内に資料室を設置し、オープンしました。

一九八七年、九州支部が発足しました。会報誌の発行をこの年から三月とし、形式を冊子に変更しました。

一九八八年、四国支部が発足しました。同年、芦原講堂が竣工。竣工式前のホームカミングデーに同窓生は学園より招かれました。

一九八九（平成元）年三月、厚生部の制服制作を取りやめる事が決定となり、畑洋服株式会社に委託することになりました。

五月、第一回学年委員会を開催しました（一〇三名参加）

一九九〇年、学園は創立七〇周年を迎え、記念式典と物故者慰霊祭が行われました。清友会より記念樹を寄贈しました。

一九九一年、静岡支部が発足しました。

一九九四年一〇月、「清友会七〇周年記念事業特別委員会」を発足しました。

一九九五年一月に阪神・淡路大震災が起こり、学校の校舎は各所で損壊しました。清友園もあちらこちらに亀裂が入りましたが、建物は無事でした。しばらくは休館しましたが、一月三一日に再開することができました。四月に、建物の補修を学園にしていただき、震災で家を失った同窓生やご家族に清友園の一室を使っていただきました。

そして、五月一六日には、総会に併せて同窓会員の追悼式を行いました。一〇月には、全同窓会会員に震災被害調査の往復ハガキを発送しました。

一九九六年三月に、清友会は創立七〇周年を迎え、記念式典をロイヤルホテルで行いました。五月に「清友会震災記録委員会」を発足して、震災の記録誌「甲南のきずな」を作成しました。

同年、奈良支部と山陽支部が発足しました。

一九九七年、ホームカミングデーにおいて第一回バザーを開催しました。また清友会事務局にパソコンを導入しました。

一九九八年、購買部にファックスが設置され、学用品・文具の仕入れが円滑になりました。

二〇〇〇年、学園が創立八〇周年を迎えました。夏休みに購買部の改装工事を行いました。

二〇〇一年、清友会の資金協力金のお願いを会報誌「清友」で始めました。

二〇〇二年、総会を大学の学生会館で開催しました。また、ホームページを開設しました。

二〇〇三年、清友会が学生を支援する「清友会賞」を設定し、大学は二〇〇四年より学位証授与式に、高校は二〇〇五年より高校卒業式において授与しています。また、「甲南女子学園世界子ども基金クローバー会」の設立に参加しました。

二〇〇五年、「清友会創立八〇周年記念同窓会実行委員会」を設立しました。

二〇〇六年、「清友会創立八〇周年記念同窓会総会」をリーガロイヤルホテルで開催しました。『清友会会報八〇周年記念号』も発行しました。

二〇〇七年、ホームカミングデーにおける清友会バザーの名称を「清友のつどい」としました。

二〇〇八年、甲南女子中高生を中心に立ち上げ、和光会・清光会・育友会・清友会の協力で活動してきたクローバー会の募金で、バングラデシュに中学校を建設することができました。その後も机やイス、図書館に本などを寄贈する活動を続けています。

二〇〇九年、学園との共同出版で実現した『甲南女子Ｌｅｔｔｅｒ』を創刊しました。

二〇一〇年、「学園創立九〇周年記念式典」が行われ、学園と清友会合同で芦原講堂にて音楽会を催しました。

この年、「清友会を考える会」を立ち上げました。その後、「検討委員会」の名称になりました。

二〇一三年、学生への清友会からの奨学金制度を設けました。また、清友会の会旗・清友会ロゴを制作しました。

大学において、大学探検「甲南女子大学をよく知ろう」の共通科目を清友会が担当開始しました。後に、「大学を知るＡ」という科目に変わりました。

二〇一五年、清友会九〇周年事業の一環で中高新校舎にコピー機を一台寄贈しました。また、中高購買部にポスシステムを導入しました。

二〇一六年、清友会は創立九〇周年を迎え、七月に記念同窓会を神戸ポートピアホテルにて開催しました。『清友』も九〇周年記念号として、表紙を歴代表紙絵で飾り、付録に年表「清友の歩み」と栞を同封しました。また、清友会オリジナルバッグと、新旧清友園の写真がプリントされた「折りたたみメモ」を作成しました。

二〇一八年八月の台風二〇号において、清友園の建て増し部分に大量の水が入る被害があり、集会室一と二が使用不可能となりました。学園のご厚意により大人数の委員会などは大学の教室にて行っておりました。

学園創立一〇〇周年記念事業の一環として学園より老朽化した清友園の大改修工事を提案していただき、「甲南女子学園創立一〇〇周年記念特別委員会」を立ち上げて大改修工事やその他一〇〇周年関連行事準備にはいりました。また、学園の協力により清友会も名簿管理システムを新しいシステムに変更しました。

学園一〇〇周年記念募金活動にも積極的に協力していきました。

中高購買部の運営は、一二月末をもって清友会の手を離れ、中高食堂を経営する株式会社クールに事業が引き継がれました。

二〇一九（令和元）年六月、前年の台風被害により、清友園の改修工事より早い時期に大学内に事務局を引っ越し、委員会等を大学内で行っていました。

二〇二〇年一月より調査を含めた清友園の改修工事がスタートしました。

春からの世界的な新型コロナウイルス感染症の影響により二〇二〇年度は、総会をはじめほとんどの会議やイベントは中止若しくは延期となりました。

秋には改修工事を終え、新しい清友園が完成しお披露目となりました。

清友会も新しい形でスタートいたしました。

歴代理事長・校長・学長

2020（令和2）　1990（平成2）　1970（昭和45）　1920（大正9）

理事長

甲南女子学園



第8代理事長
中内　仁
2014年7月就任



第7代理事長
松下　正幸
2001年7月就任



第6代理事長
前田　義里
1994年7月就任



第5代理事長
芦原　義重
1978年4月就任



第4代理事長
阿部　孝次郎
1949年8月就任



代表理事
上田　要
1947年12月就任



第3代理事長
坂田　幹太
1946年6月就任



第2代理事長
安宅　彌吉
1926年1月就任



初代理事長
田邉　貞吉
1921年3月就任

校長

甲南女子中学校・高等学校　甲南高等女学校



第16代校長
岡田　明
2015年4月就任



第15代校長
清水　徇
2008年4月就任



第14代校長
大榎　茂行
2003年4月就任



第13代校長
采女　節子
1998年4月就任



第12代校長
片山　享
1994年4月就任



第11代校長
井野　辰男
1989年4月就任



第10代校長
宮城　宏
1985年4月就任



第9代校長
本野　亨一
1980年4月就任



第8代校長
三輪　和敏
1977年4月就任



第7代校長
鰺坂　二夫
1973年12月就任



第6代校長
有光　募
1969年4月就任



第5代校長
山本　榮喜
1958年11月就任



第4代校長
池田　多助
1945年11月就任



第3代校長
表　甚六
（初代専任校長）
1923年9月就任



第2代校長
今西　嘉蔵
1923年4月就任



初代校長
小森　慶助
1920年4月就任

学長

甲南女子大学　甲南女子短期大学（部）



第7代学長
森田　勝昭
2016年7月就任



第6代学長
松林　靖明
2011年4月就任



第5代学長
坪内　良博
2005年4月就任



第4代学長・
第5代短期大学部
学長
塩原　勉
1999年4月就任



第3代学長・
第4代短期大学部
学長
宮城　宏
1993年4月就任



第2代学長・
第3代短期大学
学長
鰺坂　二夫
1972年5月就任



第2代短期大学
学長
山本　榮喜
1958年11月就任
初代学長兼任
1964年4月就任



初代短期大学
学長
池田　多助
1955年4月就任

■ 生徒学生総数

（名）

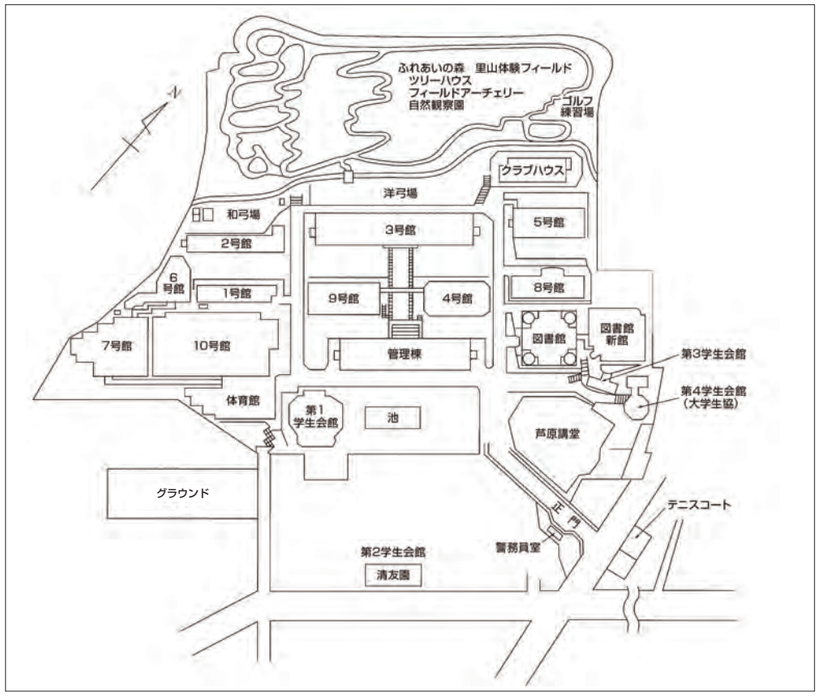
年度（西暦）	大学院	文学部	人間科学部	看護リハビリテーション学部	医療栄養学部	短期大学（部）	中高	計
1964		320				160	984	1,464
1965		544				155	1,001	1,700
1966		700				171	1,027	1,898
1967		826				170	1,006	2,002
1968		909				181	994	2,084
1969		925				184	985	2,094
1970		934				174	995	2,103
1971		953				173	991	2,117
1972		985				153	989	2,127
1973		1,150				145	1,019	2,314
1974		1,378				228	1,047	2,653
1975	7	1,699				337	1,069	3,112
1976	11	2,059				438	1,085	3,593
1977	12	2,195				523	1,074	3,804
1978	19	2,344				572	1,072	4,007
1979	32	2,369				591	1,076	4,068
1980	45	2,276				578	1,086	3,985
1981	62	2,382				606	1,085	4,135
1982	77	2,443				657	1,085	4,262
1983	80	2,480				679	1,096	4,335
1984	79	2,748				716	1,100	4,643
1985	75	2,910				632	1,102	4,719
1986	82	2,814				717	1,113	4,726
1987	92	2,890				867	1,116	4,965
1988	98	3,043				889	1,113	5,143
1989	91	3,169				978	1,104	5,342
1990	88	3,456				950	1,099	5,593
1991	91	3,592				929	1,102	5,714
1992	86	3,661				952	1,104	5,803
1993	98	3,700				973	1,102	5,873
1994	97	3,681				904	1,098	5,780
1995	99	3,742				839	1,096	5,776
1996	107	3,597				846	1,078	5,628
1997	109	3,516				842	1,069	5,536
1998	90	3,503				830	1,055	5,478
1999	71	3,402				713	1,034	5,220
2000	65	3,249				534	998	4,846
2001	83	2,952	404			207	971	4,617
2002	85	2,610	806			15	962	4,478
2003	78	2,268	1,154				951	4,451
2004	72	1,969	1,498				951	4,490
2005	79	1,770	1,471				953	4,273
2006	66	1,611	1,433				973	4,083
2007	58	1,452	1,515	142			975	4,142
2008	57	1,449	1,583	285			975	4,349
2009	52	1,524	1,674	468			991	4,709
2010	45	1,607	1,785	607			1,007	5,051
2011	33	1,628	1,810	660			1,024	5,155
2012	37	1,618	1,817	678			1,041	5,191
2013	40	1,617	1,830	685			1,048	5,220
2014	45	1,591	1,797	714			1,051	5,198
2015	34	1,599	1,773	702			1,056	5,164
2016	29	1,608	1,785	707			1,072	5,201
2017	33	1,625	1,774	687			1,092	5,211
2018	45	1,635	1,797	667	81		1,085	5,310
2019	48	1,639	1,883	669	158		1,088	5,485

【学園データ】

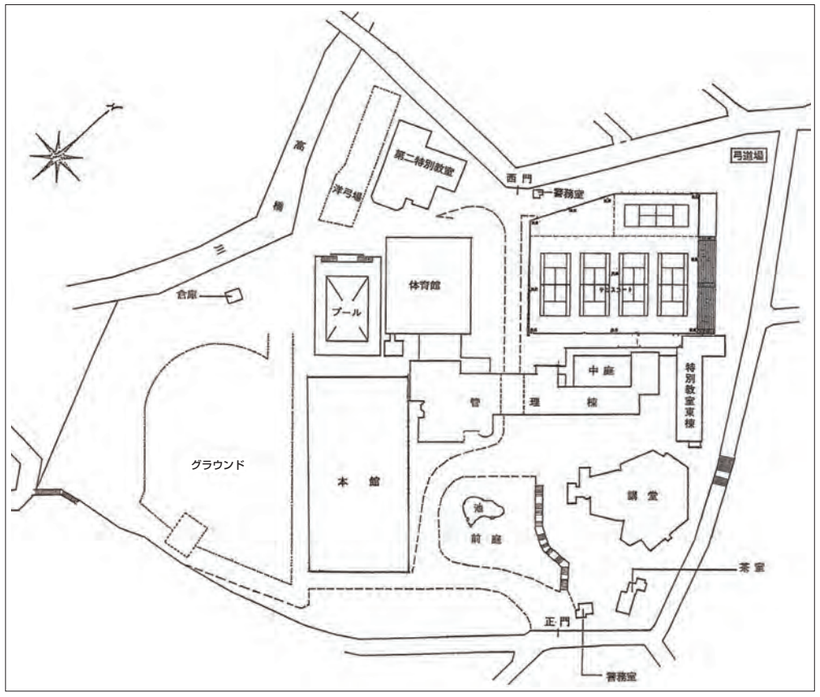
■ 甲南女子学園役員一覧（2021年1月1日現在）

理　事　長	中内　仁
副 理 事 長	森下　榮生
理　　事	樽本　和美
	長坂　悦敬
	小西　新右衛門
	角　　和夫
	宮原　秀夫
	近藤　三津枝
	平山　一哉
	奈良山　和子
	青井　さゆき
	森田　勝昭
	岡田　明
	馬場　伸彦
	野崎　志帆
	原田　隆司
	秋元　典子
	宇佐美　眞
	下村　雅一
	竹井　誠
監　　事	杉本　康
	阿部　奈穂子

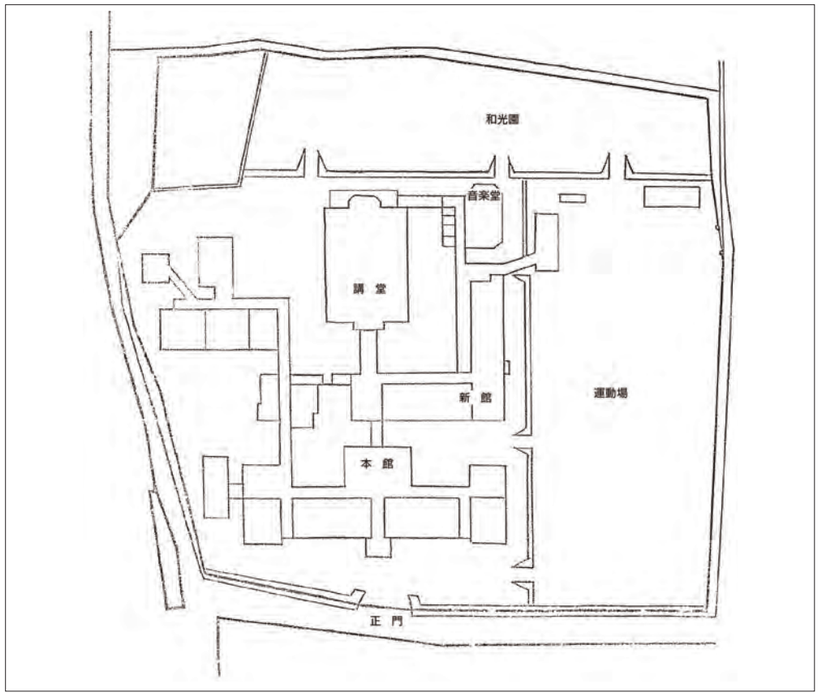
大学校舎配置図　2020年4月現在



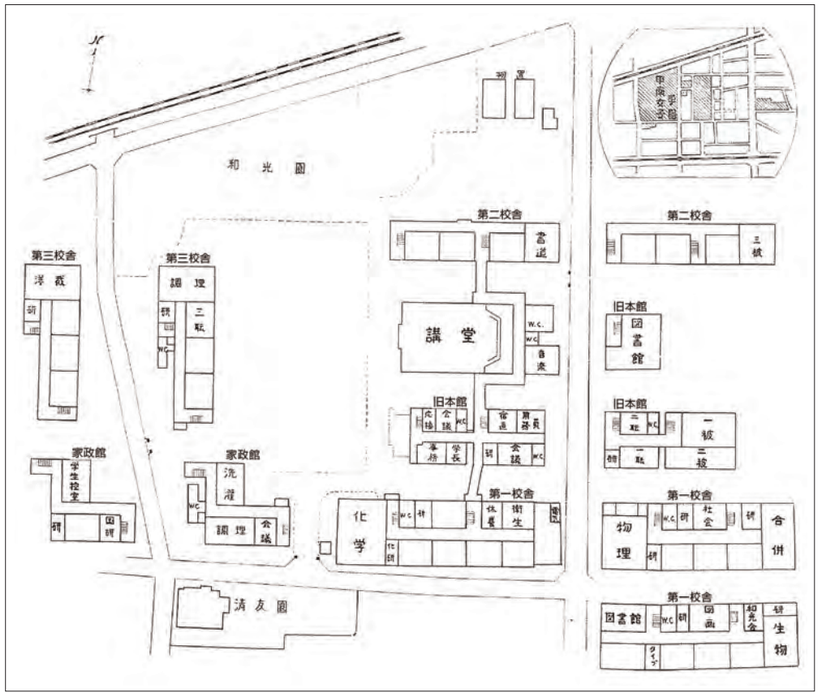
中・高校舎配置図　2020年4月現在



校舎配置図　戦前（1945年ごろ）



校舎配置図　戦後（1960年ごろ）



校舎配置図

【歴史年表】

一九一九年（大正八）
安宅彌吉が高等女学校設立を主唱。

一九二〇年（大正九）
甲南高等女学校設立認可。初代校長に小森慶助が就任。校舎はまだ無く、甲南小学校内の甲南幼稚園の二教室を間借りして開校。

一九二一年（大正一〇）
「財団法人甲南学園甲南高等女学校」設立認可。初代理事長に田邉貞吉が就任。

一一月二七日　校舎本館落成。同日を創立記念日とするのはここから。

第二代校長に今西嘉蔵が就任。

一九二三年（大正一二）
九月より第三代校長として広島県立福山高等女学校長・表甚六が就任。専任としては初代校長となる。以降在任二三年、建学の精神に基づき、独自の校風を樹立した。

制服を制定。セーラー服と決めたが形は決めなかったので生徒は各自の判断で色々なものを着た。徐々に形を統一し現在の形に落ち着いたのは昭和一〇年代。

一九二四年（大正一三）
校訓「清く正しく優しく強く」制定。校章を象徴化。

一九二五年（大正一四）
校友会を組織。会長は校長で、顧問は教師。学芸部・音楽部・園芸部・運動部・庶務会計部からスタート。戦後はその発展した形といえる生徒会に「和光会」と命名。

一九二六年（大正一五）
第二代理事長に安宅彌吉が就任。

同窓会を組織。会誌を『清友』とする。

校友会機関紙『和光』創刊。

一九二七年（昭和二）
新学習法「自学創造教育」設置。

校歌を制定。

家政科設置。高女五年生卒業後の希望者を受入れ。定員二〇名。翌三年には研究科と改称。

一九二九年（昭和四）
校旗制定。制定式実施。この際校旗は同窓生より寄附された。

一九三〇年（昭和五）
創立一〇周年記念式典を挙行。

一九三七年（昭和一二）
後援会成立。初代会長は朝日新聞社社長の村山長挙氏。

一九三八年（昭和一三）
阪神大水害発生。校舎埋没。登校していた生徒は表校長の判断により校舎内に留まったため、奇跡的に被害者はいなかった。校地北側の国鉄線で急行が立ち往生し、乗客が校内に避難、生徒・職員がこれを助けた。

水害で堆積した土砂をもって築山にし桜を植え「和光園」と称した。

一九四〇年（昭和一五）
文部省（現文部科学省）の指示により「校友会」の組織が全国的に廃止。和光誌の母体である自治組織も終焉し「報国団」を組織。

一九四二年（昭和一七）
旧制専攻科設置、発足。家事科・裁縫科を重点に、修身・国語・家政・理科・法制経済・商業簿記の七科目のカリキュラムを持つ。修業年限二年。

一九四四年（昭和一九）
都市疎開始まる。学徒勤労令公布。動員につぐ動員で、専攻科で退学者続出。表校長も「生徒の品位が日に日に下落して行く」と憂いた。

一九四五年（昭和二〇）
戦時教育令公布。近代教育は完全に停止。

六月五日　神戸大空襲により全校舎焼失。

芦屋仏教会館一階ホールを借り授業再開。月～金で毎日一学年ずつ授業し、土曜は焼け跡整理。その後打出の公会堂二階の講堂も借用。

表の後任に、広島高等師範学校第一回卒業生で表と同期の、兵庫県立神戸第一中学校長・池田多助が就任。焼け跡に立って「学校は焼けたが甲南精神は焼けていない」と就任挨拶。

生徒自治会復活「和光会」と命名。

一九四六年（昭和二一）
第三代理事長に坂田幹太が就任。

第一校舎建設前金捻出のため、同窓会が主催で第一回バザー開始。以降二回までは同窓会主催。

一九四七年（昭和二二）
教育基本法公布。男女共学の法制化。いわゆる六・三・三・四制の法制化。

甲南女子中学校併設認可。高等女学校一・二・三年が新制中学校一・二・三年に切り換え、義務教育となる。

一九四七年（昭和二二）
理事会・保護者会・維持会の連合会開催。理事会・後援会・維持会・同窓会で復興会を組織。

第一校舎が竣工。

一九四八年（昭和二三）
育友会（ＰＴＡ）結成、母の会は発展的解消。

新制高校設立認可。

財団名を「財団法人甲南学園甲南高等女学校」から「財団法人甲南女子学園」に変更。

一九四九年（昭和二四）
第四代理事長に阿部孝次郎が就任。

三月刊の和光五号に表前校長が特に一文を寄せ「和光」の意義を説く。

一九五〇年（昭和二五）
新制専攻科（家政科・英文科）開設。なお英文科は入学者なく第三回生で中止。家政科第四回生で廃止し、短期大学に引き継ぐ。

創立三〇周年記念式典にあたり、池田校長が「形式より精神が大切」と「精神復興」を強調。「本校の教育方針」として全人教育、個性尊重、自学創造の学風、精神教育、科学教育の振興、外国語教育と世界精神の強調、の六点を示す。

一九五一年（昭和二六）
財団法人から学校法人に切り換え。一九四七年の学校教育法および一九四九年の私立学校法の定めによる。

四月から、高等学校一年三学級編成（一学級四五名）。

生徒による短期大学設置の署名活動が始まる。

一九五二年（昭和二七）
生徒の手で「私達の約束」を作成。学校という社会の秩序を保ち、甲南精神を実現していくのに必要な事項を集約したもの。

中学校一年三学級に編成（一学級四五名）。

一九五四年（昭和二九）
保護者アンケートで大多数が短期大学設置を希望、理事会も設置を決定。

「甲南精神」を知らせるため、創立三〇周年誌から抜粋し、一部原稿を追加して『甲南の道』を刊行。

一九五五年（昭和三〇）
第一回甲南三学園音楽会を開催（サンケイホール）。

甲南女子短期大学が開学。家政科を開設（定員四〇名）。初代短期大学学長・池田多助は英文科併設を考えたが断念。

一九五五年（昭和三〇）
「中学・高校で甲南常識を、短大で甲南良識を」チャコールグレーの制服は学生達のデザインによる。清光会発足。

一九五六年（昭和三一）
短期大学に国語科を開設（定員四〇名）。

一九五八年（昭和三三）
第五代校長、第二代短期大学学長に山本榮喜が就任。

一九六〇年（昭和三五）
国語科を国文科に改称。

創立四〇周年記念式典を挙行。

一九六一年（昭和三六）
理事会にて創立四〇周年記念事業として、学園拡充計画を決定。内容は敷地買収と短大学舎新築および中学校・高校学舎の改築。

育友会会長らが四年制大学設置を理事長・学長に強く要望。

一九六三年（昭和三八）
甲南女子大学設置認可（文学部国文学科二・三年次、英文学科二年次同時認可）。

一九六四年（昭和三九）
短期大学国語科を廃止。

甲南女子大学が開学。文学部に国文学科と英文学科を設置（定員各一〇〇名）。

一九六四年（昭和三九）
大学は本山町森字坂下町一四（現所在地）の新学舎に移転。その地を清心台と称す。

中学校入学定員を一六〇名とする。

一九六六年（昭和四一）
初代学長に山本榮喜が就任（短期大学学長・校長兼任）。

大学開学式を挙行。

一九六七年（昭和四二）
第一回シェイクスピア祭（英文学科）。

清心寮（一二二名収容）が竣工（大学）。

一九六八年（昭和四三）
中学校・高等学校、本山町森字山田四（現所在地）の新校舎に移転。その地を和光台と称す。

同窓会館「清友園」が竣工。

一九六九年（昭和四四）
山本榮喜が校長を退任。後任は元高津高等学校長の有光募が就任（第六代）。

一九七〇年（昭和四五）
創立五〇周年記念式典を挙行。

一九七一年（昭和四六）
大学司書課程を設置。

一九七一年（昭和四六）

第一回国文学夏期講座を開催（毎年一回開催し、第一四回をもって終了）（大学）。

『大学だより』『学生部ニュース』創刊（大学）。

一九七二年（昭和四七）

山本榮喜学長が退任。第二代学長・第三代短期大学学長に鰺坂二夫が就任。

第一回家政科生活科学講座を開催（三回で終了）（短期大学）。

一九七三年（昭和四八）

中学校入学定員を一八〇名（一学級四五名、四学級編成）とする。

大学推薦入学試験を開始。

第七代校長に鰺坂二夫が就任（大学学長・短期大学学長兼任）。

一九七四年（昭和四九）

英語科新設に伴い大学二号館が竣工。

短期大学を短期大学部に改称、短期大学部に英語科を開設（定員一二〇名）。

黒部山の家（長野県大町市郊外）が竣工。

神戸市建築文化賞を受賞（大学）。

一九七五年（昭和五〇）

人間関係学科新設に伴い大学五号館が竣工。

大学院文学研究科（修士課程）国文学専攻・英文学専攻（定員各五名）を開設。

文学部に人間関係学科を開設（定員一〇〇名）心理学専攻、教育学専攻、社会学専攻）。

学芸員課程・社会教育主事課程を設置（大学）。

大学体育館（猪崎記念体育館）が竣工。

大学開学一〇周年記念式典を挙行。

一九七六年（昭和五一）

六甲山学舎を開設。

大学新図書館（阿部記念図書館）が竣工。

大学キャンパス内に松影寮（五六名収容、現クラブハウス）が竣工。

清友会（同窓会）創立五〇周年記念式典を挙行。

一九七七年（昭和五二）

大学院文学研究科博士後期課程国文学専攻・英文学専攻（定員各二名）を開設。

一九七七年（昭和五二）

第八代校長に三輪和敏が就任。

中・高等学校第二特別教室棟が竣工。

大学六号館が竣工。

一九七八年（昭和五三）

第五代理事長に芦原義重が就任。

文学部にフランス文学科（定員四〇名）を開設。

中学校・高等学校、帰国子女受入れを開始。

大学第三学生会館が竣工。

甲南女子高等学校研究紀要を創刊。

第一回時代衣装着装会を開催（大学）。

大学新「松影寮」が竣工（一〇八名収容）これにより保久良寮が閉寮。

大学院文学研究科修士課程社会学専攻・教育学専攻（定員各五名）を開設。

一九七九年（昭和五四）

大学院文学研究科修士課程心理学専攻（定員五名）を開設。

第九代校長に本野亨一が就任。

創立六〇周年記念式典を挙行。

一九八一年（昭和五六）

大学院文学研究科博士後期課程社会学専攻、教育学専攻（定員各二名）を開設。

学園発祥の地に記念碑を建立。

三笠宮殿下・妃殿下御来臨。特別学術講演「古代メソポタミア文明と旧約聖書『ノアの洪水』を中心として―」。

一九八二年（昭和五七）

大学院文学研究科博士後期課程心理学専攻（定員二名）、大学院文学研究科修士課程フランス文学専攻（定員五名）を開設。

第一回ホームカミングデーを開催（大学）。

第一回フランス演劇祭（フランス文学科）。

一九八〇年（昭和五五）

大学院文学研究科修士課程心理学専攻（定員五名）を開設。

中学校・高等学校のバザー最終回（全三八回）。

研究館別館が竣工（大学）。

一九八四年（昭和五九）

短期大学部家政科に食物栄養専攻及び生活科学専攻を開設。

短期大学部家政科に栄養士養成課程が設置されたことに伴い七号館が竣工。

短期大学部家政科栄養士養成課程を設置。

大学院文学研究科博士後期課程フランス文学専攻（定員二名）を開設。

芦原学術研究奨励基金を設立。

大学第四学生会館が竣工。

一九八五年（昭和六〇）

大学開学二〇周年・大学院フランス文学専攻博士後期課程開設を記念してロダン「考える人」（複製）設置。披露除幕式。

一九八七年（昭和六二）

第一〇代校長に宮城宏が就任。

皇太子殿下、皇太子妃殿下（現上皇陛下、上皇后陛下）行啓。

一九八八年（昭和六三）

英文名称を College から University に変更（大学）。

芦原講堂竣工。

一九八八年（昭和六三）

短期大学部に衣料管理士、秘書士課程を設置。

一九八九年（平成元）

第一一代校長に井野辰男が就任。

一九九〇年（平成二）

芦原講堂が第一四回「hiroba 作品賞」の最優秀作品に選出される。

芦原講堂が第六回神戸市建築文化賞を受賞。

一九九二年（平成四）

創立七〇周年記念式典・創立七〇周年物故者慰霊祭を挙行。

芦原講堂にデンマーク・マルクッセン社によるパイプオルガンが完成。四月に完成披露演奏会。

八号館（メディアセンター）が竣工。

スクールバス乗場を設置、運用開始。

一九九三年（平成五）

第三代学長・第四代短期大学部学長に宮城宏が就任。

図書館新館が竣工（大学）。

一九九四年（平成六）

第一二代校長に片山享が就任。

一九九四年（平成六）

第六代理事長に前田義里が就任。

一九九五年（平成七）

阪神・淡路大震災発生。在学生一名が犠牲となる。校舎も被害を受け、芦原講堂内パイプオルガンが全壊（一九九八年に復旧）。中・高校は避難所となる。

セメスター制実施（大学）。

一九九六年（平成八）

甲南女子大学生活協同組合が開業。

一九九八年（平成一〇）

第一三代校長に采女節子が就任。

国際子ども学研究センターを開設（大学）。

一九九九年（平成一一）

第四代学長・第五代短期大学部学長に塩原勉が就任。

清心寮をグラウンドに用途変更（大学）。

二〇〇〇年（平成一二）

創立八〇周年記念式典を挙行。

二〇〇一年（平成一三）

九号館が竣工。

文学部に多文化共生学科（定員九〇名）を開設。コモンルームを設置。

二〇〇一年（平成一三）

文学部学科名称を変更。国文学科→日本語日本文学科、英文学科→英語英米文学科、フランス文学科→フランス語フランス文学科。

人間科学部を開設（心理学科：定員九〇名、人間教育学科：定員八〇名、行動社会学科：定員八〇名、人間環境学科：定員八〇名）。

甲南小学校、甲南高等学校・中学校とともに文部科学省による研究開発校の指定を受け「環境教育」への取り組みを始める（中学校・高校）。

第七代理事長に松下正幸が就任。

二〇〇二年（平成一四）

心理相談研究センターを開設。

短期大学部を廃止。

二〇〇三年（平成一五）

大学院研究科の名称を文学研究科から人文科学総合研究科に変更。国文学専攻を日本文学専攻に名称変更。

第一四代校長に大榎茂行が就任。

清友会賞を制定。

二〇〇四年（平成一六）

大学学生生活支援システムによるシラバス閲覧と授業登録を開始（大学）。

資格サポートセンターを開設（大学）。

二〇〇五年（平成一七）

第五代学長に坪内良博が就任。

大学院人文科学総合研究科を三専攻九コースに改組・再編。言語文学専攻（博士前期・後期）、心理・教育学専攻（博士前期・後期）、社会・文化環境学専攻（博士前期・後期）。

学生プロジェクト二一（現 学生プロジェクト応援基金）を制定（大学）。

二〇〇六年（平成一八）

第一回ベストティーチャー賞（二〇〇五年度）（大学）。

文学部にメディア表現学科（定員六〇名）、人間科学部に総合子ども学科（定員一二〇名）を開設。

総合子ども学科に保育士、幼稚園教諭課程を設置。

神戸市東灘区との間に「地域連携協力に関する協定」を締結（大学）。

二〇〇七年（平成一九）

看護リハビリテーション学部（看護学科（定員七五名）、理学療法学科（定員六〇名））を開設。

看護師・保健師・助産師養成課程、養護教諭課程、理学療法士養成課程を設置（大学）。

看護リハビリテーション学部専用棟の新一号館が竣工。

総合子ども学科に小学校教諭課程を設置。

クローバー会の募金活動によってバングラデシュに学校を建設（同窓会）。

二〇〇八年（平成二〇）

教育理念、ブランディング、社会化・社会貢献などの一四項目からなる『中期ビジョン』の発表。（大学）

学科名称を変更。日本語日本文学科→日本語日本文化学科、多文化共生学科→多文化コミュニケーション学科、行動社会学科→文化社会学科、人間環境学科→生活環境学科。

第一五代校長に清水徇が就任。

Sアドバンストコース（Sアドコース）とスタンダードコースからなる二コース制に移行（中学校・高校）。

二〇〇八年（平成二〇）

大学に収蔵されている『源氏物語』（梅枝の巻）が、写本としては現存する中で一番古く「別本系」であること、また、勝海舟の蔵書印があり、幕末明治に活躍した軍艦奉行海舟の愛読書であったことが判明。

二〇〇九年（平成二一）

日本高等教育評価機構による認証評価を受審（大学）。

二〇〇八年三月発表の「中期ビジョン」を受け、「甲南女子学園中期計画」を策定。

Konan Clover House を開設（大学）。

甲南保育園を開設。

甲南大学との単位互換を開始（大学）。

社会貢献室と国際交流室からなる対外協力センターを開設。

ＡＮＡ総合研究所との提携によるエアラインプログラムを英語英米文学科に開講。ＡＮＡルームを開設（大学）。

文部科学省による学生支援推進プログラムとして「キャリアノートによる社会人基礎力・人間力涵養プロジェクト」が採用される（大学）。

二〇一〇年（平成二二）

図書館とメディアセンターを統合（大学）。

甲南女子大学ふれあいの森・里山体験フィールドを整備し、ツリーハウスなどを設置（大学）。

大学に収蔵の『古今和歌集』が現存する完本としては最古の部類に属する鎌倉初期の写本であることが判明。

学園創立九〇周年記念式典を挙行。

二〇一一年（平成二三）

第六代学長に松林靖明が就任。

二〇一二年（平成二四）

大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）を開設。

文学部学科名称を変更。英語英米文学科→英語文化学科。

第二次中期計画を策定。

中学校・高校新校舎が竣工。

二〇一四年（平成二六）

第八代理事長に中内仁が就任。

二〇一五年（平成二七）

第一六代校長に岡田明が就任。

二〇一五年（平成二七）
第三次中期計画を策定。

二〇一六年（平成二八）
甲南保育園、幼保連携型認定こども園に移行のため甲南こども園となる。
第七代学長に森田勝昭が就任。

二〇一八年（平成三〇）
一〇号館が竣工。
大学院看護学研究科看護学専攻（博士後期課程）を開設。
大学院看護学研究科修士課程を大学院看護学研究科博士前期課程に改称。
医療栄養学部（医療栄養学科（定員八〇名））を開設。
管理栄養士養成課程、栄養教諭課程を設置（大学）。
第四次中期計画を策定。
大学の三号館、管理棟や渡廊下が登録有形文化財に登録される。
中高グラウンドの人工芝化を完了。

二〇一九年（平成三一・令和元）
大学構内の歩道改修を完了。
大学正門の整備工事を着工。
学園コミュニケーションマークを制定。
国際学部の開設に向けて認定留学に関連する全規定を改定及び制定。

二〇二〇年（令和二）
新型コロナウイルス感染症に対する危機管理として、リスクマネジメント委員会を立ち上げ感染防止対策を実施。中高は臨時休校、大学も登学禁止措置を取り、学位記授与式、各種行事等を中止。
甲南女子大学学長業績評価規程の制定。
国際学部（国際英語学科（定員一一〇名）・多文化コミュニケーション学科（定員八〇名））を開設。
中学・高等学校校舎等が登録有形文化財へ登録。
大学マスコットキャラクターを公募の上決定。
同窓会館「清友園」が竣工。

オリンピックを彩った同窓生











❶**平松（上野）純子**〈フィギュアスケート〉
一九六〇年
スコーバレーオリンピック

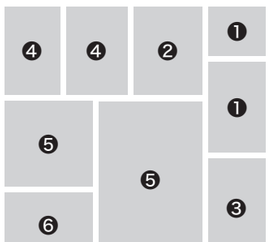
❷**河合（弘世）初子**〈高飛び込み〉
一九六四年
東京オリンピック

❸**佐藤（藤田）正子**〈アーチェリー〉
一九八〇年
モスクワオリンピック選考代表
（写真はベルリン世界大会）

❹**中村（池田）裕紀子**〈アーチェリー〉
一九九二年
バルセロナオリンピック

❺**武田 麗子**〈馬術障害飛越〉
二〇一六年
リオデジャネイロオリンピック

❻**上原 瑠果**〈アーチェリー〉
二〇一八年
ブエノスアイレスユースオリンピック



※（ ）は旧姓

編集後記

二〇二〇年一一月

二〇二〇年、甲南女子学園は創立一〇〇周年を迎えた。創立の年一九二〇年は、大正デモクラシー運動が起こり、女子教育充実が叫ばれた時代であった。と同時に、実はスペイン風邪が世界中で蔓延していた年でもあった。その後、一九三八年は阪神大水害によりほとんどの校舎が埋没、一九四五年は神戸大空襲により全校舎が焼失した。一九九五年は阪神・淡路大震災と大きな災害に見舞われている。その間も歴史に名を遺す大不況に幾度も遭遇している。一口に一〇〇年と言っても、各時代時代で本学園を必死に守り支え続けた教職員、在学生・在校生、卒業生、そして保証人・保護者の方々の懸命な努力があったからこそ、この年が迎えられているとしみじみ思う。

この二〇二〇年は、新型コロナウイルス感染症が世界中に拡大、各国とも経済活動自粛、東京オリンピック・パラリンピックさえ延期となった。災害の一つとして記録されることになるだろう。

神戸大空襲で全校舎が焼失した時、焼け跡に立った池田多助校長は「学校は焼けたが甲南精神は焼けていない。これからは棘の道には違いないが、多年長養した甲南精神には一難来る毎に鍛えられて益々強くなる素直さがある。甲南の伝統を一つ一つ掘起こして自信をもって発揮していきましょう。その内に皆とともに必ず今日の試練を感謝すべき日が来ると信じます」と訴えた。現在の私たちをも鼓舞する言葉である。

末筆になりましたが、快く執筆して下さった教職員の方々、同窓生の方々、その大量の原稿を査読して下さった編集チームの方々、そして何より大変な雑務をこなして下さった広報課の皆様方、凸版印刷株式会社には心より感謝申し上げたい。すべてにおいて「感謝」の言葉で締めくくりたい。

輝く力、輝かせる力。
甲南女子学園100周年記念誌

発　行　日　2020年11月27日
改　訂　日　2021年9月27日
発　　行　学校法人甲南女子学園
　　神戸市東灘区森北町六丁目二番二三号

編　　集　100周年記念プロジェクトブランディングワーキングチーム
　　記念誌編纂PJ編集チーム

印刷・製本　凸版印刷株式会社